
とある魔術師と能力者達

舞月音子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術師と能力者達

【Nコード】

N2229K

【作者名】

舞月音子

【あらすじ】

予告：息抜き程度に今度から番外編みたいな投稿していきます。それにとまって完結済を連載中に戻しますので、期待してください。ると嬉しいです。

尚、リクエスト等がありましたら感想にお願いします。
次作

「二人の魔術師の住む世界」

URL: <http://ncode.syosetu.com/n>

6
7
3
3
1
/

序章『魔神の力を持つ少年』（前書き）

序章です。

どうか感想お願いします。

そして、各小説でキャラの性格が崩壊していても
自重しません、というより出来ないのをご注意ください

序章『魔神の力を持つ少年』

「侵入者発見、これより迎撃する」

氷のように冷たい声で、私兵団のリーダーは言っと、周りにいる部下に命令を出す。一斉に彼等は自動小銃の銃口を侵入者——漆黒の髪に同色の瞳、肉付きは良いものの、全体的には華奢な体つきの青年に向ける。長袖の黒いシャツの裾を出し、白色のチノパンを穿いているごく一般的な少年にでも、彼等は銃口を向けた。

それは、この場所が学園都市でも有数の豪邸で、そこに住んでいるのが学園都市でも有数の権力を誇る男だからだ。彼は、気を許した相手にしか家に入れない。そのためにも、数は三桁ほどに上る私兵団を家の各所に配置している。だが、その壁はあっけなく突破された。

この、目の前にいる青年の手によって。

その青年は、唇の端を歪めると、彼は両手を真横に伸ばした。それは十字架のようにも見えたが、銃口を向ける彼らに、いいしれぬ恐怖を与えた。その中の一人が引き金を引く。発砲音をきいて、その仲間も次々に引き金を引く。フルオートで放たれた弾丸の合計は二百発、それを人間が回避できることが出来るはずがない。

「俺には銃弾は効かないね」

その言葉と同時、銃弾が全て溶けた。それがなんのためかは、一目瞭然。——青年の背中からは、地獄の業火のような翼が生えていたのだから。といっても、それが炎によるものではなく、ドロドロとした噴出するものだと言うものを理解するより早く、彼らはその翼になぎ払われていた。

不思議なことに、彼らは致命傷を受けていなかった。だが、武器は消え去っており、腕が持つて行かれたもの、腹部がえぐり取られたものなど、様々だ。

青年は、彼らが悲鳴をあげるより早く接近し、ダガーを振るい、確実に命を絶つていく。あたりは血の海と化しており、そんな彼は悲鳴のBGMを聴きながら、それを気にもせずに殺戮を繰り返す。

圧倒的。30を越す数のあつた私兵団は、すでに壊滅状態にあつた。その様子を監視カメラで見ていた男は、別の場所に待機していた部隊に連絡を入れる。

「ポイント8-Sが襲撃された。敵の数は一つ、だが、大能力者以上の能力を持つている。全員、全力での進撃を止めろ」

了解、と各方向から返事が帰ってきて、彼はひと息つく。地下階にあるこの場所は狙われることはないだろうと彼は安心していった。ここは見取り図には載っていないし、正式なルートを通らなければ地雷原を突き進まなければいけないということを知っているから、彼は置いてあつたコーヒーを取ろうとして、

自分の胸を貫いたものに、気づくことが出来なかった。

「——え？」

素っ頓狂な声を上げて、彼は自分の胸を見る。そこから突き出ているのは、赤く濡れた刃。その刀身の長さからみて、それがダガーによるものだと、武器に精通していた彼は思った。

「地雷原とはこりやまた痛かったぜ、アンタ。——ま、どうせ死ぬんだから、あまり気にせず死んでくれや。死期が早まっただけさ」

真後ろから響いたのは、先程まで見ていた戦闘を繰り返していた青年のものだと気づく前に、男の意識は埋没していった。

青年は尻尾を見せてはすぐに消えていき、部隊を一箇所に集めることに成功した。だが、そんなことを知らない部隊の男たちは、最終的には一つの場所に敵がいるという確信を持つて、武器を構えてあたりを見回す。しかし、彼らのミスは『一箇所に集中しすぎた』ことだ。

彼らの後方五メートルに、青年は姿を現した。先程までいなかったのに、その場に前から居たかのように、唐突にでてきたため、男たちは反応が遅れた。

「――滅」

それには、強大な魔力が込められていたということを、魔術を知る人間がその場に居たなら言っただろう。それも、それは魔術ではなく魔法の域と化している。

なぜなら、その言葉が発せられた瞬間に、敵は真つ黒の粒子と化していたからだ。それはどこからか吹いてきた気まぐれな風に連れていかれ、その形をなくした。それをみて、青年は顔に笑みを貼り付けたまま、その場から離れた。彼が向かっていたのは、この館の主のいる場所だ。

「さて、いい加減挨拶でもするか」

そう言つて、彼はその場から消えた。

「く、来るなつ、化物オ！」

床に尻について、金のかかつていそうな服を着ていた男は壁に背中をつけると、恐怖に塗りつぶされた表情で男入った。彼がこの館の主。そして、彼は部下に取り付けた発信機の反応が消え去った時

から、部屋でガタガタと震えていた。

そこに、件の青年が虚空から現れた。空間移動者のように点と点で動く彼がいつ来るか解らなかったが、いざ来た途端に彼はそう言っていた。だが、青年は見下した瞳で男を見る。

「人をさんざん殺しておいて、オマエは我が身第一か。——ま、人間ってのはそんなもんさ。それが無能力者を狩るものだったとしても、本質では変わらない。生存本能と殺戮本能。動物には当たり前のようにあるモノだよ」

男は、無意味に狩を行うものだった。イギリスでは狐狩りが貴族の風習だったが、学園都市の一部の富豪層では流行っていた。無能力者は学園都市の社会から拒絶された者——不良集団が多く、それは悪事を働く者が多い。

上層部はそれを無視しているが、不良集団の中に学園都市の間に触れたものが少ないとは言えない。そのため、上はそれをどうにかしなければいけないのだ。だが、直接的には極力手を出したくない。それを代行するという名目で、狩りを行うものが現れた。それが、金が残った富豪たちである。

学園都市の暗部には関わっていないく、それでも、上層部に役立つ行動をとるから、彼らはそれを無視していた。時たま能力者も襲われるが、それも暗部に関わりのある者ばかりで、特に障害とはならない。それでも、彼らは知らずのうちに上層部の守を受けており、死にかけることは確実になかった。だからこそ、この状況に陥っても保身を考えるのだろう。

「こ、殺してなどいない！ ヤツらはクズだ、人間ですらない！」
「いや、本質は全て同じだね。オマエも奴らも、俺も一緒だ。人間の形をとって、人間の言葉を話している間は俺達は人間だ。それが人間から外れた行動を取り始めると、ソイツらは狂人とか言われる。

——だが、それでも、それは人間だ。それに、周りから見たらオマエもりっぱな狂人なんだろうよ」

「そんなお前は何だ！ 学園都市に来て、ようやくその力を手にいれたんだろう！ 能力開発という大義名分の実験に進んで賛同している奴のほうか、狂人だね！」

侮辱されていると思ったのか、彼は怒りに顔を歪ませて吠えた。

だが、青年はそれに対して呆れ顔を作ると、額に手を当てて何かを考え込む。だが、すぐに顔を上げると、彼はダガーを構えた。

ひっ、と男が声をあげる。

だが、彼は慌てた様子で手を壁に数度ぶつけると、彼の背中が当たっていた壁がくるりと回転した。そして、回転した壁の材質で、青年はそれが核が直撃しても安心、といった学園都市の売り文句で作られた壁だということを察した。富豪層だからこそ、使用できる壁。生憎彼は空間移動者ではないため、この壁を突破する方法はない。このダガーでさえも、ヒトには通用してもモノには通用しない。だが、不思議と彼は翼を使う気には慣れなかった。

——どうせここは人気のない場所だし、派手にかますか。そう思うと、彼は考えを行動に移した。

瞬間、彼は先程までいた場所から、この豪邸の手前にまで着ていた。そして、手を豪邸の一角に向けると、目を瞑って唱えた。

「Blood will make the field」

途端、豪邸から大量の赤黒い液体が壁の隙間から溢れ出した。それは地面に溢れると、命を注がれたかのように動き出す。蛇のようにその血は這い回ると、一つの形を創りだした。魔法陣そのものであるそれは、血であるにもかかわらず、それは鈍い紅を放っていた。建物の建っている地面そのものに血は刻み込まれるように吸い込まれ、地面そのものに赤い線を刻んだ。

青年はそれを確認せずに、呪文を唱え始めた。

「To break this building had to
use the magic. Than I will us
e "Dragon bless" — My magician
name is "Magicoo"」

その声に——特に、最後の魔法名に強く反応し、その魔法陣は光を強くしていく。青年は、それを気にもせず、自分の背中から翼が出ていることにも気づかずに、ダガーで血で描かれた魔法陣と同じ模様の陣を描く。それが発光しているのを確認すると、彼は笑みを浮かべた。

「Preparation is completed. Good
bye, human」

青年はそう言うと、踵を返した。それと同時に、魔法陣が太陽のよ
うな光を上げ——円筒状の収束体を地面から飛び出させた。その光
が消え去ったときには、その豪邸も、少年の姿も、魔法陣も何も残
っていなかった。

序章『魔神の力を持つ少年』（後書き）

さてさて、次回は上条さんパートです

宣伝

この物語の次回作

「新約 - とある魔術師と能力者達 - 」

URL: <http://ncode.syosetu.com/n67331/>

第一章 1 (前書き)

修正版

第一章 1

「ふ、不幸だ……」

1

朝五時、いまだ日も登り切っていない、薄暗い中、部屋の明かりも着けずに上条当麻はつぶやいていた。部屋を照らす僅かな光は冷蔵庫の内側から発せられているもので、その中身は空である。昨晚、光の筒が見えたとか騒いでいたインデックスは結局お腹へったお腹へったと叫びまくり、そんな理由で噛み付かれたくもない上条も腹が空いていたので食事を作った。

その結果がこれである。暴飲暴食シスターの異名を付けられた少女は、冷蔵庫の中身を空にしていき、当の上条はそんなシスターの食べた量の半分も食べていない。といっても一般人としては充分すぎる量を食べていたのだが。

インデックスが暴飲暴食みたくなっているのは、十万三千冊の魔道書を暗記し、その知識を保管する魔術にかけられているためである。『首輪』そのものは上条が破壊したのだが、魔力を常時生成しなければならぬインデックスは自然と食事を取らなければならぬ。

だが、そんなことをまったく知らない一般人・上条当麻は彼女がいつの間にか自分の家に住み着いたことに疑問を感じるまもなく、結局同棲状態となっている。今までは食費の採算がついていた彼でも、食客が五人以上増えたようにバクバク食べる人がいたとしては財布の中身は勘弁してください、とばかりに軽くなっている。

後ろでシャツ一枚で寝ている件のシスターを恨めしそうな瞳で上条は睨むが、何も始まらない。内心では戻ってくるまで起きるなよ、とどこかの神に祈りつつ――と、丁度猫（インデックス命名ではスフィンクスらしい）が通りがかったので、上条はスフィンクスにもついでに祈っておくと、制服に着替え、多重スパイもびっくりの速

度で音も立てずに部屋からでた。

彼が向かったのは行きつけのスーパーだ。朝五時からずっと空いているため、彼は以前からよく行っている。値段も学生向けで、この間は学園都市公認学生支援商品売場、とかいう長つたらしい称号をもらったはずだ、と上条は思いつつ、おもむろに野菜などを買っていく。

（……あまり金は使えないな。それに時間もだ。さっさと買って帰るかな——）

そう思いつつ、彼は肉や飲料なども全て籠の中に入れると、レジで会計を済ませる。さすがに朝早いので人は少なく、レジは伽藍だった。それを幸運に思いつつ、彼はレジに表示されていた値段が自分の所持金の七割を持っていたこと一氣に不幸のどん底にたたき落とされた。

スーパーから帰る途中、いつもと変わらない道であるため、彼はすぐに異変に気づいた。

人が少なすぎるのだ。時間は経ち、六時に差し掛かってくるとこのあたりは人が増えてくる。それでもまだ少ないほうなのだが、彼の経験からしても、『誰もいない』というのはおかしいことだった。「よう、上条」

そこで彼は後ろから声をかけられた。振り向くと、そこにはへそを出したアロハシャツの金髪スコン士御門。なんか失礼なこと考えただろ？　と言う土御門に首を横に振って否定する。

「お前も朝早いな？　なんか非常事態かよ」

「ああ、非常事態だ」

その返答に、上条は首をかしげた。この男が暗部の人間だということとは上条はよく知っている。学園都市とイギリス清教、他にも多

数の組織から依頼を受けている多重スパイだということは上条は知っている。今の彼は学園都市の人間として、非常事態と言っているのだらう。

聞けば、昨夜にとある富豪が家ごと消されたとか。そんな世界にはほぼ無縁である上条としては他人事だったが、その方法に疑問を感じた。

「——ってことはなんだよ、『欠片もなにも残ってない』のか？」
「ああ、そんなのは学園都市の打ち上げたひこぼし？号の高威力レーザーでも使わなければ無理だ。でも、それだったら周囲の被害も大きいだろ？」

ああ、と相づちを打つ上条はそのひこぼし何号とやらも知らないし、レーザーがどのようなものなのかも理解してないのだが、土御門は話を続ける。

「それが『ない』んだ。つまり、地面の側から一気に高威力の何かが発射されたってことになる。だが、その豪邸の地下階にはそんなのはなくて、通信機能しかなかった」

「まてよ、家は全部吹き飛ばされたんだろ？　じゃあ、なんでそんなことが解ってるんだよ」

「残ってたんだよ。『地面より下のものは、全部』な」

その言葉に、上条はさらに疑問を覚えた。つまり、地面ジャストのところから高威力のレーザーに近いものが発射されたことになるだが、レーザー装置というものを彼は見たことがあるから、それはありえない現象だと理解した。そんな上条の心象を察して、土御門を首を縦に振った。

「それでさ、その犯人がここらにいてることが解ったんだよ。それで、捜査に協力してもらおうと思って——」

「喚ばれて飛び出てみたけれど」

虚空から、青年は現れた。

第一章 1（後書き）

修正版、如何でしたか？ 感想をお願いします。
長さなどは以前とあまり変えていません。

2 (前書き)

修正中……

唐突に現れた『敵』の気配を、土御門でさえ掴むことは出来ていなかった。まるではじめからそこに居たかのように、彼はそこに存在している。悠然と風にその漆黒の髪をなびかせ、彼は不敵な笑みを浮かべている。上条はその姿に一瞬過去の一方通行を重ねるが、すぐにそれを振り払う。

——アイツでも、こんな顔はしない。

敵意を剥き出しにした狂戦士のような表情。戦うことを生きがいとした人物でもできそうにない表情を見て、上条は恐ろしく思った。だが、青年は一步前に踏み出す。

「……アンタか、昨日のあれは」

「そうだと言ったらどうする？ 土御門元春」

その言葉を聞いて、土御門は表情を曇らせた。自分たちの話を聞いていたわけでもなさそうなその青年が自分の名前を知っているはずがない。学園都市の暗部の可能性もあるが、それはこの間の戦闘で、「スクール」も「ブロック」も、数名のメンバーを除き壊滅している。絹旗最愛や心理定規などを集めた新しいチームが出来たという話だが、少なくともその中にはこの人物はいなかったはずだ。

だが、だからこそ土御門は考えを巡らせた結果――

「魔術師か、おまえ」

「……ご名答、土御門。お前と俺は昔会ったことがあるはずなんだから？」

その言葉に、上条は疑問を思った。土御門はインデックスの所属するイギリス清教に所属している（ハズだ）。それを知っているとしたら、同じイギリス清教でないとありえないだろう。……実は魔術結社同士で名前の知れている人物なら広く知れ渡っているので、

史上最年少で陰陽道をきわめた魔術師は、よく知られているのだ。
だが、面識があるとしたら話は別だ。土御門のかつての仇敵か、
それとも――

「お前、まさか――！」

土御門が息を呑む。だが、それを何か理解していない上条は首を
傾げるばかりだ。――だが、青年は違う。その表情を嬉々としたも
のに変えると、地を蹴り、獲物を狙う豹のように動いた。

2 (後書き)

短いなあ……修正して思う

第一章 3

青年が土御門に迫る。防御が間に合わない速度でその拳は振り抜かれた。それを土御門は顔を振って避ける。隣で上条が呆然としているが、戦闘中に他人を気にかける暇はない。回避した土御門は回転してもう一度繰り出された青年の拳を回避し、そのまま後頭部に拳を叩き込む。

だが、青年はそれを難なく回避した。そして、彼はその拳を掴もうと手を伸ばし——上条が顔面を狙って打ち出した一撃を回避するために、大きく後方に跳んだ。土御門はその隙に拳銃を取り出そうとしたが、一般人へと気づかれることを避けるためにそれを断念する。

上条へと狙いを変えた青年は地を滑るようなフットワークを駆使して上条へと距離を詰める。すでに戦う準備は出来ていた彼は構えをとって迎え撃つ。自分よりも速く、重い一撃を出すこの青年と長く打ち合えるはずはないと彼は思っていたが、それだったら土御門が加勢しに来るだろう。

だが、そんな考えはすぐに吹き飛ばされた。長く打ち合えるはずがないというのは解っていたが、上条は青年の拳を防御しただけで土御門の居るところまで吹き飛ばされた。手をクロスさせて防御したのだが、肘から下はバットで殴られたような痛みがある。ただの一撃。素手での一撃でここまでとなると、土御門と自分では勝てないのではないか——そんな疑念が上条に生まれる。

だが、青年と土御門は目を合わせると、一気に距離を縮める。先手を打ったのは土御門で、彼は左手でフックを繰り出す。青年はそれを体を仰け反らせて回避すると、拳を腰のために一瞬構えた。——だが、土御門の右のストレートが既に彼に迫っていた。

青年はそれを体を急激に下げて、上半身を前に出す。拳を振り抜いた土御門はそれによって空振ることになり、そして——下から、青年の拳が彼の顎を打ちぬいた。咄嗟に舌を噛むことは避けた土御門だが、その衝撃は殺し切れない。その一撃で、土御門は意識を手放すことになった。

一連の行動に介入する暇を与えられなかった上条は、土御門が地面に仰向けに倒れるのをしっかりと見ていた。そして、それを行った青年が、不敵な笑みを浮かべながらこちらを振り向くのを。

それが戦闘の合図だった。青年は先程虚空から現れたように、一瞬で上条の隣に迫る。反応が遅れた上条は、拳が飛んでくることを察知して後方に距離をとろうとして——青年がそれを見越して出した回し蹴りが、上条の腹部に叩き込まれた。くの字に体が曲がったと思うと、彼は大きく後ろに飛ばされる。その一撃だけで朦朧と意識は揺れ、視界も安定しなくなる。

次の一撃が来ると思うと、彼はすぐに構えをとろうとする。だが、青年は何もしなかった。

「——また来るぞ、上条当麻。土御門はさっさと治療しておいてやれ」

そういうと、彼は現れた時と同じように、消え去った。

残ったのは、土御門と上条の二人と——彼が消え去った跡なのか、地面には一本の紅の羽が落ちていた。

第一章 3（後書き）

……修正急がねば

第一章 青年の正体！？（前書き）

はい、本日四回目の投稿です。

書き溜めが大量にあるのでジャンジャカ投稿していきます。
今回は青年の正体明かしの回です。

といっても過去は公開されないんですけどね
（スケスケタロウさんすいません）

でも、もう少ししてから公開するつもりです。

では本編です

第一章 青年の正体！？

4

（——ん？なんか柔らかい）

意識を取り戻して最初に上条はそう考えた。

目は開かないが、何かに押さえつけられているような変な感じである。

周りは少し暖かく、どこかで聞いたような声が聞こえてくる。

「　　っ！　　、　　」

そこまでして、頭に噛み付かれた。

「ギヤアアア！！！！誰だ！人の安全気絶タイムを邪魔したのは！！！！」

ガバツと上条が上半身を跳ね上げる。

「うおっ！起きたのか！」

「とうま、心配したんだよ！血を流して倒れてて！」

目の前にいたのは、先ほど戦った少年と、インデックスだった。

二人は並んで上条を見下ろしている。

その割にはインデックスの顔が近い。

そして、ゆっくり首を横に倒すと

「・・・は？」

魔法陣が書かれていた。

「あ、それは部屋の温度を上げるための——」

青年の声が聞こえてくるが頭に入らない

ここは上条の住んでいる学生寮の一室。

さらには自分は何故かパジャマ姿でベッドで寝ている体勢だった。間抜けな声が出たとしてもおかしくはないだろう。

先ほどまで自分と戦っていた青年が目の前にいたら

「ってインデックス！そいつから離れる！」

上条がハツとしたようにインデックスに言う。

「へ？なんで？」

本気でわからない表情でインデックスが俺に聞く。

そういえば、どうして自分は出血していないのか。

先ほどインデックスは『血を流して倒れていた』と言っていた。

ということは誰かが治療しない限り自分は血を流しているはずである。

そして、ゆっくり下をしてみる。

大量の医療器具が置いてがあった。

しかも血の魔方陣の周りに。

「あ、それはこの、えーっと・・・」

「作玖、だ」

「そうそう、作玖がどうやってか知らないけれど魔法陣から練成？して

治してくれたんだよ？」

「・・・つまり、あなたはそこにいる作玖なる人が全部傷を治したといっているんでせう？」

上条は頭を抱えながらインデックスに呆れ顔で言う。

インデックスは不満そうな顔をして「私のことが信じられないの？」

とうま「その作玖と言う少年が「詳しいことは俺が」

その言葉に、上条は自分で考えていた事を思い出した。

「そうだ、お前だよ。能力者なのに何で錬金術が使えるんだよ？」

「俺は能力者じゃないぞ？一応」

平然と放たれた一言に、頭が混乱する。

確かに、能力者は思考回路が違うらしいから魔術派使えないはずだが先ほど土御門との会話でもわかるとおりあいつはれっきとした能力者のはず、と上条当麻は頭を抱えてうんうん唸っている。

「俺は原石だ。んで、能力を応用して十万三千冊の魔道書を記憶、応用、魔術開発や黄金練成

をどう効率的にするかの研究とかしてる」

さらに驚愕の新事実を上条は作玖の顔を見る。

ただの人、ただの人間のようにしか見えないのに、インデックスより上の技術を持っていることに驚いていたのだ。

みゃーとバカ猫が鳴く。

沈黙、数秒が数分を感じる。

「ねえ、さく？本当に覚えているの、十万三千冊」

「ああ、内容は――」

「言わないで！」

作玖が言おうとしたところでインデックスが止めに入る。

それは、敵を見る目だった。

「何しに来たの？とうまに用があるの？それともあたし？」

「上条当麻にちよいとした連絡事項がありまして」

そう言つて、作玖が手招きをする。

助けてもらったことから、殺意はないということが解る。なので、ホイホイつとついて行く。

作玖に近づくと、作玖が俺の目の前に立つ。

「明日、小萌先生の代理をする」

「はあ！？」

唐突な一言に上条は間抜けな声を出してしまった。

先ほどは命を狙われた（？）のだが、今度は代理教師宣言

（え、な、ナニコレ、イベント伏線？それはないよな、頼むから）
上条が先ほどからずっと頭を抱えながら悩む姿が定着してしまった
ような感じた。

「ってか、教員免許持つてるのかよ俺と同年なのに」
一番の疑問はそこであった。

彼は一応れっきとした学生の年齢だ。

学園都市の外から来たなら話は早いが、それでも外では若くして
教員免許が取れるという話を聞いたことがない。

「あー・・・俺一応イギリス出身だから。」

そこで教員免許取ったわけだよ。

あ、因みに本名は所属教会ローマ正教、役職は神の右席『中央のカオス』

そしてロシア聖教、イギリス正教『必要悪の教会』などなどの情報収集と、

前線に立つ役を任じられている」

ササツと説明してくれたものの、目の前に敵がいるのに、何もしい自分に

少し動揺する上条。

というより、見た目17歳の少年が神の右席とは誰も考えないだろう。

しかし、ならば先ほどの強さは大方説明がついてしまう。

そして、魔術の専門家ということも説明がつくのだが・・・

「法の書、解読してるのか？」

「もちろん」

このことが世界に知れ渡っていたら、かなり困ることなのだが、さうとヘビーな事を作玖は言う。

以前、法の書をめぐって戦闘が起こったこともあるぐらいなのに、それがローマ正教にいるという事は困る事だという事がわかる。

ふと、上条は考えた。

もしも、ここで彼が魔術を使ったとしたら？

上条の右手が打ち消すだろうが、魔術ではなかったら？

もしくは、打ち消せない類のものだったら？

勝ち目はないという事がわかってしまっている事が、恐怖を与えた。

「あーそう身構えなさんな。手出しをする気はないさ。

ただ単に、連絡事項だから」

すこし困った顔で作玖が言う。

本当に敵意はなさそうなので、一応安心して過ごせる。

（あ、でもイベントフラグは立ったまま・・・）

「んじゃ、また明日。少年」

そういつて作玖は帰っていった。

その後姿は大人のものだったが

「子ども扱いするな！」

そんな声も聞かず、作玖は帰っていった。

・・・そういえば、一番重要なご飯は作玖が作っていったおかげで、この日は切り抜けたとか

第一章 青年の正体！？（後書き）

少年の正体、なんとなんと神の右席です。

中央「神」というイメージがありますが、

そのところについては後々・・・

一応今回から数話は日常モノになると思います。

今日中に大量更新するので期待してくれるとうれしいです。
ではでは！

行間1（前書き）

ちよつとした過去公開？です。

一応学園都市にはいたけれどアレイスターの干渉を
能力で能力開発は受けなかったことになってます。

能力で——が作れます。

書かなかった部分は先の展開になりますので明かしませんが。
では、どーぞ！

行間1

とある少年の一室に一人の青年が訪ねた翌日、

雲ひとつない青空には似つかわしく黒い色の服が異様に目立つ一人の青年が

上条当麻の入っていった。

一見したら学生のようにも見えるが私服の状態。

なので、青年は教師の立場にあるという事が解る。

青年が学校に入ろうとすると、IDの提示所に差し掛かった。

青年は、IDを取り出し、みせるとすんなり通った。

しかし、そのIDには『学園都市VIP 舞月作玖』の文字がある。

そして、青年が職員室に入ると、見た目12歳の少女に見える教師、月詠小萌が居た。

「あ、やっと来たですねー。今日一日よろしくお願いしましたよ、舞月先生」

「解りました、月詠先生、呼び方は昔のままでいいですよ」

「了解です」

そう言つて、舞月と呼ばれた青年は月詠先生の前に座った。

青年の格好は白いシャツの上に黒い色のカーディガン。

ズボンはいかにも教師風のズボンだった。

が、それが異様に似合うため、二人が並ぶと周りから変な視線を投げかけられる。

「それにしても先生のクラスは面白い生徒が沢山いますね？」

「あれ？生徒の資料は渡してなかったんですが・・・」

確かに、先生のクラスは悩める子羊ちゃんたちがいっぱいいますよ
」

教師同士の会話が続く。

月詠が舞月にいろいろ話をする一方だが、舞月は感心しつつ聞いていた。

そして、話が一区切りついたところで舞月が口を開いた。

「それにしても、久しぶりですね」

「そうですね・・・舞月ちゃんが小学生の時以来ですか」月詠先生は懐かしみながら「あのころは教師と生徒の関係だったんですね・・・」

「でも、あの時先生に会えてよかったですよ」

舞月がまた同じように懐かしみながら言う。

そして、二人が昔話に花を咲かせようとしたときだった。

「あれっ？小萌先生、その子だれじゃん？」

もしかして彼氏？」

黄泉川愛穂が現れた。

ニヤニヤしながら尋ねる黄泉川に、月詠先生と舞月は数秒硬直
そしてそれが元に戻ると

「ちちちちち、違いますよ！舞月ちゃんは昔の生徒で——！」

「そうです！俺と先生は教師と生徒としての関係しかありません！」
二人が重ね重ねつつこみ、それが息ぴつたりなので余計に黄泉川に
からかわれるという始末だった。

行間1（後書き）

案外小萌先生おっかなびつくり？な性格になりました。

黄泉川出番が少ない・・・

これからもどんどん出したいキャラが黄泉川なんですよねえ・・・
はあ・・・鬱だ

第3章『能力者対魔神』 1（前書き）

やっとかさ第3章です！

ここはバトルパートの塊なので楽しみにしていただけば
とてもうれしいです。

そして、一通さん登場の回！

やっとかさ！一通さん！！

個人的にはとても好きなキャラなんですっごく出したかった出す。

では、本編です！

第3章『能力者対魔神』 1

1

携帯の着信音によって一方通行は目覚めた。

（——あアン？なんだこんな時間に・・・）

一方通行が眠そうな体を起こして携帯を取る。

そして、携帯を開くとメール着信一件。

一方通行が開くと、そこに書かれている事に一方通行は少し眉を吊り上げる。

「なんなんですかア？いくら組織に入っているからって個人情報流出は困りますよオ？」

差出人の名前は全く見覚えの無い人物の名前。

そして内容には今の一方通行と因縁深い場所。

絶対能力者進化（レベル6シフト）の一〇〇三二番目の実験所、あの操車場だった。

（ナンだか知らねエが、面白エ奴も出てきたなア？）

そう思っ、一方通行は杖と拳銃を持ち、部屋を後にした。

一方通行は指定された場所に行くと、一人の男に目を留めた。

自分とは対照的で、黒い、黒い、黒い同年代ほどの青年がそこにいた。

「よう、お呼び出しアリガトウ、ってかア？」

「・・・まさか一方通行からその言葉が聞けるとは思わなかった青年は目を丸くして一方通行を見る。

——なんだア？こいつ、俺に恨みでもなさそうな表情でいきなり

何を言っただやがる。

実験関係者かア・・・？だがこんな男は見たことがねエ
てエことは、暗部の人間かア？

と、一方通行は考える。

「まあ、テメエはここでくたばンのが落ちだ！」

一方通行が拳銃を取り出し目の前の男に撃った。

それが、その青年の心臓に当たり、ゆつくりと青年が崩れ落ちる。
その光景がスローに見え、一方通行はあきれたような表情をした。

「……なんだア？もうお終いつてかア？呆気無エ」

そう一方通行が呟き、きびすを返した。

「そう簡単に終わるわけがないだろう？」

轟！という音とともに、とても強い風が一方通行を襲った。

一方通行が驚いて振り返ると、そこにはルビーより濃い紅色に淡く
光るの翼を生やした青年がいた。

そして、その目は漆黒から黒と紅のオッドアイに変色していた。

「その程度、私にとっては障害にすらならん。

詳しく説明すると、窒素などの密度を操りh r e a i o 2 4 r o
p aしたため、銃弾は無効化した」

ノイズ混じりの声で舞月が説明する。

——魔術師イ？てエことは海原と同じ人間かア？

そう思った瞬間、舞月の背中から生えた翼が羽ばたいた。

そして、一気に距離を詰められ、舞月がズボンのホルダーからダガ
ーを取り出した。

「M a l e f i c i u m 7 7 7（神の力を操る者）、神槍グングニ
ル・レプリカ、彼を撃ちぬけ」

そう言つて、ダガーが何の動作もなしに舞月の手から一方通行へ飛
んでいく。

それを反射で回避し、それが舞月の右手を貫くはずだった。

「ぐオアア！？」

一方通行の右腕に刺さり、そのまま数メートル吹き飛ばされ、

近くにあったコンテナにめり込む。

「なんなんだよ、これはア!？」

一方通行がチャーカーを切り替え、ダガーを持ってベクトル操作で肩から数メートル吹き飛ばす。

「七星宝刀、今この世界に神の箱庭より召還す」

七種類の宝石で鞘が飾られた、一本の刀が舞月の右手に現れる。

そして、それを一方通行に向かって抜き放った。

それを一方通行が右手で受け止める。

が、ベクトル操作して、攻撃を無効化したはずだが、腹部に切り傷がつく。

(なんでだ!？止めたのに、なんで俺が斬られんだア!)

「この刀は暗殺に特化した剣。まあ、神話では失敗に終わったが、俺がつかったなら違う、お前の能力が幸いしたが、次は斬れるぞ?」

「ンなことさせると思ってたのかア!？」

一方通行が舞月の七星宝刀を突き出した手首を掴む。

そしてベクトルを操作し、血流を逆に流れさせる。

動脈から心臓へ、静脈から心臓へ、全ての血を心臓に集め、破裂させる。

だが、舞月は何食わぬ顔で言い放った。

「この程度で俺が死ぬと思ったか?」

舞月は一方通行の腕を振り払う。

それと同時に舞月が血を吐く。

「ンだよ、テメエはもうボロボロですってかア?」

「その体でよく言ったものだ。

それに、その電波、私が感知できていないと思ったのか?」

その言葉に一方通行が反応する。

そう簡単に感知できるものでは無いはずだ。

そう簡単に感知されたらすぐにジャミングされているが、

これはミサカネットワークの電波、普通に電子機器などを弄ってい

るだけではまったく

超電磁砲ほどの電撃使い（エレクトロマスター）なら納得がいく。

「神の箱庭より召還せし粒子を操る力を引き出す」

すると、紅い翼が圧縮され、舞月の掌の上に浮き、

はじけた瞬間、一方通行は崩れ落ちた。

「・・・学園都市最強はこんなものか」

「・・・」

舞月の問いに一方通行は答えない。

いつの間にか翼が無くなっていたことで戦闘終了と思っているよう
で、

溜息をつき、きびすを返し、その場を去ろうとしたときだった。

「おい、そこのお前！根性が足りてないぞ！！」

——は？

突如聞こえてきた第三者の声に舞月が反応する。

「すごいパンチ」

あほらしい声が聞こえてくる。

その先には昭和の陸軍の旗みたいなマークがついたＴシャツに
白いマントみたいなものを羽織っている、

学園都市の第七位、削板軍覇がそこにいた。

それを見た瞬間に舞月が目を見開く。

七星宝刀を目の前に構えると、なにかが襲ってくる。

それを右に弾くと、近くにあったコンテナに穴が開いた。

中に入っているものがあふれ出す音と共に削板は言った。

「お前の根性、叩き直してやる！」

その瞬間、舞月の翼が現出した。

近くにあるコンテナやクレーンが翼に触れた瞬間決られていき、
ダガーや七星宝刀が消え、舞月の右手には天叢雲剣といわれる

日本神話の武器、左手にはゲイ・ボルグという魔槍

「そうか・・・そこまで戦いたいのか、魔神と」

舞月の瞳が真紅に染まり、先ほどより大きい紅の翼が周りの物を蹴

散らしながら現出する。

その言葉に、削板の顔が笑みに代わる。

彼は思い出していた、あの時の戦いを。

魔術を極めすぎて、神の領域に踏み込んだもの。

人々はそれを魔神という。

戦いの途中で彼はそう言っていた。

背筋に悪寒が走り、本能が逃げると削板に叫ぶ。

だが、彼は逃げずに言い放つ。

「いいだろう、お前が魔神なら、俺を完膚なきまでに叩きのめして
見せる！」

削板の体を不思議な力が覆う。

ここに、魔神と超能力者の戦いが始まった。

第3章『能力者対魔神』 1（後書き）

削板さん！

第七位の説明できない力を持った人ということで出したかったので
だしました、はい。

口調がかなり難しいのでうまくできるかわかりません。

では、どうか感想お願いしました！

第3章 2 『覚醒』（前書き）

一方通行さんの覚醒の回

これは前からイメージしていたから
やっと思けたという感じです。

こんかいは区切りのために短いです、
すいません

第3章 2 『覚醒』

2

——ンだア？誰だ、俺の邪魔をしゃがった奴はア・・・
一方通行は意識が朦朧とする中、削板の姿を捉えていた。

そして、紅の翼を出し、刀と槍を持つ青年を。

その姿は地の底から復活した魔物のようで、
天より使わされた殲天使のようでもあった。

その姿と翼を見たとき、脳内に電撃が走ったような感覚がした。

——神の世界より神の物質を取り出す。

神の世界との同調率、——3.5パーセント

神の物質——現世に現出完了

これより翼と化し、我が敵を殲滅す

「ククククククク、ハハハハハハハハア！」

OK、テメエ、普通にやって勝てると思っちゃいねえ

行くぜエ？魔術師イ！！」

突如起き上がった一方通行の背中には黒い電流が走っているように
も見える

噴出する黒い翼があった。

「ほう・・・お前も到達したか」

「ハアアアアアア！！！！」

舞月が一方通行を見た瞬間、数十メートルあった間合いを

削板が一気に詰めた。

そして、拳を振りかぶり、それを青年の顔面めがけて打ち出す。

それを天叢雲剣を持った手で受け止め、逆手に持ち直し斬りつける。
と同時に一方通行に向けてゲイ・ボルグを打ち出す。

一方通行はそれを翼で打ち消し、翼を舞月の右手目掛けて動かす。

「！？」

舞月が斬りつけるのを中断し、回避しようとしたが腕が動かない。

「そう簡単に逃がすか！」

削板が天叢雲剣をしつかり掴んでおり、まったく動かないように固定している。

そして、黒い翼が舞月の右腕を捉え、千切れた。

血管や動脈から血が溢れ出し、筋繊維が見え、骨が見える。だが、少し違った。

彼の腕から出ているのは血だけではなかった。

その血も赤黒くなく、真っ黒な色、そして、サラサラとした紅い粒子が溢れる。

「な・・・本当に・・・人間か・・・？」

「いいや、俺は人間じゃない」

サラサラとした粒子を残った右腕から大量に噴出している舞月が削板の問いに答えた。

その間にも一方通行の攻撃を全て翼で弾き返している。

「俺の真名はルシフェル、光を掲げる者であり

ミカエル、神の如き者

そしてウリエル、神の火でもある。

私（俺）は、父の使いである。

そして、何故、俺（私）が現世にいるか、何故自我を持っているか。教えてやろう」

そう言った刹那、空气中に散布されている粒子がピタリと止まり、一つの集合体に成る。

だんだん、それが形作られ、一つの杖になる。

それを青年が地面に叩きつけると、辺りを光が覆いつくした

第3章 2 『覚醒』（後書き）

次回、舞月の正体が明かされる!？の回

次回予告です。

明日から4月2日まで更新できませんので・・・（泣）
本当は更新したいのですが、今日中にどこまで更新できるかも
まったくわかりません・・・

では、また後で会えましたら～

第3章『回想』（前書き）

奇跡！奇跡が起きた！！

イギリスでネットが使える！

しかも学校で無線だからどこでも！
更新します！

今回は回想です。

意味が解らないし笑えないところがあればご指摘お願いします。

第3章『回想』

3

その瞬間、学園都市にいた筈の三人は草原に居た。

「なんだア？ここは・・・」

「神の箱庭、私の生まれ故郷だ」

青年の右手が粒子で形作られ、元に戻っている。

その手には杖が握られていた。

「人類が創生されたころ私は同時に父に作り出された。

そして、私は父の命じられるとおり神戮を作り、ガブリエルに授け、

その後も私は父の命じられるとおり動き、天界を統べることを担っていた」

彼が杖を太陽に重ねるように持ち上げると、時が夕暮れ程になった。そして、杖が割れ、内側から粒子が噴出する。

「だが、あるとき蛇が私を操り一度墮天使に成ってしまった。

父は蛇が私を操ったことを知るとミカエルとして復活させてくれた。

これにより、私は自分に打ち勝った。

これが有名なルシフェルとミカエルの闘いだ」

目の前の青年は神の使いの天使だという。

削板はまったくわからないという顔をし、

魔術について知っている一方通行は驚愕を露にした表情をした。

「そして、私はあるときウリエルの頼みにより、魂を私の中に閉じ込めた。

これにより、肉体と精神が存在するなか、魂も存在する状態になる。

ウリエルは私の体に予備を作った。

自らが死しても良いように、な」

声が神々しい天使のものの声へ変わり、そう告げる。

それは宣告のようで、予言のようでもあった。

削板は神妙な顔つきになり、一方通行は沈黙している。

「じゃあ、お前はいつたいなんでここにいる？」

「父の頼みだ。」

これより先は自分の力で考えろ」

そう言うと、学園都市の操車場に場所が戻ると同時に、

ミカエルが削板を蹴り飛ばした。

積み上げられていたコンテナを何個も突き破り、コンテナがガラガラと崩れ落ちる。

「現世での名は舞月、覚えておくといい。」

では行くぞ、一方通行——！」

「イイネエ！天使との闘いかア！やってやろうじゃねエかア——！」

舞月が翼を羽ばたかせ一方通行とぶつかる。

一方通行はそれを受けてたち近接戦闘となる。

轟！という風を切る音と共に拳を繰り出した舞月の拳を

どというわけか反射できずに一方通行がまともに右肩に受け、

数メートル吹き飛ぶが、途中で受身を取り、

舞月に向かって右拳を突き出す。

それを気にもせず、舞月が蹴りを繰り出そうとするが、

その肩から下が何もないことに舞月は気づいた。

「天使つツても腕は斬れるンだなア・・・」

一方通行が自分の右拳に握られている羽を見る。

一方通行は過去に垣根帝督という男との戦いで翼から出した羽弾が

斬れることを知っていた。

それで、翼から試しに羽を取り出してみて拳の中に潜ませてみた、
というわけである。

「吹き飛ばす」

だが、その一言で、一方通行の華奢な体は数メートル吹き飛び
ミシミシと不愉快な音が聞こえてくる。

くだらん、と言吐き捨て、舞月は削板が吹き飛ばされた方向を見る。

そこからは何も音すらない。

舞月はため息をついた。

そして、翼の色が紅に銀色が混じる色になった。

「出て来いよ、第七位」

「オオオオオおおおアアアアああああああ！！！！！！」

舞月が呟いた瞬間、絶叫、そうとも取れる声が聞こえてくる。

ドン！とコンテナを蹴る音が聞こえ、削板が猛スピードでこちらに突撃していた。

拳を振りかぶり、削板が前に突き出すと説明できない何かが舞月を襲う。

が、それに対し、何の動作も見せずに削板の体が何かにつかまれ投げ飛ばされるかのように

地面に叩きつけられた。

だが、その時、削板は足で地面を蹴り、舞月にさらに加速した速度で近づく。

「、簸虞傲彌隸——」

魔法名の後に言語とは聞き取れない声が舞月の唇から出される。

すると、炎の壁が削板の周りから噴出し、削板に押し寄せると同時に削板の真上に突如電気がバチバチとスパークする音がする。

神の火、ウリエルの術式とゼウス神の術式。

ゼウスはギリシャ神話での最高神だが、ミカエルのいう神とは唯一神であり、

ゼウスの親のようなものである。

そのため、『如』の術式で打ち出す。

そして、学園都市の太陽に向かって舞月が掌を突き出す。

すると、少しずつ、太陽のような丸い物質が舞月の掌の上に現れる。

「我ganon3ijtrw、吹き飛ばせ」

ノイズ混じりの声と共に、彼の掌から球体のものが投げつけられる。

それがまっすぐに削板目掛けて飛んで行き、そして削板の体を吹き飛ばし、

塵の一片も残さずに消し飛ばした。

はずだった。

そこに立っていたのは、特徴的なツンツン頭の少年。

「オイ、舞月——」

そして、炎も消し、雷も消し、そして、異能の物なら全て打ち消す右手で突き出し、

「お前いたい——」

光を掲げる者の術式を打ち消して、

「なにやっぺんだよ！」

英雄ヒーローの如く、登場した。

第3章『回想』（後書き）

主人公チートすぎますね、はい。
調子乗りすぎました、すいません。

上条さん最後に出たけど後から見るとあんまり意味がありませんでした。

次話はさっさと投稿しますけれど、
やっぱり上条さん活躍しません。
活躍するのは後半でしょうか・・・？

ではでは、ノシ！

第3章 『魔術師』（前書き）

うい、二回目の更新です。

前回は回想だったので、そこから抜け出したところですよ。
一通さんメインですたい、では本編！

第3章 『魔術師』

4

「うおっ!？」

その一、上条は攻撃を必死に避けていた。その姿はさながらねずみのようである。

右から飛んでくる氷の槍を避けたと思ったら、斜め左から炎の弾丸が大量に乱射されていて、それを幻想殺しで打ち消したと思ったら、下から突き出てくる土の棘を後方に回避する。

「麩葡麻戎魔 y r e a e t e a o k b n——」

謎の言語で詠唱を連打し続けるが、その大半が一方通行に向けて、だった。

上条は基本的な魔術を乱射すれば武器が右手だけだから無効化できる。

削板は翼で全て相手ができる。

なぜなら、削板の攻撃は威力が高くても単調で直線的過ぎる。では、なぜ一方通行が例外か？

彼の頭脳は学園都市一と言われるほどだ。

一回一回戦い方と対処法を変えてくるので一番手間がかかる。

「チイ!——ベクトル操作——」

一方通行は補助演算＋黒い翼のフル演算モードなので今までのようには行かなくなっていた。

風のベクトルを操って雷だの何だの全てを飲み込むを作り出している。

その大きさがどんどん増して行き、操車場を飲み込むほどの大きさになる。

「当たり前がれエ!！」

それを舞月に向かって思いっきり投げつけた。

それが、舞月に吸い込まれるように飛んでいく。
一方通行は三日月のような笑みを浮かべる。
だが、その期待に反し、それは、

舞月の目の前で消し飛んだ。

舞月が何かをしたわけでもない。

いや、何も動作をしなかったただけだ。

ボン、という間抜けな音と共に消え去った。

実は原理は恐ろしく簡単で、光を掲げる者の性質を利用し、
万物を操作（ベクトル操作に似ている）、そして範囲指定をし、
高電離気体を空気中の物質ごと消し飛ばした、という訳だ。
もつとも、舞月の場合はさらに詳しく範囲指定し、
高電離気体の形そのままに範囲指定をしたのかもしれない。

その所の真偽はつかないが、結果はこれである。

一方通行は再び風のベクトルを操ろうとするが、
これも先ほど説明したとおり封じられてしまう。

もつとも、これを現世で行っている間は
いくら天使でも膨大な魔力を失っていく。
なのでそう連発はできない。

「チクシヨウ、どうすりゃいいんだア!？」

一方通行が辺りを見回す。

——無能力者の三下、奴の能力は切り札となる。

が、そう多用しすぎることはできない。

——超能力者の第七位、こいつをうまく利用すれば
三下をあいっぴつにつけて人間の状態に戻せる。

それだけで一気に戦局が変わる。

だが、そんなことを考えている間にも、彼に魔術の攻撃が迫っていた。
た。

先ほどから一方通行は反射に含まれる攻撃をなぜか受けている。

おそらく木原数多の攻撃方法と同じ。

しかし、それがわかったところで状況は変わらない。

氷の槍が一方通行目掛けて猛スピードで迫ってくる。

だが、そこに思わぬ乱入者があわられた。

「救われぬものに救いの手を（Salvareooo）！！！」

魔法名が名乗られると同時に、氷の槍が真つ二つに切られた。

「舞月、これ以上は駄目ですよ」

七天七刀を構えた世界に20人と居ない聖人、神裂火織が立ちはだかった。

「うわわわ！いくら上条さんでもこれは危ないんですけれど!？」
上条当麻は追い詰められていた。

目の前には隙間がまったく無いように見える炎弾の塊が迫っていた。
いくらこれでは幻想殺しを使っても身体が灰になる。

そして、退路も立たれてしまった上条は奥歯を噛み締める。

（チクシヨウ、ここで、終わりなのかよ！）

脳裏に自分の守りたいものの顔が蘇る。

大切な仲間達、科学側も、魔術側もとても多くの仲間が居る。

それともう会えなくなる。

彼らは悲しむだろうか？

すこしそれが心配になる。

だが、絶望の淵から上条を呼び覚ましたのは、何度も共闘したあの
似非神父の声だった。

「Fortes931、！！」

バラバラと大量のルーン文字の書かれたカードを空中にばら撒き、
炎が燃え盛った。

それが一瞬のうちに人型になっていく。

魔女狩りの王、それは炎で作られた魔術の塊。

「魔女狩りの王、炎を我が物とし肥大化せよ！」

その一言で魔女狩りの王が炎弾を全て受け止め、

体の中に吸収したと思ったら、二倍の大きさになった。

「上条当麻、君にはここで死なれたら困る。

インデックスが悲しむからね」

第3章 『魔術師』（後書き）

ねーちゃん＆マグヌスキタ！

やっと出せた！

数文だけど出せてよかった！！

出したかった魔術師！

第4章辺りから舞月側と上条側で分かります。

第4章は舞月メインで、上条は日常メイン。

上条さんのぱわーあっぷぶでもしましょうか・・・（喧嘩でもして）

ではでは、ノシ

第3章 『終結』（前書き）

今回は舞月さんなんでチートすぎるの？

とってしまったような感じでした（自分で読んでて）

ああ、なんでチートなんだ舞月・・・・・・・・

第3章 『終結』

5

舞月はその光景を見て驚愕をあらわにした表情をしていた。

世界に20人と居ない聖人の一人、神裂火織

必要悪の協会史上最年少神父、ステイル・マグヌス

この二人の戦力はローマ正教のアニエル・ゼ部隊級の隊なら単体で殲滅するほどの能力がある。

それが、科学側の二人を味方した。

おそらくアレイスターの依頼だろうが、敵が5人に増えたのだ。これだけでも舞月にとっては障害になる。

「・・・神裂」

「なんですか」

ちようと真正面に居る神裂に舞月が声をかける。

「何の用件だ」

「がお呼びです、今すぐイギリスに来い、と」

その言葉に舞月は歯噛みする。

あのローラが呼んでいるのだ、行かない訳にはいかない。

一応舞月はローラと幼馴染だ。

さらに最大主教になってからはいろいろと権力行使で呼びつけてくる。

このことに関してはいい、本題は、ローマ正教の所属の所為か、もしくは神の右席だからか、この勅命が来てしまったら

必ずいかなければならなかった。

「仕方ない、今からいく。」

一応移動はステイル、神裂ごと行っが・・・」

「喋ってる暇があんのか!？」

気がつく、一方通行が翼をこちらに向かわせていた。

そして右からは削板軍覇。

これでは挟み撃ちである。

それに対し舞月は常人では行えない行動をとった。

まず、黒い翼を一つセントジョージの聖域で受け止める。

この場合竜王の殺息はつかわず、

神の箱庭のような隔離された空間を作り、

翼を進入不可能にする。

そして、右から左ジャブを行ってきた削板の拳を

右手で受け止め、その拳ごと地面に叩きつける。

そして、中国神話の術式をくみ上げる。

「龍が青龍刀に憑キ神となりし時、」

青い中国刀が表れ、それが青白い光に包まれる。

「龍の性質現れ、青龍偃月刀となる」

その刀の上空に青白い龍が現れ、中国刀に落ちる。

それは巨大な振動を起こし、地面を砕き、

魔術の嵐による暴風が吹き荒れる。

「それは地を砕き、」

地面が完全に砕け、青龍偃月刀の目の前で塵になる。

「天を裂き、」

青龍偃月刀を空に向かってかざすと、雲が真つ二つに割れ、

神が通るとき波が道を作ったときのようになる。

「人を噛み砕くモノとなる」

そして、青白い光が弾ける。

まるで台風が起こっているかのように、風速40メートル以上の風が神裂たちを襲う。

「クウツ！これが天使の實力ってか！？」

翼を前方に体を守るようにし、風から体を守る。

だが、風はどれだけベクトル操作しても360度全方位から襲い続け、

ダメージが蓄積した体をギシギシと圧迫する。

そして、その風が止んだとき、刃渡りだけで3メートルある刀が現れた。

その刀身は龍のように弧を描いており、その柄は青く、青く、青かった。

そして、それを削板の肩に突き刺す。

「グッアッ」

苦痛で声が漏れる。

そして、そのまま空中に浮かばせ、

その瞬間、削板の姿が消えた。

「あアン！？どこ行きやがった、アイツは！？」

「貴様らで言う空間移動だ。」

魔術で言つと言語に表せんがな。

神裂、回避しろよ？」

槍を投擲するように神裂もろとも一方通行の肩口狙って投げつける。その速度は軽く音速級で、人間の反射神経でも反応できない速度だったが、

神裂は聖痕を身体強化に使用し、それを右に飛ぶことでかろうじて回避した。

が、それは反射をも貫くために、神の箱庭と同じ現象を付加させるために

術式の中に組み込んでいる。

それが、一瞬のうちに筋繊維を切り裂き、肩を貫く。

そして、勢いそのままコンテナに刺さる。

「ンだよ、コレはア！？抜けないってのはどういうこった！」

「何、おとなしくしてくれれば眠らせてから抜くさ」

そういつて頸動脈打ちを一方通行にし、意識を失わせる。

「お、オイ！舞月——」

「上条、今はお前は俺の計画に踏み込むな。」

時が着たら、自然とお前は巻き込まれていく。

だから安心して待っている。

そして、小萌先生には『イギリスから呼び出しがかかった』
とでも言うておいてくれ。」

その言葉と同時に、紅い色の光が辺りを包み込んだ。

「上条当麻、インデックスによろしく。」

あと、そのコモエさんにもね」

ステイルのはき捨てるような言葉を聞き、

光が収まるころには残ったのは一方通行と上条当麻だけとなった。

第3章 『終結』（後書き）

前回魔術師のあの二人が出ましたが……
あれ、3章ではモブキャラになってます。

これの次で第3章終結ですし。

次からはもう完全に分岐します。

また会合するのは第5章ぐらいでしょうか……（構想）

あ、でもそのまえに浜面と舞月ぶつけどかないと（間接的にでも）
……いろいろ問題山積みですね、はい

削板さんですが、一応病院に飛ばされてます。

一応事前に連絡済です。（裏設定）

次回は一通と上条の再会。

どうなるかは期待してくださるとうれしいです。

感想書いてくれるとうれしいです。

スケスケタロウさん、コンキスタドルさん、

いつもいつも感想ありがとうございます。

どうか他の皆様も感想の中でご指摘ビシバシお願いします。

……焼魚刀さんの小説、とても面白いんだよねあ……

タロウさんにスタドルさんも上手いし……

どうしてこんな駄文しか書けないんだろう……

どうか感想の中でダメだし本当をお願いします。

マジで、はい。

長くなってすいません。

ここまで付き合ってくださった皆様、どうもありがとうございます。
それでは

第3章 最終話『再開』（前書き）

最終話と書いていますが、続きます。

一応第3章終章です。

今回で分岐開始です。

一応舞月と上条は力の使い方が違うけれど、

幻想殺しは実は舞月の万物を操る能力の前ではかなりやばかったりw
でもでも、最終的には「ピ——」ですのぞ！

……丸分かりですね。

では、本編どうぞ！

第3章 最終話『再開』

6

「ンで・・・何で俺がココにいるんだ？」

病室のベッドの上の一方通行が上条の顔を睨みながら言う。

その表情は不機嫌そのもので、上条はビクビクしながら

「あ、あんな怪我だったんだ。

さつさと救急車を呼んだだけに決まってるだろ」

上条の言葉に一方通行は驚く。

「お前、自分を殺そうとした相手を助けンのかア？」

「お、上条さんと会話が成立してる！

俺だったら敵でも関係ない。

あの時はあの時、今は今」

実際、上条は割り切れていた。

あの時、本当なら真っ先に上条を殺しに来てても良かった一方通行は舞月と戦うために共闘の道を選んだ。

どんな事情があるかは知らないが、前とは明らかに違うことがわかる。

それだからこそ、上条は一方通行と仲良くできそうだ、と思った。

「・・・お前の名前、何だ」

「さつきから上条上条連呼しているんだけど・・・

俺は上条当麻、お前は？」

「・・・名前なんか忘れちゃったよ」

そこまで言ったところで傷口が痛むのか、「グッ」と声を漏らし、肩口を抑える。

——上条、当麻。

俺を絶望へと叩き込み、希望へ導いた男。

あいつは完全な善人だ。俺みたいな悪党とは馴れ合うことはできっこねエ

一方通行はそう考える。

彼は自分から悪党と名乗り、学園都市の暗部に堕ちた身である。それとは違い上条は自分の信念を貫き通す、いわゆる正義の味方という奴である。

正義の味方と、悪党。

対照的な二人だが、おたがい、根は善人。

違う形であっていれば、良き友になったかもしれない仲である。

「さっきの奴とはどういう関係だア？」

「あ、舞月は俺のクラスの副担任。

・・・あいつ、何者なんだよ……

一方通行、何か知ってるか？」

その問いに一方通行は思った。

——先ほど現れた女と上条は知り合いの可能性はある。

上条はその仲間と思う神父と知り合いだった。

ということは魔術を知っている可能性がある。

だが、その思考に水を差した者が居た。

ガラスと病室のドアが開き、ズカズカと入り込んでくる小さな人影。

一瞬、グループの人間かと思ったが、それにしては背が小さい。

148センチぐらいだろうか？と思った時、

一方通行の脳裏に一人の少女の姿が思い浮かんだ。

あのときの白い修道服を着た——

「とうま！こんどはどこで、怪我……………」

あれ？あのときの白い人だ！」

インデックスその人が現れた。

「白いの？」

一方通行が疑問を吐き出す。

彼はとうまという名の男がこのシスター、インデックスの保護者であることは

知っている。しかし、事情は知らない。

しかも、明らかに年下なのに年上を呼び捨てにする言動など、

どこもかしこもおかしい、と思っていた。

「名前で呼んで欲しいかも」

そうインデックスは言う。

「あれ？知り合いか？インデックス、一方通行」

上条が不思議そうな顔をしてインデックスと一方通行」に問う。

「前にそいつにレストランのメニュー全部丸食いされちまったよ」

「うん、そのときは名前知らなかったけど、あくせられーた、って言うんだね」

って言うか、さっきから思ってたんだけど、

どうして魔力の残留反応があるの？」

一方通行の後にインデックスがいう。

インデックスの言葉に驚愕したのは一方通行だった。

こんな幼い少女が、魔術の事に手を出しているということに。

「しかも、これ・・・人間の魔力じゃないと思う」

さらにその的を射ている答えに驚愕する。

「そっぴやア、アイツは、天使とか言ってたな・・・」

「天使！？」

一方通行のつぶやきに一番大きく反応したのは上条だった。

あの海岸で、神の力を目の当たりにしている上条だからこそ解る。

人間が相手にできる領域ではない、と。

あの神裂でさえ足止めが精一杯だったのに、一方通行ともう一人の少年は

まともに正面からぶつかり合っていたというのだ。

それでこれだけの怪我。

普通の人間では死んでいる。

しかし生きている。

これが、学園都市のの實力ということである。

そしてこの前知ったが、第3位から第7位は實力は互角だと。

しかし、第2位、第1位は圧倒的な戦力だという。

天使は一体で人間数千人を相手にできるように、超能力者（レベル5）は一人で軍隊級の戦力であるということを実感する上条。

「天使・・・それなら納得がいくね。

名前は？代表的なのはミカエルだけど・・・」

「アイツは3つの魂がある。

神の如き者、ミカエル光を掲げる者、ルシフェル神の火。ウリエル

表面上はミカエルなんだが、天使3体の魂だ。

人間の体に天使の魂・・・こんなの、ありえんのか？」

その言葉にインデックスが息を呑む。

上条は目を丸くし、言葉が出ない。

あの、人間らしい舞月が、天使。

その中でも最強クラスの天使を体の中に住ませているという。

「普通ありえない、でも、あの人ならありえるかも」

インデックスの言葉に上条は思う。

——あの人？もう舞月って解ってるのか？

「うん、残留魔力が似すぎているからね」

地の文を読まれたにもかかわらず、無反応の上条。

「そんなことより、体は大丈夫なの？」

「まアまアだな」

一方通行の答えに上条がハツと思い出す。

「そういえば、お前1週間入院だってよ」

「なんだと!？」

一方通行が怒りをあらわにした表情で言う。

まあまあ、とインデックスがなだめる。

……案外この二人、いいコンビになるかもしれない。

「チツ……まアいい。」

上条、これから共同戦線張るかも知れねエけどよ？

お前にとって俺は敵、俺にとってもお前は敵だ、覚えとけ」

その言葉に上条は少し驚く。

「上条、ねえ……」

「ンだよ、文句あるか？」

「いいや、ないさ。」

「じゃあな、また来るぜ」

「来なくていい！」という声を受けながら、上条は病室を後にした。

「おお、やっと到着したのでありけるよ」

食堂に居るローラが神裂、ステイル、舞月の到着に声をかける。

「お前はいつもどおりだな、ローラ」

「それは褒め言葉として受け取っておくぞよ？」

「勝手にしろ、用件は何だ」

友好的に接してきている最大主教をさつさとあしらいたいのか舞月がさつさと話を進めようとする。

「何、用件というのは……」

「いつもどおりの手伝い兼お前の世話か」

「よくわかってるではないか。」

「その通りでありけるよ」

その言葉に深いため息をつく舞月。

「な、なんぞよ！？その」

『ああ、また子供の相手をしなくちゃならねえ……。』
「見たいな顔は！？」

その通りだ、とでも言いたければかりに満面の笑みを浮かべ、首を縦に振る舞月。

「うつゝ……ステイル……書類……」

「涙目で言われても……、自分で取りに行ってください」

さらに涙目になってくるローラ。

そして、舞月はそれを見てまた深いため息をつく。

「まったく……お前は変わらんな。」

解った、手伝おう」

「手伝うのですか!？」

舞月の言葉に神裂が驚く。

おそらく神裂としては呆れて帰るとでも思っただろう。

しかし、舞月はそこまで酷くは無い……筈である。

もしくは幼馴染の頼みだから、という可能性もあるのだろうか。
と、そこでだった。

「おや？舞月さんではないですか」

オルソラが偶然通りかかったのか、舞月を見つける。

舞月は週に1回の高確率でここにきている。

一応魔神の力を持つ魔術師だが、人柄がいたためいろいろ馴染むの
だろう。

「おお、オルソラか。久しぶり」

「といっても3日ぶりですけれどねえ……」

という感じで仲良く雑談を始めてしまったオルソラと舞月。

ローラが眉をぴくぴくさせながらその光景を見ている。

「あ、最大主教！抑えてください！」
アイクビショツプ

「そうです！舞月だって最大主教が大切ですよ！」
アイクビショツプ

とステイルと神裂でフオーするが、それを無視して会話をしている舞月達。

「あ、お茶をお持ちしますね」

と、オルソラが行こうとしたのだが、何も無い場所なのになぜか躓
いて転びかける。

「つと……大丈夫か？」

そして、舞月がそれを受け止め、傍から見ると抱き合っているよう
な体勢になる。

それを見て、ステイルが心の中で思う。

（何してんだ！火に油を注いでどうする!!）

そして、先ほどまで神裂達と話をしていたため
転ぶ瞬間を目撃していないローラが舞月を見る。

「ちよちよちよ！変なことはやめい！舞月、さつさと離れよ！」

あたふたと舞月からオルソラを引っぱがすローラ。

（あの人並みにこんな事態が多いですね、舞月さん。

この前はシェリーに、他にも・・・って、この女子寮の

ほとんどのシスターとそういう展開になっていませんか・・・？

やはり、あの人と同じようで———）

（まったく、節操が無さすぎであるよ、舞月は・・・

神裂とか、アニエーゼとか、他のシスターとかいろいろいろいろ！

まったく、神裂の思い人ではあるまいし———）

と、真面目に神裂とローラは考えていた。

（最大主教に思い人あり、コレはニユースですね・・・）

オルソラは、伝説として語り継ぐ覚悟を決めたとか。

第3章 最終話『再開』（後書き）

舞月、しっかり者なんですけれど、女性を前にすると少し弱いです。
一応第4章の6ぐらいまでは魔術サイドです。

今その6と格闘していますがやはり難しい……
頑張って量を増やしたりしています。

一応第4章は一番長く、全10～12話です。
4章日常なのに長いよね。

でも、俺のイメージだと上条の日常＝トラブルなのでw
長くても気にしない。そんなこんな。

どこか不自然な点がありましたらご指摘願います。

次回予告

前半

科学サイドの上条クンです。

これいれとかなないと、ちよいと不自然になるので……
行間でも良かったんですけどね。

後半

舞月戦闘フラグ

舞月最強伝説

6までは結局舞月メイン

舞月ー！お前チートだぞー！

裏設定

舞月はいろんな女性に軽いフラグ（？）を建てている。

それは聖ジョージ大聖堂のほぼ全員のシスターに。

上条とは違ってちよつとしたことでたまに起きるので困るとか。

一応神裂ねーちんとくつつけようかなあ……？とか思っている作

者。

ダメですよねwwでも書きちゃったwwフラグ建てちゃったよ、完全に。

上条さんの比じゃない。やばいことしちゃった。

だーれかー！指摘お願いー！

反対署名一人でも居たら書き直しますからー！

それでは……、反対書名が来ないことを祈りつつ。

また次回、会いましょう

第4章『魔神の日常と科学の日常』 1『闘いのその後』(前書き)

さっさと投稿します。

一応この話はまったく神裂フラグが立ちませんから。

では、本編

第4章『魔神の日常と科学の日常』 1『闘いのその後』

1 十月十日 P・M・2:30

「ええ！？舞月ちゃんか！？」

「あ、はい。……それで、一週間ほどあの残留思念体に任せるとか・
・・」

学校に戻ったら昼休み、ちょうどいいと小萌先生に話したところ、
大変驚かれた。

魔術師だのあの激突だのは伝えず、ただ単にイギリスに急用がある
ので戻った。

と伝え、ステイルからの伝言も伝えたとこ、

ステイルには低反応で、舞月のほうに大変驚かれてしまわれた、と
いう訳だ。

「それで・・・あの塊に任せるのは良いんですけど

あの塊、どこに住ませるんですか？」

「そりゃあ小萌先生の家でしょ」

上条が当たり前のように小萌に言うが、

「今は人がいっぱいなのですよー

ですから、誰かに匿ってもらえないかな・・・と思うのですけれ
ど？」

そうして、二人がうんうんうなっていると、

「ばっ！」

「うわぁ！？」

不意に大声を近くで出されたのでびっくりして飛び上がる二人。

「そ、そこまで驚かなくても良いじゃんよー」

と、少し驚きつつ言ったのは、体育教師の黄泉川愛穂だ。

いつも緑のラインが入ったジャージを着ているが、

胸が強調されているようにしか見えないような状態に陥っている。

ジャージはちよつとした衝撃で裂けそうな感じが否めないが

一応伸縮性抜群なので普通に使えている状況だ。

「あ、黄泉川先生、少し質問なのですよ」

「何？面白いことなら持って来いじゃん」

そう切り出し、かくかくしかじかと小萌が黄泉川に事情を説明する。
最初は黄泉川は興味心身に聞いていたが、だんだん
あちゃー、と言いたそうな顔をする。

「今、うち一人居候が居るじゃんよー」

「それでもなんとか！」

「このとおりです！」

小萌先生の言葉に反応して上条が土下座体勢に入る。

それに対し黄泉川は少しおろおろしたあと、

「……………仕方ないじゃんよー」

そういつて黄泉川宅に舞月の残留思念体が泊まることが決定した。

（イギリスサイドと日本サイドでは9時間の時間差があり、現在イ

ギリス午前5時30分)

「へくしっ」

「どうしました？風邪ですか？」

「いやあ、それは無いだろ。・・・誰か噂してるか？」

とある英国での一つの会話であつた。

「んで、ローラア？お前は何で寝てるんだあああああああああ
あ！！！」

すーすー、と静かな寝息を立ててベッドで沈黙しているローラに向
かつて

舞月が叫ぶ。しかし反応はまったく無い。

「へんじがないただのしかばねのようだ、ってか？

チクシヨウ、俺が全部書類仕事するって・・・・・・・・・・」

そう、今まさに最大主教しかしてはならない仕事を舞月が片付けて
いるのだ。

一応名目上第2位くらいの権限は持っているのだが、さすがに疲れ
てくるのは当然。

「舞月、仕方ないよ。

いつも最大主教はサボってばかりだからね・・・・・・・・・・」

ステイルが舞月の隣で言う。

ローラが書類仕事をかなりサボっているために、舞月は約3か月分
の書類仕事を任されているのだ。

何故だろう？と思う人も少なくは無いが、やはりあのおふざけ最大

主教だ。ということで丸まってしまうところが怖い。しかも神裂の太鼓判入り。

「愚痴をこぼしつつも、あなたはやっているから良いではないですか」

「一応イギリス清教のために働くローマ正教ってどうよこれ」

「舞月、君は無所属に近いだろう？」

神の右席のフィアンマという奴から弟子入り依頼が毎日来ているのにそれを

すべて一蹴するという伝説は僕も聞いているよ」

なぜそれをしてっている？と思う舞月。

一応数回組み手程度ならしてあげているのだが、開始10秒で吹っ飛んでいくので困る。

しかしまあ、書類が後5枚になっているところ、やはり舞月の天性は高いということだ。

「さて、そろそろ終わるし……寝るか——」

「相手をしてもらいますよ、舞月」

舞月がぐっ、と伸びをして、寝ようか。と思っていたら神裂からの組み手の合図。

舞月は普通に建宮か五和とやれというものの断固拒否の神裂。

仕方なく組み手になってしまった舞月であった。

と、言うことなのではよ仕事を終わらせましょ。と舞月は張り切って仕事を始める。

その勢いは普通の人間にはついていけないものだとは、本人は気づかない。

第4章『魔神の日常と科学の日常』 1『闘いのその後』(後書き)

アンケートとります。

舞月の神裂フラグについて

- 1・神裂フラグおk！
- 2・神裂フラグは上条のみだろ
- 3・よし、小説やめろ

感想の一言に1・2・3のどれかを書いてください
今日は寝起きなので…

次回！神裂vs・舞月！

一応戦いますが、舞月さんは刀ぐらいしか使わないので
戦闘描写が少ないです。

一応組み手は戦闘描写減らそうかな、と思ひまして。

それでは、ノシ

第4章 2話 『A・M・8:36』（前書き）

皆様の言葉もありまして、更新する決心がつかしました！
今回は神裂フラグ発動！！！！
よし！本編、行っきまーす！！

第4章 2話 『A・M・8:36』

2 A・M・8:36

組み手の会場は広場。

一応聖ジョージ大聖堂には庭園と広場がある。

その広場では魔術の修行の場所として利用されているため、
シェリーも彫刻の材料集めとして土を持っていく。

しかもその土で作った彫刻には魔力が宿っているため、魔力が宿った土というほど

魔術修行に適している場所である。

そこに二人。

一人はイギリス清教、神裂火織。聖人の一人である。

ワイヤ鋼糸と七天七刀を巧みに操り、魔術と実物を隠蔽するように
使い分ける天草十字凄教の元女教皇である。
フリエステス

現在は天草十字凄教もイギリス清教の傘下に入っているため実質過去の
女教皇に戻ったといつて良いだろう。

その実力は軍隊一つ相手にしても勝てるほどであり、
基本的には同じ聖人かよほどの使い手ではないと勝てない人間である。

もう一人はローマ正教、舞月作玖。

神の右席でありながら、無所属に近い魔神。

その力のために魔術サイド全体から追われるオッレルスと同じように追われる身。

しかしオッレルス同様追っ手を撃退し自由気ままに暮らしている謎の人物である。

その正体は三天使を体に宿す人間で、生命力が膨大なため、魔力生成が一度に大量に行える人間。

この二人の組み手、と聞いてイギリス清教の必要悪の協会に所属するシスターと神父、そして、イギリスの第一皇女から第三皇女に騎士団長ナイトリーダーまでも来ていた。

「こほん、審判は私、アニーゼ」サンクティスが行わせてもらいます。

ルールはどちらかが『参った』というか、気絶すれば残ったものの勝利です。

どこへ攻撃しても良いので……、では、開始！」

その瞬間、轟！と音が鳴り響く。

舞月を中心に魔力の嵐が吹き荒れ、見えるのは輪郭だけとなる。

数人吹き飛びそうになるが、なんとかこらえるほどである。

神裂は全方向に結界をはり、風を防ぐ。

——天使の力はここでは使えない。

俺の正体を知っているのはローラと神裂、ステイル。

そして科学側だと一方通行と第七位、そして上条当麻だけだ。

正確にはもう二人居るのだが、それは無所属だから該当しないしあの人は口が堅い。

舞月はそう考える。

彼が他人に正体を明かさないのには理由がある。

彼は本当は正体を明かしても良いと思っているのだが、彼は追われる身である。

彼らに話すと彼らに害が及ぶ可能性がある。

彼らの実力は舞月本人が良く知っているが、仲間を巻き込みたくない、という信念があった。

おそらくここが上条当麻に似ているところであり、月詠小萌の教え子である由縁（？）である。

「相手は刃、ならばこちらは――！」

魔力の嵐が止まる。

そして舞月の右手に握られていたのは――

「銃、ですか……」

鈍い光を放ち、禍々しくも見える紅い銃であった。

「弾丸装填、種類は炸裂弾、源は紅き翼。

弾数は無限、そして威力は人体を貫く程度に」

その一言に神裂が反応した。

舞月の能力を応用すれば威力は山に穴を開けるほどにもできるだろう。

しかし、それを手加減された。という事実が神裂は嫌だった。自分勝手な我が儘かもしれない。

確かに周囲の心配をする必要があるが、一応結界を張っている。しかも教皇級の、だ。

なので普通の攻撃は通らないのに、それでも手加減する事実。本気で来て欲しい、と神裂は思う。

「行くぞ、神裂……！！」

その言葉と同時に、銃弾が射出された。

神裂が鋼系でそれを防ぐ。

「左手には我が刀を、」

舞月が銃弾を乱射しながら詠唱し、接近する。

神裂が七天七刀を抜き放ち、それを迎え撃つ。

舞月が右足を打ち出す。

弾丸のような速度で迫ってくる右足を、七天七刀の刃で迎え撃つ。観客が息を呑んだ。

素足——というより、靴下を履いていて、ズボンで隠しているだけの足に、

刃を当てるとどうなるか、というのは想像しても解るほどだ。

しかし、神裂はあえて刃を使う。

相手は世界に3人と居ない魔神の力を持つ男なのだ。

手加減したらこちらがやられる、ということを知っている。

しかし、予想とは外れて、それがガキーン！と音を立ててぶつかる。ズボンの上には、紅い粒子で作られた刃があった。

「天叢雲剣、古来より伝わりし魔を切り裂く刀よ！」

詠唱が終わり、舞月の左手に刃渡り2メートルもある刀が逆手に握られる。

その柄は紅く煌き、その刃は闇を切り裂くほど輝いているように見える。

それを見て、一瞬神裂は見惚れた。

しかし、すぐにある言葉を思い出す。

相手をなめてかかつてはいけない。

どんな相手にも本気で相手をしろ。

このことは舞月から教わったことだ。

一対一の場では全力の一撃を必ず出せ。

そこからが本番だ。

と彼は笑って語っていた。

それを聞いていた神裂はそれを納得した。

なぜなら、自分とは違い、毎日追ってに追われ、死地に立つ毎日。その男が言った。

自分と同じように力を持ち、自分と同じように刀を使える魔術師の言葉は

争いしか経験していない神裂に突き刺さった。

そして、その争いを経験しているからこそ共感を抱いた。

こうやって考えている間にも蹴りがどんどん来る。

それを黒鞘で弾くために突き出す。

次の一瞬、黒鞘と蹴りがぶつかり、舞月が吹き飛んだ。

いや、正確には鞘にぶつけた衝撃そのままに後ろに跳んだ、というのが正解だろう。

跳んでいる途中で銃を連射するが、魔力を練った七閃でそれを切り裂く。

間合いが開く。

両者の間合いは5メートル。

踏み込めば攻撃を当てることができる範囲内。

彼女は使う、自分の本気の一撃を。

ボソリ、と魔法名を名乗る。

救われぬものに救いの手を（Salvareooo）

そして、打ち出す。

「唯閃！」

聖人の力をフルに使い、一撃にかける。

計算上だと、天叢雲剣を舞月の手から弾き飛ばすことはできるだろう。

居合い切りの様な体勢から刀を抜きはなつ。

そして、それを見て、舞月は笑った。

彼の心中ではよくやった！と叫んで喜びたいところだった。

だが、しかしこの時は決闘の時。

その時に全力を出す相手に手加減してよいか？

否、と舞月は思った。

「斬魔！！」

舞月が地面を蹴る。

その地面が陥没し、舞月が爆発的な速さで神裂に迫る。

二人の間合いが一気に縮まり、刀のリーチに入る。

そして、二人が同時に刀を振った。

ガァン！！と金属がぶつかる音がした。

結果は、火を見るより明らかだった。

カラン、と刀が落ちる音が鳴る。

神裂火織は七天七刀を落とす。

そう、ぶつかった衝撃により手が麻痺しているのだ。

「——ッ！、参った。」

刀の勝負で負けちまったよ、ハハッ……」

舞月は反動で尻餅を付いている。

見ると、銃の銃身が真つ二つに切れていて、左手には天叢雲剣がない。

舞月は満面の笑みを浮かべた。

アニーゼが、その言葉を聞いて耳を疑ったが、彼女の仕事を果たす。

「……………勝者、神裂火織！！」

ワァァァ！と観客から歓声が上がった。

「次は魔術勝負といこうか？神裂。」

まあ、次は負けないからな、覚悟しとけよ」

舞月の声が聞こえる中、神裂火織は膝をつく。

涙が流れていた。

実は彼女は過去にも何回も何回も舞月に挑んでいた。

そして、その度に敗北し、いつも自分を責めていた。

自分が未熟だからこんなことになるんだ、と。

そして、同年代の舞月にいつもダメだしをされ、話すことといえば全て組み手のことばかり。

神裂は自分では解っていた。

舞月はもつと自分に強くなって欲しい、と。

しかし、思ってしまった。

自分は剣術のことではしか相手にされない、嫌われている、戦力増強の道具としか見ていない、と。

数年前——インデックスがここに来たときから少し日常会話も増えたが

半分以上が義務的なことと組み手のこと。

そして、彼の天性の才能は群を抜いていた。

魔術に関しても群を抜き、戦闘に関しても群を抜き、オックスフォ

ード大学教授級の

教授に教えるほどだった。

彼は全てに関して他より勝っていた。

そして、その壁をついに越えた。

それにより神裂は涙を流したのだろう。

舞月は立ち上がり、神裂の下へ行く。

「おめでとう、神裂。

さ、これから一緒にやっていこうか」

そして、そつと、舞月は神裂を抱きしめた。

それはまるで妹を慰める兄のようで、家族の光景だった。

はい、と神裂は舞月の腕の中で呟いた。

少し離れた場所で、ローラはその光景をじつ、と見ていた。ステイルは少し呆れたような顔でローラを見下ろしている。これに関してはローラも怒ろうに怒れない。

この感動の場面で出て行ったら、かなり徹底的批判を受けるからである。

それでローラはぐむむ、と心の中でうなっている。

「……まあ、彼は手加減していただろうがね」

ローラの隣に立っていたステイルがいう。

「え？それは本当であるか？」

ローラは本意で聞く。

あの闘い、どこからどう見ても手加減しているようには見えなかった（事実、刀の威力は本気）

「勿論。あの化け物級の男がそう簡単に負けるか。彼は攻撃魔術を一度も使っていないよ」

ローラは目を点にしてしまう。

そして、心の中で思った。

後で問いただしてやろうあの大馬鹿野郎、と。

第4章 2話 『A・M・8:36』（後書き）

舞月をめぐるローラvs・神裂!?!という感じが次回、かな？
今回どうでしたか？自分ではかなり長めなのですが…

一応いろいろ変更しました

1・題名 『2話』というように話をつける

2・「」の前と後は一行開ける

この二つ、直したほうが良いなら言ってください
では、これからもお願いします！

第4章 第二話『争奪戦! ?』 (前書き)

ちよいと短めなので連続投稿

第4章 第二話『争奪戦!』

3 A・M・11:42

聖ジョージ大聖堂の中の最大主教の部屋の近くを歩く舞月と神裂。

「結局、いつまで泣いてるんだ？」

「いいじゃないですか……」

と、未だに目に涙を浮かべながら神裂が舞月の問いに答える。

実はあの後自分の行いを思い出してかなり顔を紅くしているのだが、その度に熱があるかどうかを舞月が額をくつつけて測るので神裂は余計に顔を紅くしている。

「……これ以上泣くなら俺の部屋着て泣け、これ以上人に涙を晒すのは嫌だろう」

一応大和撫子である神裂だ。人に涙を晒すのは恥だろう――。

と、舞月は考えていったのだが、異性の部屋に入るのが初めてな神裂にとってはそれが異様に驚く。

（鳴け!? え、ちょ、まさか誘っているのですか!? いやそんな馬鹿な。

私が動揺しているだけですええそうですも! 神裂火織、落ち着きなさい、落ち着け!）

と神裂が考えるのだがそんなことはお構いなしに手を引っ張り部屋に連れて行くとする舞月。

――なんだろう、思ったけれど、舞月の本性って変態?

と思ってしまうような光景だが、一応彼はオルソラの太鼓判入りの天然である。

あのオルソラが言ったのだから間違いない。

だが、そこに最悪の火種が舞い込む。

「さつきからさつきから……舞月い？お主は何を考え——」

身長160センチぐらいの人影が舞月に言っている途中で

「あー、ちよつと話は後で。まだ神裂泣いてるから」

とお構いなしにスルーしたため、彼女の怒りが爆発した。

「この大馬鹿天然タラシ野郎め！幻想殺しに殴られたわけでも無かるうに！」

と思いつき舞月の前に回って額に頭突きをぶつけた。

その人影はローラだった。

ローラはローラで痛かったのか、額に手を当てて涙目になっているが、

神裂の手を離しすつ飛んでいく舞月。

「だ、大丈夫ですか！？」

と神裂がまだ涙目の表情で舞月を介抱する。

「……あ……あれ？樂園が見えるよ……」

と意味不明なことを呟きながら神裂の頬に手を伸ばし、顔を近づけ、その唇に——

「この……どアホー！！！！」

瞬間、ローラの拳が舞月に炸裂した。

が、それがまたもや悪い方向に運ばれる。

横に吹き飛ばされた所為で神裂の胸にダイブする形となった舞月は

そのまま

神裂を押し倒す。

ひゃあ！？と神裂が声を上げるも、先の一撃によりもう舞月は気絶状態だ。

しかしまあ、胸に顔を押し付けられているため神裂も恥ずかしいのか、

舞月を退けて、神裂が立ち上がる。

顔がかなり赤くなっているが、舞月をおぶってから、仕方なく舞月の部屋に連れて行くことにした。

「ふ……………不幸でありけるよ……………」

ローラの不幸な呟きが発せられた。

(……………ん？体の節々と主に顔面が痛い……………)

舞月は意識が朦朧とする中と思う。

実はあの後から1時間たっているという事実を舞月は知らないのだが。

そして、気づく。自分の右腕と左腕に柔らかな感触があるということに。

そして、すーすー、という静かな寝息。

静かに目を開けると、金色の長い髪と黒い後ろで結ばれた髪が見え、さらに目を開くと、自分のベッドの上なのに自分に寄り添うようにして寝ている

神裂とローラが見えた。

と、その瞬間。

カシャ、というカメラのシャッター音が聞こえた。

「いよおおおし！元女教皇のスクープ写真ゲットオオオオオ！！」

と神裂達に聞こえないレベルの声で言うが、舞月には鮮明に聞こえる。

見ると建宮斎字が居るではないか。

その顔はまるで面白い玩具を見つけたような瞳をしており、舞月には建宮の心の声が聞こえた。

『学園都市にだけではなく、世界に三人と居ない魔神も元女教皇の想い人だったとは！』

舞月い……、いつも通りだが二股はいけんのよ！』

「——ッ！」

声を出そうかと一瞬思ったが、寝ているのを起こすのも悪い。そう考えると声が出ず、さらに体も動かせない状態。

なので、少しイラつときた。

と、次の瞬間。

ゴシャリ、とカメラが潰れる音がした。

「ああああああ！俺のカメラがアアア！！」

と建宮は涙を浮かべる。

——斎字の野郎ざまあみやがれチクショウが

と、舞月は心中勝ち誇ったような笑みを浮かべる。

が、建宮はすぐに笑みを取り戻す。

「メモリー抜いておいてよかったのよな……」

建宮の右手にはメモリーカードがあった。

そして、舞月が行動を起こす前に即行で逃げ出していた。

……神裂、ごめん。
舞月は心の中でそう呟いた。

第4章 第二話『争奪戦!?!』(後書き)

建宮うぜえ

もっとやれ

ククク、これからは争奪戦に近い物があるのですよ！
ということ、で、連続投稿

第4章 第4話『神裂と舞月』（前書き）

今回は完全に神裂フラグが立つのに
舞月さんあまり考えてない、の回です。

第4章 第4話『神裂と舞月』

4 P.M. 1:30

神裂火織は目を覚ました。

(……む？私は一体……)

寝起きだから頭が回らないのか、体を起こすこともせず記憶をたどっていく神裂。

!!!!!!!!!!

その瞬間、神裂の顔が茹蛸のように真っ赤に染まる。

自分のした事されたこと全てを思い出した。

自分と舞月、そして舞月を介抱する自分。

そして、ここが舞月の部屋で、舞月の看病(?)をしていたら

ついつい寝てしまったこと。

そして、自分の頭の下のものに気づいた。

舞月の腕。

そして、舞月の白いシャツが濡れている事もみえ、舞月の寝顔が見える。

シャツが濡れているのはあの時泣いたから、という事実を思い出し、かなり恥ずかしくなってくる神裂だったが、よく見たらそのシャツの下のほうに金色の髪の毛が数本見える。

そして、その方向へ視線を手繰り寄せると……

「あ、アーキヒシヨツ最大主教!？」

驚愕の声をだしそうになるも、それを寸のところまで止める神裂。

そして、学園都市にいる一人の少年のことを思い出す。

——ああ、なんだか似てるなあ、この二人……

しかしまあ、今は神裂は目の前のことに精一杯だ。

ゆっくりと起き上がろうとする。

「ありゃ？起こしちゃったか？」

舞月が目を開けて神裂に向かって呟いた。

！？、と神裂が目丸くする。

どうやら舞月は神裂を起こさないようにして寝ていたらしい。

その優しさは、あの少年同様の物だったが、彼女は舞月の表情が目
に焼きついた。

今まで一度も見せたことの無い、家族に接するような顔。

一応ステイルは弟同様に扱っており、ローラは少し年下だから妹の
ように接してあげていたが、

今回は違う表情。明らかに家族に接するような表情だった。

そして、胸が熱くなるような衝動に駆られ――

「どうした？熱でもあるか？

……、おかしいな、さつきまで無かったのに」

と、舞月が額をくつつけてきたため、神裂の考えが吹き飛ぶ。

吐息がかかるほど顔が近くにあり、少し動けばぶつかるほど――

「！？」

言ってる傍からやりやがった神裂の奴。

不用意に動いたため神裂の唇が舞月の唇に重なる。

それに何より驚いたのは神裂だろうが。

3秒位唇が重なった状態の二人。

驚きにより硬直しているため、舞月の腕に余計にしがみ付いている。
だが、ハッ、と我に返りサッとすぐに顔を離す舞月と神裂。

お互い顔を紅くして視線を合わせることでもできなくなっていた。

……この状況をローラが見ていなかったただけ良かっただろう。

一応ローラはすやすやと舞月の左腕に掴んでいて、

「舞月……」と笑みを浮かべて腕に頼ずりしているのだがそんな

ことはどうでもいい。

舞月はまったくそんなことに気づかず、唇を押さえて顔を真っ赤にしている。

「そ、その……」

神裂が重い空気を吹き飛ばそうと唇を開くのだが、よくよく考えるといまだに腕にしがみついており、胸が——と、そこまで考えてまた沈黙が流れる。

「……、」

「……、」

「すいませんでした!!」

ほぼ同時に頭を下げる二人。

舞月も神裂も器用に距離を取っていて、お互い頭がぶつかるかぶつからないかすれすれの所である。

「本当になんとお詫びしたら良いか!」

「いえいえいえいえいえいえいえ、謝るのはこちらです! 一応火織に想い人がいると言う事は知っていますよええ知っていますとも!」

と、舞月の一言に神裂が硬直する。

「……今、なんと?」

神裂の威圧的な一言に舞月がビクビクしながら答える。

「い、いえ、ですから、火織には学園都市に想い人が——」

その一言で神裂のこめかみがぶちり、と嫌な音を立てた。

「うつせえんだよこの馬鹿!!」

その一言に舞月がビクウ!と体を震わせる。

「私だって……好きでそんな噂流されている訳ではないんですよ! 確かにあの少年には恩がありますけれど、好きだということではないんですよ!」

「……………はい?」

舞月が目を丸くする。

どうやら本気でそう思っていたらしく、ポカンとしている。

その事実は何故だか解らないが神裂は目に涙を浮かべる。

「ですから、彼は恩人ですけど、恋愛対象にはしていません!!」

それに、私は——」

「私は?」

舞月が本気で純粹に質問する。

何この子上条みたいに変な考え持つてなくて考えていることが自分のために役立つことと

他人とために役立つことぐらいってどういうことよそれ。

と、筆者は愚痴を零してみるわけだが。

顔を余計に紅くする神裂。

「——っ! 何でもありません!!」

そう言っつて、フイツ、とそっぽを向いてしまう神裂。

しかし、いまだに涙を浮かべている事実は隠せない。
そして、まただった。

舞月がそっと自分のほうに神裂を抱き寄せる。
神裂が舞月に寄り添うような形となる。
舞月は少し気まずそうな顔をしながら

「つと……、勘違いしていて悪かった。

……あんまり、その……、お前の好きな人が誰とか、さ。
気にせずやっていこう、な？」

その台詞の後、舞月が少し顔を紅くする。
その表情はなかなか見れる物ではない。

そして、神裂はそのまま舞月に抱きつき、舞月の頬に両手を添える。

「え、ちょ、神裂？あなた様は何を行おうとしていらっしやるのですか？」

「火織」

「へ？」

唐突に自分の名前を神裂が舞月の目の前で言う。
その言葉に舞月が頭に？を浮かべている。

「そう、今度から呼んでください。先ほどのように」

と、その言葉に舞月の顔が赤くなる。

そして、それを見てクスリ、と神裂が笑い、そのまま唇を重ねた。
神裂はそのまま舌を舞月の舌と絡ませる。

「んっ……あっ」

少し神裂から声が漏れる。

そして、神裂は顔を離す。

舌と舌の間には銀色の糸ができており、それがプツリと途切れる。

「……火織、お前、そんなに欲求不満が……」

「違いますから」

舞月の言葉に神裂が言う。

だが、その頬は主に染まっており、大和撫子らしき色気もあふれている。

「……でも、もう一回」

やっぱり欲求不満じゃないか。と思いつつ、舞月は神裂の頬を両手で掴み、

そして、そのまま舞月はもう一度顔を近づけ――

「舞月……お主、そこまで節操が無かったか……」

そのままの体勢で舞月と神裂が左側を見る。

「ろ、ローラ……、これには訳が――」

そこには、呆れ果てた顔をしたローラがいた。

一応2秒前におきたローラだが、今の態勢を見ている。

おそらくこの状況を見てかなり変なことを想像しているに違いない、と

神裂と舞月は思ったのだが

「おとなしく寝ておれ、一緒にな」

そういつて、神裂ごとローラは舞月を押し倒し、無理やり眠りの体勢に持っていったとき。

ローラはもう神裂だのなんだの気にせず、ただ単に寝たいだけだった。

イギリスと日本の時差は九時間なので、ちょうどいまがお昼時のイギリスだったとき。

（……、結局、私は欲求不満な親友という設定に組み替えられたのでしょうか？

でも、舞月の初めてはもらいましたよ！これは一番の決め手！）
神裂は心の中でガッツポーズをとるのであった。

第4章 第4話『神裂と舞月』（後書き）

今回どうでしたか？

あまりなれない恋愛パート的なところです。

ローラさん空気ですね、はい。

でも、案外上手く出来たのでよかったです。

今回からかなりバトルパートがないです、ほとんど恋愛系
それでも呼んで頂けます事を

第4章 5・6『魔神にも苦手な物はある』（前書き）

今回はみづきんの苦手な物として5・6がちょうど繋がられそうなので繋がりました
では、本編どうぞ

第4章 5 / 6 『魔神にも苦手な物はある』

5 P.M. 2:13

「ごうがーい！」

建宮斎字は必要悪の教会の本拠地である聖ジョージ大聖堂の中を走り回っていた。

その右手には大量の教会新聞。

毎週作られている教会の人のために無償で配られる新聞である。

主に天草十字凄教の人間が編集しており、現在の編集長は建宮である。

その建宮が教会内のシスターに神父にとどんどん配っている。

はて？何があつたのだろうか、みたいなノリで新聞を読んだ瞬間、神父たちは舞月に殺意を、シスターたちは顔を真っ赤にする。

なぜなら、一面を飾っている写真が、舞月の左側に寝ている最大主教と右側には神裂火織。

二人は整った顔立ちをしていて、さらにかなり有名なため皆知っている。

そしてそれが自分達もよく知る舞月と寝ている。

その時点でおかしい、と思う。

そして文にはこう書いてあった。

『元女教皇と最大主教の想い人発覚！』
プリエステス アークヒシヨツ

元女教皇の当初の学園都市に居る想い人の噂は間違いであり、こちらが本命！？

さらに最大主教の幼馴染の舞月作玖が二人と一緒に寝ている光景！？これは一体どういうことなのか！？真相は本人にインタビューしたいところだったが

残念ながら無理でした』という文字。

それは直ぐにシェリーやルチアにアンジェレネ、アニエーゼにオルソラ、とどんどん伝播していく。

ステイルの耳にもはいり、ステイルは笑い転げそうになるが一応それはそれで大変なことである。なぜなら、イギリス清教の人間がローマ正教の人間に恋をしたとなれば、

一種のスキヤンダル化するのだ。

それはそれで大変だな、と思ったステイルは、ローラの部屋に行き何かをし始めるのだった。

そして、お昼ご飯の時間になる。

一応少し遅めの2時だが、彼らにはこれが調度良いらしい。

そして食事当番がオルソラということもあり、シスターは全員出席している状態。

神父のほうは料理がうまいということで評判の若手神父が担当している。

今日は朝っぱらから組み手があつたため、調度良いとばかりに彼らは勝手に

聖ジョージ大聖堂の大広間を食堂に組み替えたのだった。

一応神父の一人のステイルもそれに賛成しているため、男子寮女子寮全員分の椅子に、

舞月と最大主教の分が追加されている。

「あれ？今日は全員出席？」

「当番がオルソラですからね。」

それに、神父のほうも料理がうまいと評判の若手神父ですし」

「へえ……、皆でこのようにして食べるのでありけるのか？」

と、そこに件の三人が現れた。

一斉に皆の視線が三人に集中する。

「……、火織、なんかすつごく視線が痛いんだけど」

「私事です」

この二人は気づいているようだが、ローラは眠いのかまったく気づいていない。

そして、舞月が神裂を下の名前で呼んだことで周囲に一気に変な空

気が漂う。

『え、もう二人は下の名前で呼び合う仲？』

『てか、今のところ舞月だけだ、大丈夫、まだ大丈夫』

『三人揃って……、やはりあの新聞は真実！』

などという声が飛び交っている。

そして、こほん！、と一際大きな咳払いが聞こえる。

先の組み手で審判役をした、アニエーゼだ。

実質的に彼女は神父とシスターのまとめ役のようなところがある。

カツカツと靴の音を立てながらアニエーゼが舞月のところに歩み寄る。

「えっと、お三方に質問なんです。

この光景に見覚えは？」

と、アニエーゼが例の新聞を取り出す。

なになに？と興味津々に新聞を三人が見る。

「な、なんですかこれは！？」

神裂が驚愕を露にする。

そりゃあ、あの光景を見られたら誰だって驚くだろう。

「むー……？ありけるよー」

ローラの眠気を纏った言葉に周囲が驚愕の声を上げる。

もちろんアニエーゼも驚きを隠せないまま聞く。

「っ、次です、次！

舞月さんは二股をかけているって言うのは本当のことなんですか？」

その一言で舞月がなっ！？、と声を漏らす。

そりゃあ、ありもしない濡れ衣を着せられそうになっているのだから。

助け舟を求めるように左右を見るも、両側顔を真っ赤にしている。

ローラまで眠気が吹き飛んだらしい。

「断じてない！まず、俺は誰とも付き合っていない！」

舞月が首を横に振りながら答える。

だが、アニエーゼはそれを噓くさそうに、

「じゃああの公衆の面前で神裂さんを抱きしめることができるのは？ あれは両者の了解がないとできない芸当なのでは？」

「あれは、妹を慰めるような感じで！ な？ 解るだろ？ 兄が妹を慰めるような気持ち……」

一応5年以上の付き合いなんだからさあ、それに組み手の相手もしてやっていると、

親近感が沸くって言うかなんていうか！」

「そうです！……私も嫌ではありませんでしたし」

最後の一言は誰も聞こえなかったが、神裂までそう言ってしまったなら追求できない。

「こ、こほん。これが最後です。」

まあ、これは私個人の質問なのですが……、

ここにいる全シスターに行ってきた行為は全て責任取れますか？」

アニエーゼが顔を紅くして舞月に聞くが、舞月は途端にキョトンとした表情をし、

「……、俺、なにかしたっけ？」

その一言で、全シスターが立ち上がり、口をそろえていった。

『ちよつと後で女子寮の食堂へ！！』

舞月はとても威圧的なシスターたちに逆らうこともできずに、

「は、はい解りました！！」と敬礼して言ってしまったほどだった。魔神にも、苦手な物はある

6 P.M. 3:57

昼食が終わって早々、舞月は現行犯逮捕された犯罪者のようにルチアに取り押さえられ、

アンジェレネに縄でグルグルに縛られ、アニエーゼにずると引きずられてしまった。

神裂はそれをおろおろとした様子で見ていたが、シェリーの視線に

気づき仕方なくついていった。
そして食堂。

舞月を中心にシスターがズラツ、と取り囲んでいる。
総勢約320人を前にして舞月はどんな拷問を受けるのかビクビク
していたが、

一番にシスター・アガターが口を開いた。

「……、舞月さん」

「は、はい！」

背筋をピン、と立てて前に進んできたアガターを見る。

アガターは舞月の前に立ち、視線を同じくらいにすると目の前で言
う。

「責任、取ってもらってもよろしくて？」

「は、はい！？私が一体何をしたというのですか！？」

シスター特有の真つ白な純粹な笑みを浮かべ、アガターは言う。

「……、父にも抱きしめられたことがなかったのに。

初めてをあなたが奪ったのですよ？」

その言葉に神裂が反応する。

眉を吊り上げ、少しわなわなと震えている。

神裂は奥歯をかみ締め、

（解っています、どうせこうなることぐらい！

あの人の節操のなさは私が良く知っている筈です！）

などと自分に言い聞かせて理性を保とうとしている。

だが、しかし、他のシスターがどんなそんなことを言う。

それに関してはオルソラは黙っている。

なぜなら、オルソラはまったく気にしておらず、逆に

『あの人との予行演習になりましたわ』

というほどである。

だがしかし、アニエーゼやシェリー達まで愚痴を舞月に零している。

「……うう……、舞月さんは一体何をすれば許してもらえるの
でしょうか……？」

俯いて舞月が言う。

その一言でふむ、と考えるシスターたち。

「付き合ってもらうとか？」

「いやいや、好きでもないのに？」

「…あのー、私好きなんですけどー……」

などなどいろいろ飛び交い、最終的に

「神の右席をやめてローマ正教もやめる！そしてイギリス清教へ」

「だが断る！！！！！！」

その瞬間に眼の色が変わり、先ほどまでの弱弱しいような雰囲気
が吹き飛び、

今にでも聖ジョージ大聖堂を吹き飛ばしそうな勢いで断固拒否の舞
月。

「ローマ正教は抜けてもいい。でも神の右席はNO！！」

紅い翼を出しそうな勢いの舞月。

さすがにあれを出されると太刀打ちできるのはゴレムや魔女狩り
の王に神裂とローラの

四人（？）に限定されてしまう。

だが、そこにローラの一言が舞い込んだ

「先ほどローマ教皇と（ステイルが）直接交渉して来たのでありけ
るよ

結果は勝利、今日から神の右席『中央のカオス』は神の右席であ
りながら

無所属となったのでありける！我らの勝利！！」

その一言にシスターたちが歓声を上げる。

そして、同時に言う。

「一日イギリス清教のために働く、にけつてー！！！！」

舞月は啞然としたまま決定され、縄を解かれた。

そして、その後、舞月が言われたことすべてをこなし、

イギリス清教3か月分の仕事が終わったのはまた別のお話……

「舞月、悪いね」

その光景を遠くから見ていたステイルがぼそりと呟いた。

そして、舞月が晴れて無所属となつてから4時間が過ぎた。たった四時間で3か月分の仕事をこなした舞月はつかれきっていた。

「ご苦労様」と、ステイルがコーヒーを差し出す。

「おお、ありがと」といつて普通に飲み干す舞月。

ステイルはため息をついて舞月の前にすわる。

ステイルは神父だ。基本的には神父が女子寮の食堂に入ることは許されていないが、

彼は神裂に事情を話し、神裂を通してシスターたち全員にOKをもらっている。

なので、ステイルは特例扱いとして女子寮には入れている。ぐだー、とうなだれている舞月をみて、ステイルは言う。

「……君と同じような境遇にいる魔神になり損ねた男がいる。

ってというのは知っているかい？」

舞月はその体勢のまま、ステイルの顔を見て言う。

その表情はとても神秘的な顔だった。

「ああ、一番良く知ってる」

その言葉にステイルが眉をひそめる。

舞月は懐かしむように言う。

「俺の師匠だ。魔術のな……」

ステイルは驚いた。

まさかこの魔神に師匠がいたとは思わなかったからだ。

だが、冷静に考えると独学で魔術を学ぶのは難しい。

誰かに拾われ、それが偶然魔術師だった。というのはありそうな話である。

だが、この会話に水を差したものがいた。

神裂だ。

「すいません、玄関まで来てもらえますか？」

舞月に会いたいという人がいるらしくて……」

その言葉に舞月は首を傾げ、誰だろう？と思いながら神裂についていった。

玄関まで行くと一つの人影が見えてくる。

舞月はその人影に見覚えがあった。

紫に近いグレーの服の上にウエスタン風のジャケット
緑色に白の斑点模様のズボン。

そして、金髪に緑眼。

とても整った顔立ちだが、それでもって何かが違う。

普通の人間とは違う何かを、彼は纏っていた。

そして、舞月はその顔をとてよく知っていた。

「久しぶり、師匠」

「よう、舞月」

魔神になり損ねた師匠と、魔神になった弟子。

彼らは5年ぶりに再会した。

第4章 5 / 6 『魔神にも苦手な物はある』（後書き）

オッレルス帰ってきたよー！（ちよつと違うけど
オッレルスの登場です、次回は完全解説パート！

総合評価が100越えました！

これも皆様のおかげです、ありがとうございます！！
今後ともよろしく願います。

それではまた次回

第4章 第七話 『シルビアとオッレルス』（前書き）

今回はシルビア登場です。

オッレルスといえはこいつだな、と思ひまして。
ではどうぞ

第4章 第七話 『シルビアとオッレルス』

7 P.M. 7:24

一応現在女子寮から離れることができない舞月はオッレルスを招き入れた。

オッレルスは玄関で話をするつもりだったらしいが、ローラが途中で割り込んできて上がれと急かすので、オッレルスは渋々入ったわけだ。

だが、そのため周囲からは異様な視線を向けられる。

魔神の力を持つ二人が目の前にいるのだ、無理もないことだろう。オッレルスはその視線の矛先がほとんど舞月に向けられていることに気づいて、

少々感心したような表情で

「舞月、お前もうそんな年頃に……」

「どんな年頃だ、一応俺はまだ18だ」

オッレルスの一言にすかさず反応する舞月。

一応れっきとしたティーンエイジャーだが彼は恋愛には疎いらしくまったく女心（乙女心とも言う）が解っていない。

だが、それを知ってか知らずかオッレルスは少し笑みを含めて言う。

「いやあ、お前を拾ったところが懐かしいだけだ。」

確か……3歳のころだったか？

オッレルスは舞月の育ての親である。

そして、彼の正体を知る者の一人で、彼の魔術の師匠である。

確かに舞月は天使の力を持っていた。

しかし脳はただの赤ん坊。

なので理解はできてもちゃんとした成長が行われなければならないのだった。

「まあ、そんなところかな……、あれから15年か」

「案外短いようで長かったな？」

「まあ、父さんが嫁をもらって何より」

その一言でオッレルスが飲んでいたコーヒーを噴出す。

舞月は少し目を丸くし、「大丈夫か？」と聞く。

だが、オッレルスはまったく違うことを考えているのかぶつぶつと

『え、何？俺とシルビアって夫婦にみえんの？

シルビアにいつとかねえと……』

などところによごに言っている。

だが、舞月は直ぐに表情を戻す。

至極真面目に舞月はオッレルスに向かって口を開く。

「学園都市、話は聞いたぜ」

「ああ、やったよ」

自白するように舞月に言うオッレルス。

彼は十月某日、学園都市の超能力者の第七位、削板軍覇を北欧王座の論文を利用した

『説明のできない力』でねじ伏せている。

彼はそれにより、学園都市統括理事長に自分の意思を示した。

そして、オッレルスが舞月を見て言う。

「お前もらしいな」

「まあな……」

オッレルスも少し話は聞いていた。

舞月と超能力者達の激突。

そこにはオッレルスが出会っていない、

第一位の一方通行と幻想殺しの上条当麻もいた。

だが、彼らが共通して出会っているのは第七位、削板軍覇

『説明のできない力』を持つ、世界最大の原石だ。

「どうだった、あの第七位は」

オッレルスが真面目な顔で聞く。

オッレルスはある闘いで第七位の实力を見ている。

地盤を割り、崖の様にするほどの力を持ちながら、『説明のできない力』を自覚していない。

確かに、『説明のできない力』を完全に理解していないのはオッセルスも同じだ。

だが、この目の前の舞月はそれを理解してしまっている。ただ、本人曰く『言語化できない』というだけらしい。

しかし、もしも舞月が『説明のできない力』を操る者と戦ったら？ 実力のほどは見極めることができるだろう。

オッセルスはそれを期待して聞く。

「ああ……、基本的な実力の底上げはあった。だがまあ、

いまだに自覚できていないからそれが丸つぶれだけだな」

そう、削板は周りの被害を抑えながら、一撃一撃の威力が高かった。紅い翼で相手をしていたものの、たまに紅い翼の一部が砕け散ったときもある。

そして、『説明のできない力』を一発食らっている舞月。

オッセルスには原理が余り解っていない。

だが舞月は『説明のできない力』を『説明のできる力』と同様に使っている辺り、

基本的原理は同じだと伺える。

しかし、『説明のできない力』と『説明のできる力』の違いは、範囲指定がされているか、威力が指定されているか、飛距離（もしくは攻撃距離）が

完全に指定されているか、この三つで理解できる。

そして舞月の場合、万物を操る能力を持っているためそれを応用し、魔力を自然界の生命力マナからも生成できるので、

いきなり敵の目の前で魔女狩りの王を出そうと思えばできるような人間だ。

しかし、『説明のできない力』に関しては、舞月も自分の魔力を使っている訳で、

神話級の術式に関しても自分の魔力しか使っていない。

何故か？という疑問が生まれるかもしれないが、

『説明のできない力』と神話級の術式には能力者の

自分だけの現実と似たような感じの物がある。

故に、自然界のようにさまざまな生命力マナが混ざってしまっているものではダメだということらしい。

そのため、個人の生命力マナという世界に一つしかないものを魔力に使うという手しかないのだ。

しかし、神話級の術式は自然界の生命力マナを一部借りている。

それは神話級の術式は超自然マルフィウムに干渉しなければならないからだ。

その超自然マルフィウムの中から生命力マナを取り出し、それを

個人の魔力と混合させ、『特殊な魔力』アナザーマターに変換し、

神話の世界である神の世界とリンクを張り、そこから

神器じんぎを取り出すという行動をとらなければならない。

そのため、個人の魔力が必要であり、神の世界とリンクを張ることができる。

『特殊な魔力』アナザーマターを生成することができる超自然マルフィウムに干渉し、

それを個人の魔力と混合させる技量が必要なのである。

これは通常、超自然マルフィウムの生命力マナを個人と混合する時点で

まず個人の生命力とぶつけてしまう為、

拒絶反応が起こって不完全な神器が取り出され、己の身を滅ぼすという結末に陥ってしまう。

あの北欧神話のティルフィングが例として挙げられる。

ドワーフに作らせた神器を、違う人間が使ったために呪いが生まれ、3回まで主の願いを聞き入れ、抜けば敵を全て切るが、それ以降は破滅の道である。

それは、ドワーフと、99パーセント同じ魔力を持っていればまだ発動しなかったかもしれないが、

ドワーフの魔力は天使に近い物がある。

なので、神器は人間が生成しても、他人の手に渡ればその他人が滅ぼされる、ということである。

だが、その神器は一人の人間が生成し、生成者が魔力を込め、生成者が使えばそれは

意のままに操ることができる。

これはオッレルスも舞月に言われて初めて気づいたことで、それにより北歐王座を、より攻撃的にすることに成功した。

そして、それは能力者も同じである。

「超自然マルフィウムとの、リンクの強さ、か……」

オッレルスが呟く。

彼と舞月は数年前に離別するまで共に研究を重ねてきた。

その研究は能力者の能力の発現について。その研究によって解っていることがある。

どんな能力でも『自分だけの現実パーソナルリアリティ』があつて、演算がなければ無理である。

この『自分だけの現実パーソナルリアリティ』は超自然を個人差はあるが数パーセント視覚化し、

その分だけリンクを張る方法を提示する、という方法というのが舞月の感想だ。

学園都市統括理事長は超自然を知っている。なのでそれを利用する方法くらいは思いつくだろう。

だが、学園都市の超能力者（レベル5）の第七位はそれを自覚せずに使っている。

正確に言えば、超自然マルフィウムの視覚化が能力開発の時間割り（カリキュラム）ではなく、自然の中で発生したため、

より近くで超自然マルフィウムとリンクを張っているわけである。

なので、より超自然マルフィウムの力を引き出せているおかげで『説明のできな
い力』を行使しているのである。

しかし、それを何か理解しているか、理解していないかの二つで力の引き出し方が大幅に変わる。

上条当麻はどうか？という疑問が浮かぶが、魔術、科学両方のかなり奥深くまで知っている。

そのため、舞月やオッレルスの見解だと

『知識を得る度に幻想殺し（イマジンプレイカー）は成長していく』

ということである。

それは、身体的にも精神的にも、だ。

実は、幻想殺しは噂だけなら舞月もオッレルスも研究当初から知っていた。

だが、その実態は完全に不明確。

明らかに神の持つ神器を超越した能力。しかし、それも万物の一つ。舞月は万物を操り幻想殺しを無効化することならできる。

だが、それは最高でも3時間が限界と推定している。

それ以上すると、超自然とのリンクが切れ、個人の魔力を殺されるからである。

魔力を殺す、という表現は少しおかしいが、幻想殺しは超自然と常時リンクを四十パーセントほどつないでおり、人間の限界を超えている。

舞月の場合は、天使が超自然の一部なので完全にリンクを張っているが、

幻想殺しはそのリンクに触れただけで壊せる。

確かに一瞬で修復するが、それでも完全なリンクを破壊するほどの力は普通にありえない。

そして、削板軍覇。彼は舞月とオッレルスの見解では幻想殺しを上回るリンクの強さを誇っている。

超自然を少しでも理解したとき、今の三倍の力は引き出せるということが解っている。

「しかし、幻想殺しつてのは何なのかねえ……」

舞月がボソリ、と呟く。

「俺の予想だと聖書に記されている救世主^{メシア}の奇跡とほぼ同じ感じだが」

オッレルスの言うとおり、聖書に記されている救世主^{メシア}はその後人間から神になり、悪魔を抜った。

ということは、上条の幻想殺しは魔の物とされる異能を打ち消す働きを持っている。

そう舞月達は考える。

「削板軍覇、アイツみたいな説明のできない力とぶつかれば、幻想殺しはもつと強くなる。」

それが俺は一番楽しみだなあ……

それに、削板も強くなる、一石二鳥だ」

舞月がとても面白可笑しそうに笑う。

オッレルスはそれを見て少し目を丸くする。

まさか、舞月は幻想殺しを一人の敵ではなく、研究対象としてみているのか？

それは舞月の特性が一番滲み出ている所だが。

しかし、それは狂人の性格でもある。

それを良く考え、オッレルスが口を開こうとしたときだった。

「オッレルス！おいコラどこ行きやがったああ！」

食堂中に女の声が木霊する。

その言葉にオッレルスがビクウ！と体を震わせる。

そして、ビクビク震えながら後ろを見る。

「あ、母さん」

舞月が呟く。

オッレルスの背後から12メートル程離れたところには、

メイド服をきていて、短めの金髪に蒼眼の顔立ちの整った女性が居た。

一応頭にバイク用のゴーグルのようなものをつけているがそんなことは関係ない。

「母さん！？オッレルス！この子に何を吹き込みやがった！！」

もう音速超えてるんじゃないかというほどのスピードでオッレルスの目の前まで接近し、

そしてオッレルスの胸倉を掴みあげる。

「ちよちよちよ、ちよつとまでシルビア！」

俺は何も言っていない！舞月は俺の————」

「舞月！？どうしてこの女の名前を知ってるんだ！」

女？と舞月が首をかしげる。

実を言うと、舞月は上条達には一瞬で男と見分けられている。だが、その理由はしつかりある。

実を言うと、上条や土御門は殴られたときの威力で解っており、一方通行は着ていた服装で一発で理解した。

が、しかし現在の舞月は男でも女でもどっちでもありですよ。

というような服装をしている。なのでそのため男か女かわからなくなっている。

一応それ以外の人たちは舞月と事前に知り合っているため知っている。

が、シルビアはまったく知らない。

オッレルスと舞月の関係やらなんやら全部纏めて、だ。

「女じゃないって！こいつは俺の義理の息子！！」

「そんな証拠がどこにある！」

なんだか騒がしくなってきたので收拾をつけなくなってきた舞月が口を開いた。

「あの……、父さんの言ってることは事実です。」

俺は舞月作玖。一応これで解ると思いますけど……」

舞月がシルビアに言う。

その一言でシルビアがオッレルスの胸倉を掴んだまま、キョトンとした表情で舞月を見る。

そして、少しじまじまと舞月を見た後思い出したように言う。

「あ、ああっ！舞月！あの魔神の舞月作玖！

い、いやー、人相は知らなかったなあー」

オッレルスの胸倉から手を離し、あははあはあはと笑うシルビア。

ゴホッゴホッとオッレルスが咳き込んだため、舞月は心配そうな目で見る。

それに気づいたオッレルスが舞月を見て

「ゴホッ……、いや、大丈夫だ。いつものことだし」

といまだに少し苦しそうな表情で言う。

舞月はまず状況を整理したいため、シルビアに座るよう促す。

「まず……、母さんは何故ここに？」

舞月がシルビアの真正面から核心を突く。

その一言にシルビアは少し頬を赤らめ、

「……、その母さん、っていうの、やめてくれないか……？」

シルビアが舞月に言うが、舞月ははて？と小首をかしげ、

「だって、父さんと結婚してるから、母さんじゃないの？」

その言葉に、シルビアが椅子ごと真後ろに倒れ、顔を真っ赤にして言う。

「わ、わわ、私達は結婚なんかしてない！」

「それでも母さん。母さんみたいな雰囲気だから」

舞月はその一言で押し通すと無理やり本題に入る。

それを察したオッレルスがシルビアを向いて言う。

「……いつまで顔を紅くしているかは知らんが。」

とにかく、俺がどうしてここに居るってことを知った？」

オッレルスが本気で解らないためたずねる。

一応オッレルスは書き置きの一つも置いていていないはずだ。

だが、何故オッレルスの居場所がわかったか？

魔力反応を辿って来ただけかもしれないし、

オッレルスを待っていた子供のうちの一人から盗み聞きしたのかも
しれない。

現に、オッレルスは一人の少女に行き場所を内緒で教えている。

だが、それに対しシルビアはありえない回答をする。

「勘」

「はあ！？」

いや普通に考えてありえねーだろ、と舞月は思う。

勘でここまで正確にわかったのなら、やっぱ二人ともお互いを知り
尽くしてるんじゃないのか？

と普通に思ってしまうのだが。

「それで、用件は？」

と、そんなことを気づいていないのかオッレルスが少し呆れ顔で言う。

確かに、来たからには用件があつてこないと困る。オッレルスはせっかくの時間を潰されているのだ。

「んー？家計が圧迫してきてるからどうにかしろこの野郎」満面の笑みを浮かべてシルビアが言う。

それをみてオッレルスが気まずそうに視線を逸らす。

やっぱり金はないか、とシルビアが溜息をつく。

だが、その瞬間、舞月が懷から札束を取り出す。

「はい、父さんの稼ぎの代わり。」

今回はこれで我慢してやって、ね？」

舞月の行動に近くを通りがかったシスターたちまで足を止め、オッレルス同様口をポカンと開けている。

シルビアは『あ、ああ……』とどぎまぎしながらもそれを受け取る。

「じゃあ、用件が済んだことだし。」

オッレルス、帰るぞ」

そのまま一瞬でオッレルスを縄で縛りこみ、引きずっていくシルビア。

……、舞月とオッレルスのせっかくの時間が潰れたのは、言うまでもない。

「また会おう、父さん、母さん。」

……、計画には付き合ってもらうからね……」

それはシルビアには届かず、オッレルスにまでしか届かない。

だが、最後の一言は呟きのような物だった。

「さて、と……。仕事しますか」

そういつて、舞月はまた頼まれた仕事をこなし始める。

そして、時間が立ち、仕事が全て無くなったころ、そこに舞月はいなかった。

……… 計画の第3段階まで、残り2日
三人の英雄は何を思い、何をするか？

謎に包まれている計画が、科学サイドと魔術サイドの戦争中に、
二つを交差させることを、まだ誰も気づかない――

第4章 第七話 『シルビアとオッレルス』（後書き）

舞月、女と間違えられちゃいましたね。

一応かれ、るる剣の宗次朗なみの優男みたいな感じなので

舞月さんは初対面の人だと女だとたまに間違われます。

これはある種の裏設定ですが、表にも出していきます。

……よし、次は日本だ。

舞月さんが日本に帰ってからあの人と出会います。

と、言うことなので乞うご期待。

小説の目次の前書きにも書いていますが、

お気に入り登録件数が40件越えになってました。

総合評価も100超えました。

これも全て皆様のおかげです。ありがとうございます。

どうかこれからもよろしくお願いします

行間2（前書き）

現在第4章の間ですが、これは上条達がまったく絡んでないので行間扱いとさせてもらいました。
ではどうぞ

行間 2

行間 2

窓も入り口も無く、入るには空間移動系の能力が無ければ入れない、核シェルターよりも装甲が厚い建物の中。

そこには、男にも女にも、大人にも子供にも、聖人にも囚人にも見える『人間』がいた。

「ふむ……舞月、なかなかやるな」

アレキスター・クロウリー、かつて魔術サイドの顔となった男であり、
オッレルスに拾われる前、『完全な肉体』を持って降りてきた舞月を、
頼み通り久々に使った魔術で肉体を生まれた状態に戻した張本人である。

そして、目の前には闇の中でも、黒く黒く黒い、その舞月がいた。

「まあなあ……、お前の計画と、俺の計画。

それを同時に進行させるのも、かなり大変だ」

舞月が少々不満そうな顔で言う。

だが、アレキスターは少し笑う。

彼は現在、弱アルカリ性の液体の入ったビーカーのような物の中に居る。

その周りには、様々な機材が置かれており、様々な数値が検出されている。

推定寿命は1700年、聖書に出る、神の世界で生まれたアダムで

もこんな長生きではない。

聖書でも900年程度が限界。それを超える人間。

人間とは進化しているのだろうか？とアレイスターは思うが、目の前にそれすらも一瞬で打ち砕ける男が居る。

自分も『エイワス』という天使と手を組んでいるが、

『エイワス』すら屈服させ、そして、彼がこの地に下りた当時、

アレイスターを殺しかけた男がそんなことを言うのだ、笑えないはずが無い。

「そういうな、『共犯者』。君と私は同類だ」

「そういうなよ、『人間』、俺はその気になればお前を消すぞ？」

二人ともククツツと笑い言う。

その姿は、同年代の男同士の会話にも見えたが、彼らはアレイスターの言う通り、

『共犯者』である。

——魔術サイドから逃げるのに一人で足りるはずが無い。

ではどうやって逃げたか？それは、目の前の男が居たからである。

彼は自分の要求を呑む代わりに、アレイスターを守った。

その力は『人間』を軽く凌駕し、圧倒的な力で敵を屈服させた。

当のアレイスターですら、間違いだつたと後から思うほどだ。

「君はそれをしないだろう？お互いの得になることをしてる間はな」
アレイスターの言葉に舞月が頭を縦に振る。

「——アレイスター」

「何だ？」

舞月が表情を真剣なものと言う。

「今回の計画、お前の計画を乱すかもしれん」

「もうすでに乱されたよ。出会わはずの無い二人が出会ってしまった。」

おそらく君のことだ、殺すはずの三人目とも出会わせる。
これで、三人のヒーローが出会うわけだ」

舞月の言葉に、少し呆れたような顔をするアレイスター。

ここまでアレイスターが表情を出す、というのも珍しいことだ。

何故なら、彼はいつも同じような顔——いわゆるポーカーフェイス——で

科学サイド、魔術サイドの重要人物と話をしている。

それが、ここまで表情を出す。

異常事態、とはこのことであろう。

だが、舞月は笑う。

「何、計画に支障はでんよ。……お前の計画には、な」

舞月が妖しく笑う。

アレイスターが、その顔を見て目を見開く。

「…ほう、やる気が、舞月」

「なに、すこしお前にも手伝ってもらうさ。」

計画には、お前みたいな膨大な魔力を持った『人間』が必要だから
な」

アレイスターは、その言葉に少し眉をひそめる。

何故、『人間』の魔力が必要なのか？

アレイスターには、かなりの魔道書を読んだ記憶がある。

そして、その中に『天使』に作用する物があることを思い出す。

「まさか……、君はあの、成功したこともない、魔術を……」

言葉が途切れ途切れになるアレイスター。
それほどまでに彼は驚いていた。

「ああ、『御使返し（エンジェルバック）』を使い、俺の中の『天使』の肉体と魂を返すためにな……」

そっくり、彼は音もなくその場から消え去った。

そのときの舞月の表情は、アレイスターも見たことのない、
『天使』ではなく、『悪魔』のようなものだった。

「悪魔、か……」

彼はそうやって、舞月の中に潜む一つの魔神を思い出す。
それは、魔界の神、といういみの魔神。

「上条当麻、君はどうやって彼を打ち砕く？」

行間2（後書き）

アレクスターさん今小説初登場（だっけ？）の回！
ローラがでてるのにクロウリーが出てないのは嫌だ、
という作者の一種の思いの下製作した行間です。

この小説、もしかしたら前書きとはまた変わってくるかも…

改変多いな。

でも、小説は思っていない方向に進んでいくもんだ。
そうだよな？

第4章最終話 『友の傷』（前書き）

今回で第4章終結です。

行間2は最初4章の一部でしたが、それを編集。
そこで、今回最終話ッス。

第4章最終話 『友の傷』

8 日本 A・M・8時

浜面仕上は朝っぱらから仕事だった。

絹旗が『映画超みたいだからこの前みたいに証明書作ってください』という

一言で、浜面は証明書をさっさと作り、映画館までついていく羽目になったのだが。

「なんでだ……、チクショウ」

絹旗が勝手にポンポン進んで行ってしまったため、自分はスキルアウト時代と同じように、

一人で裏路地に取り残されてしまっていた。

昔は半蔵などとよくバカみたいな話をしたものだが、今は完全な一人。

駒場利徳は一方通行に殺され、自分はスキルアウトを抜けている。

おそらく半蔵はまだいるだろう。彼の身体能力なら一人でも十分生きていける。

もしかしたら、スキルアウトをまた纏めているのかもしれない。

浜面がそんなことを考えながら適当に裏路地を歩いていると、後ろから声をかけられた。

「よう、兄ちゃん。ちょっと面貸せや」

あー……、と溜息をつく浜面。

おそらくそこらへんのスキルアウトだろう。一応彼の経験からして金目当てだろうか。

後ろを振り向くと、かなりゴツイ体の男が立っていた。

身長は189位だろうか？服装はラフな格好でジーンズの上になにか書かれてあるＴシャツ。

その長袖のＴシャツもところどころ破けているので、かなり奇抜な格好にも見える。

「オイ兄ちゃん、金出せよ。出さなかったら痛い目見るぜ？」

ズカズカこつちに歩み寄り、浜面を見下ろしながら言う男。

だが、浜面は間髪いれず腹部を思い切り蹴り飛ばす。

「ゴッ！いきなりなにを——」

「うるせえよ」

男が喋りだす前にすねを思いつきり蹴り飛ばす。

それでのた打ち回る所を見ると、いままで誰にも負けたことないですよ的な人ということが伺える。

浜面は溜息をつく。こんなのは麦野沈利に比べたら全然弱い。

それにしてもあの時麦野に勝てたのは奇跡じゃないのか？と自分でも思ってしまう浜面。

しかし、一応奇跡でもそれはれっきとした実力となっていくため、良いのだ。

『覚えてやがれ！』と捨て台詞をはいてから男が去っていく。

スキルアウト時代からまた一段と強くなった浜面は、大抵の能力者は敵じゃない。

それに今では『アイテム』という強力な後ろ盾がある。

なので、基本的にはなにも生活に支障はない。

『アイテム』が完全に潰れてしまったとはいえ、暗部との繋がりがかるうじで繋がっている状況。

さらに、『アイテム』のメンバーの二人と今でも知り合いなので実質問題ないので、

『アイテム』の後ろ盾があるような状況だ。

「おー！なんだか騒がしいと思ったら浜面じゃねえか！」

懐かしい声が聞こえてくる。

さっ、と後ろを振り向くと、そこには半蔵がいた。

「半蔵！久しぶりじゃねえか！」

浜面が半蔵と握手を交わす。

お互い満面の笑みを浮かべている。

それはそうだろう。お互い久しぶりに親友であり、戦友でもある友と再会したのだから。

「元気にしてたか？郭ちゃんとは上手く言ってるか？」

「元気だったさ、郭は……、まあ、追いついたり逃げたり連打だな。」

それに、今の俺にそれを聞くのは自殺行為と判断して——」

「よくねーよ」

半蔵が頭をかきながら、浜面がリアルに身の危険を感じつつ言う。

郭とは一度戦ってからもう諦めただろうと思っていたのだが、案外まだ付いてきているらしく、いまだに逃亡生活中だ。

「そついうお前は話は聞いている。超能力者の第四位を倒したんだって？」

半蔵の言葉に浜面が驚く。

なぜ、一般人がそのことを知っているのか解らないからだ。

「一応こっちのネットワークはまだ生きているんだ。
ちよいと探れば暗部まで一つ飛びだぜ」

半蔵が言う。浜面はそれでハッ、と思い出す。
駒場利徳の人望の強さと、何故か異様に高い半蔵の情報収集力により、

スキルアウトの駒場グループだけ、特別なネットワークを形成していた。

それは学園都市内のみならず、学園都市外部までつながっており、
基本的な裏社会の情報はポンポン耳にするレベルだった。

だが、それを実際に活用する機会は少なく、おおかたが警備員アンチスキルの配備は

どうかなどを調べるためだけに使われていた。

駒場の亡き後も残っているとは浜面は思っていなかったが。

「へ、へえ……、未だにあれ残ってたのかよ」

「ああ、お前が暗部の所属だったってことも知ってる」

その一言で浜面の表情が変わる。

半蔵は強い、しかし、圧倒的な物量に押し殺されるという可能性もある。

「ああ、俺なら大丈夫だ」

半蔵がそれを察してか言う。が、浜面は知っている。

学園都市の闇を知った者の末路を。

人づて以上にアバウトにしか聞いていないが、それは一つの結末にしか持っていられない。

死。

だが、半蔵は生きている、ということは一応追っては撃退しているのだろう。

それはそれですごい事である。

なぜなら、追っ手といえはおそらくパワードスーツ駆動鎧の者達だろう。

あの速さはおそらく半蔵でも対処できないほどの速度だろうが、それから逃げ切るのでも危ないのだ。

と、言うことなので素直に聞いてみる浜面。

「…追っ手とかは来たのか？」

「ああ勿論。ただ、なんか毎回黒いのが全部追ひ払ってくれるんだよ」

黒いの？と浜面は思う。

黒いのではなく白いのなら知っている。

何故なら、過去に一度黒い髪のツンツンした頭の中肉中背の少年に自分のスキルアウト最後の仕事になったであろう『依頼』を妨害されたとき、

浜面は一度見ていた。

彼の仲間のスキルアウトを撃つ銃を持った色素の抜けた白い髪の中性的な男を。

その瞳は紅い色をしており、その外見は今亡きスキルアウトの元リーダー、駒場利徳を殺害したという報告を受けた外見とそっくりだったのである。

それはよく白い男、という愛称で裏世界では言われており、過去に劣等感丸出しで憎んでいた（今もだが）学園都市最強の超能力者（レベル5）第一位、

一方通行だということは良く知っている。

だが、彼はあくまで白い。黒い男、という愛称で呼ばれているのは

……

「黒山か？」

「いや、あんなカスとは全然違う」

半蔵が口汚く吐き捨てる。

黒山というのは、名前どおりいつも上下黒い色の服を着ている男である。

裏世界では体術に優れていて、過去に全国大会で優勝した、という話まで聞く。

だが、それをカスという半蔵はそれを軽く上回っているため、浜面は聞き流す。

では誰か？という疑問を正直にぶつけたところ

「格好は上が白いシャツに黒いネクタイ、下は黒いズボンで

髪の色は真っ黒。目の色は少し青のかかった黒、って感じた。

この外見と一致する人間が居るかどうかが調べたら、一人だけ出た」

半蔵がそれを言い終えると、一呼吸おいて言う。

この裏路地に似合う、闇の雰囲気のようなものが半蔵から漂い出る。

「最近操車場で大規模な戦闘とかが合ったって話は知ってるだろう

？」

「ああ、あの第一級警報^{「コーエーレシメント」}が出る一歩手前で止まったって話だろ？

暗部の情報網からその話は聞いた」

――舞月の闘いは、アレイスターを通していたため、警備員^{アンチスキル}や風紀委員^{ヤッジメント}は出なかったが。

半蔵が暗部を知っていることから、暗部を話すことをためらうことなく言う浜面。

普通なら、彼らのように情報網があったとしても戦闘というのは知

らないだろう。

だが、彼らは奥の奥まで入っているような人間だ。

おそらく半蔵はその特殊なネットワークで、

浜面は『アイテム』の情報網のおかげでそのことを知った。

『アイテム』は統括理事会の犬、といわれるような組織だ。

統括理事会しか知らないようなことでも知っているだろう。

「その闘いの首謀者、そいつと合致した」

半蔵の言葉に浜面が驚く。

そんなヤバイ奴が何故半蔵を助けたのか？それが知りたくて、口を開こうとした浜面。

だが、そこに一人の少女が乱入してきた。

「…あの。そこのお二方。道を尋ねたいのですが」

格好は浜面も見たことのある高校の制服を着た少女。

なぜその制服を知っているかというと、あの事件の後に調べたからである。

そして、首には鎖があり、それが服の中まで続いている。

真っ黒な長髪で、あまり表情が表に出ていない顔をしている。

おそらく表社会の人間だろう。だが、ここでの話を聞かれた可能性がある。

「おい、今の話、聞いてないよな」

半蔵が明らかに敵意をあらわにした表情で言う。

「話？」

と、首をかしげたため、明らかに違うことが解った。
この闇の世界を知っている感覚は、ゼロ。

何故なら、敵意を向けられた時点で反応するのが、裏社会だ。だが、次の瞬間、少女の後ろに人影が見えた。

一瞬少女が本当の囧だと思った。が、その予想は外れる。

それは、見たことのある人影。

スキルアウト、それも最近力をつけてきたので、暗部に殲滅命令が下りかけていたところだ。

この情報は古い物だが、暗部の情報は最低でも4ヶ月は生きているのでおそらく当てになる。

そして、そのスキルアウトとは名ばかりで、能力者を大量に加えている。

なので、一介の無能力者では相手にならない、というのが実態である。

「——やべえ！嬢ちゃん逃げろ！」

半蔵が目の中の少女に言う。

少女は後ろを振り向くと、もう既に無言で発火能力バイロネキンスの能力者が能力により、

真っ赤に燃え盛る、炎の塊が少女目掛けて飛んでくる。

どうやら狙いは自分達だが、自分達の仲間と思われた、

ただの少女は、後ろを見て、体を硬直させる。

「おい、じよ——」

うちゃん、と半蔵が声をかけようとしてももう遅い。

炎の塊はその華奢な体を、灰へと変化させる——

筈だった。

目の前に居るのは、半蔵の話どおり、黒い、黒い、黒い男。
一見すると女と間違えそうになるその外見。

だが、不適に笑うその表情は裏社会にも無い。
本当に、別の世界に住んでいる人間の顔だった。

「ったくよお…、邪魔ばつかしやがつて……」

その男はポケットに入れていた手を引き抜いた。
すると、その手の中に紅い粒子のような物が集まり、紅に淡く光る、
軽く見積もっただけでも50口径ほどはある銃になっていく。

「———なんの役にもたたねえグズ共が!!」

その男は銃の引き金を引く。

そこからでたのは弾丸ではない。

鋭く、先の鋭利な刃物のような武器。

だが、それは弾丸の二倍ほどの速度で、少年達の肩に刺さっていく。
そして、3分もしないうちに敵が全員倒れた。

「……舞月先生。ここでなにを」

その助けられた少女が舞月と呼ぶ黒い男に対して言う。

それに対し舞月は、親が子を思うような笑みを浮かべ、少女を見る。

「生徒を守るのは、当然の義務さ。それに、姫神はいい奴だしな」

舞月の言葉に姫神は顔を少し紅くし、そっぽを向く。

彼のその表情に、あの少年が重なったからではない。

単純に、彼女が照れただけ。

そう、彼女———姫神秋沙は舞月と数回話をしている。

そのときは人の良い好青年。という印象しかなかったが、あるとき、彼女が数人の少年に囲まれた際、同じように助け出した。上条はその少し後に来たが。

おそらく舞月と上条が一緒に居ただけだろう。

しかし、助けてもらうのは、上条やあの神父以外初めてだった。

そして、『吸血殺し（ディーブラッド）』を話しても、ただ普通に扱うほどの器量を持った男。

その後、彼女の舞月に対する印象は変わり、たった一日なのに、彼女を数回助けた。

そのほとんどが、自分の困ったとき。

それは、誰かが困っていたら手を差し伸べる上条当麻の性格と重なる。

だが、彼は違った。

ケルト十字を落としたときも、直ぐに見つけてくれた。

普段落とさないのだが、間違えてとめ具をつけ忘れ、教室内で落ちただろうに。

なのに、彼は無かったら作り直せる。といいながら一生懸命に探した。

姫神は朝早く来るので他の生徒がいない分、妨害がなかったが。それでもその姿は自然と、人を引き付ける何かがあった。

「…舞月ってのか、黒いの」

浜面の声が、姫神の思考をさえぎる。

浜面の表情は、化け物に出会った顔をしていた。

そつ、それは人間ではなく、化け物に向ける瞳。

「オマエ、どうやって銃を出した？」

あの紅い粒子は何だ？」

そして、浜面を見た瞬間、舞月の顔が狂喜と変わった。
そして、その感覚は姫神にも伝わった。

「舞月。先生……？」

だが、姫神の呟きすら取り合わず、舞月は浜面に向かって進む。

「姫神、ちよつとこつから離れとけ。見たくない物見るぞ」

その表情は、戦争を起こす人間のものではあつた。

いつも見ない顔に怖気づく姫神。彼女の能力は人間には作用しないのだ。

なので、姫神は首を縦に振ると、その場から駆け出した。

「……テメエ、何する気だ」

「何？ちよつとした訓練だよ。『計画』のな」

舞月が銃を構えた瞬間、浜面はズボンのポケットに入れていた手榴弾を出し、

ピンを口で抜くとそれを舞月に向かって投げつけていた。

それが、爆発し、舞月の体に向かって降り注ぐ。

が、それはまったくの無意味だった。

少々煤がついている程度で、まったく効いていない。

「なつ………！？」

浜面が驚愕に顔をゆがめる。

だが、そんな暇はまったく無い。

舞月は直ぐに浜面の目の前に来ると、拳を突き出す。

それを顔を右に振って回避すると、右足で下段蹴りを放つ。

と、同時に半蔵が首で頸動脈打ちを狙ったチョップを放つ。
が、下段蹴りは右足で止められ、頸動脈打ち狙いは受け止められた。
そして、舞月は半蔵をそのまま浜面に投げつけた。

「うおお！？」

半蔵が勢いに抗わず、ぶつかると寸前で浜面の肩を両手で押さえ、
逆立ちから回転する要領で受身を取る。

そして、浜面の後ろから、舞月を拳銃で撃とうと、拳銃を出した瞬間
舞月が浜面の腹部に蹴りを入れ、半造語と吹き飛ばした。

「グウツ」と、声を少し漏らし、二人で折り重なるように2メートル
ほど吹き飛ばす。

そのためか、半蔵の銃があからさまに変な方向へ狙いが定められる。
そこには、姫神秋沙の姿。

三点バーストに設定してあった銃が、姫神に向けられる。

そして、倒された衝撃で、引き金を引いてしまう。

「嬢ちゃ——」

彼が姫神を呼ぶ前に、弾丸が算段のように飛んで域、彼女の右肩か
ら背骨にかけて、

三つの12ミリの穴が開いた。

「——！」

姫神は音も無く崩れ落ちる。

そして、血の池のように大量に出血していく姫神。

それをみて、浜面が舞月に「オマエは彼女の応急処置を！俺は救急
車を呼ぶ！」

そう言っ、携帯電話を取り出し、学園都市の良く知ってる病院の

医者に連絡を入れる。

『解った、すぐにそっちに救護をまわす』という、冷静な声が聞こえ、電話が切れる。

舞月を見ると、銃が、包帯のような物に変わっていくのが見える。

舞月はすぐに姫神に駆け寄り、上着を脱がす。

彼女の下着があらわになり、同時に出血している穴も見える。

舞月の服が、姫神の血で濡れる。が、そんなことは関係なく舞月は魔法陣を空气中に指で書く。

その上で、何かボソボソと舞月が言うと、回りに魔法陣のようなものが展開された。

「主よ、彼のものを癒したまえ！」

そう言うと、その魔法陣が姫神に近づいていき、上下を魔法陣が包む。

すると、出血がじわじわ収まっていく。

そして、包帯をさつさと巻き終える。

だが、半蔵はそれを見て、少々の恐れと、疑問を抱いた表情をする。

「んだよ…何者なんだ……」

半蔵の呟きに、舞月が半蔵を見た。

その瞳は、灼熱の炎が燃えるような紅で、怒りをあらわにした表情だが、それに反し言葉は優しかった。

「事情は俺が説明する。オマエと浜面はさつさと行け！」

その言葉に浜面たちがためらうが、舞月が『早く行け！』と怒鳴り、二人はそれを頷くと、その場を立ち去った。

第4章最終話 『友の傷』（後書き）

姫神 イイイイイイイイ！！！！！

チクショウ、フラグだけで終わらせようと思ったのに！

第8、9巻の影響が出てしまった！

第5章で、たぶんオツレルスvs・削板

では、また今度。

姫神「感想があまりない。どうか書いて欲しい」

行間3（前書き）

今回の主体は姫神です。
ほんとにモブですが、これが最終決戦にかなり影響したり？

行間 3

行間 3

私は、舞月先生に言われたとおりに逃げていた。

ただそれだけ。何も悪くない。

少々薄れる意識の中、姫神秋沙は思う。

後ろから肩にかけて焼けるような痛みが発せられ、血があふれ、倒れる自分。

何が起きたかまったく解らなかった。

ただ、その後に、舞月先生と、少年が話しているのが聞こえ、視界に舞月先生が入る。

上着を脱がし、包帯を巻くまでの作業は手馴れた物のように感じられた。

ただ、何故、舞月が自分を助けるのか、一番それが知りたかった。

「なぜ？」

そう聞きたくて、口を開く。

前に上条当麻に助けられたときは違って、口は動くようだ。

その言葉に、焦りと安堵を交えた表情で言った。

「あの教室に入ってから、初めての『友達』と思えた人だ。

『友達』を助けて何が悪い」

彼のその言葉は、自分に安堵のような感情をもたらした。

自分はその上を目指したい。『親友』を。しかし、今はそれでいい。

姫神はそう思った。

救急隊員に、姫神を渡すと、携帯を取り出し舞月は上条に連絡を入れる。

細かい部分は省いて、姫神が怪我をしたことと、病院に行けということを手短かに伝える。

どうやら今は部屋に居るらしく、インデックスの声が聞こえてくるが、

上条にそのことを話すと、声色が変わり、すぐ行く、といって、電話を切られた。

舞月は携帯を握る力を強くし、そのまま握りつぶす。

「チクシヨウ…何故守れなかった」

舞月の言葉に、何かが反応する。

それは、脳内に鮮明に響いてきた。

『オマエが人間じゃないからだ。早く人間に戻りやがれクソが』

口汚く吐き捨てられたが、舞月はそれに賛同する。

計画を早める。そのために情報を一部漏洩させ、

あの三人を、一度に終結させる。

——オッレルスと再戦を果たした削板と、つながりを持つ三人が一同に終結するのは、近い

行間3（後書き）

今回は短めです。
なので、一応次回が長いです。
それでは

第5章 『計画、始動』 1（前書き）

今回は、オッレルスvs削板フラグ。

デハデハ本編

第5章 『計画、始動』 1

1 A・M・10:30

「姫神！」

上条当麻病室に居る姫神秋沙に向かって言う。

「上条。君……」

姫神がベッドに横たわったまま、駆け寄ってくる上条に手を差し出す。

そこには、一枚の手紙が挟まっていた。

少々血が滲んでいるが、文字は読める程度だろう。

「これは？」

「先生が。渡せって……」

先生？と首を傾げるが、すぐに舞月だということがわかる。

何故なら、姫神が先生といっているのは知っている範囲内だと舞月だけだった（筈）。

それを読むと、妙に丁寧な文字で呼び出しの文字が。

今夜7時、第1学区に來い、と書かれている。

第1学区というのは、本当に何もなかったところである。

なので、何が起きたとしても最高で第二級警報ぐらいしか出ないとか。

何が起きるのか、そのときの上条には想像もつかなかった。

「オッレルス」

「なんだゝ息子よ」

二人がだるそうに言う。

舞月はぐでーとしており、オッレルスも似たような体勢。

「——つてえわけで、削板と戦ってきて」

「E e e e ?」

オッレルスが不快にも英語で答える。

舞月はそれを気にしたようにもせず、即行で日本に二人で飛んだとか。

あとでシルビアのお仕置きが待っていることを、二人は知らない。

「フッ！」

ビュン！と拳が空を切る音がする。

その主は削板軍覇。彼は以前舞月に敗北して以来、このように修行をしている。

型から覚えるため、極真空手から初めて、幻の武術まで全てやっているところらしいのだが、

「ハッ！」

右の拳が飛んだ瞬間、10メートル先にあったのが吹き飛んだ。

彼は『説明のできない力』は使っていない。ただの拳圧だ。

その威力はパンチマシンで測ると、100位軽く行ったが、本人は気にしていない。

「フウ、今日はこの程度にしておくか」

そう言つて、削板は自分の部屋をでる。

洗面所で髪をぬらし、さつさと荒くタオルで水分を拭う。

そして、削板はいつもの格好に着替え、部屋を出た。

数分後、削板が来ていたのは、あの激戦の場だった。

魔神になり損ねた男、魔神の男、二人と戦った場所。

そこで、自分は自分を鍛えたが、まだ遠かった。

それでも、削板は追い求める。

魔神を超越する力を。

「おー、いたいた。削板クン、だっけ？」

後ろから声をかけられ、後ろを見る。

そこには、いつかみた、魔神になり損ねた男が居た。

「ああ、そうだ」

「俺はオッレルス、覚えといてくれ」

削板の短い言葉に、すぐに自己紹介するオッレルス。

だが、削板はまず疑問を吐き出す。

「何でここに居る？」

そう、ここに居る理由が彼にはわからなかった。

過去の彼は、『原石』に対する扱いの学園都市側への牽制、だったはずである。

オッレルスは苦笑すると、

「んー？息子がね、計画に付き合えって」

オッレルスの言葉に削板の眉がピクリと動く。

計画？と疑問を抱く。

計画とは何なのか、そんなことは知らうとも知らなくともどっちでもいい。

そう削板は切り捨てた。

「いいぜ、やろうじゃねえか、オッレルス」

「話が早くて助かる」

ケラケラと笑うオッレルス。

その瞬間、二つの『説明のできない力』がぶつかった。

第5章 『計画、始動』 1（後書き）

削板vsオッレルスの戦闘シーンは全面カットです。

あれだけかはまちーも全然書いていませんし、

俺も攻撃の順序がわからないから書き用がありません。

でも、vs舞月だったら話が変わるのは何故でしょうね。

チートだからかな？そうだね、アルトだね

第5章 第2話『電撃の槍』（前書き）

題名で解るとおり、今回はあのヒトの登場です

第5章 第2話『電撃の槍』

2

二つの『説明のできない力』がぶつかっているころ、上条当麻は何故か一方通行とであつた。

どうやら散歩中らしいのだが、明らかにカリスマ撒き散らしたいだけだろ。

と突っ込みたくなる格好で歩いている。

首下は白い羽のようなのが飛び出した白いジャケットに、グレーのゼブラ模様の服。

それにGパンという感じで、かなり似合っていた。

これで杖を突いていたら真面目に吹く。

と、思っていた上条だが、口には出さない。

「ンだよ…その目は」

「いや、だって、その格好なのに……」

「?ってミサカはミサカは小首を傾げてみたり」

「誰この子、とうまの知り合い?」

一方通行は、その足にしがみつくようにして歩いている打ち止めが、彼の雰囲気をぶち壊しにしていた。

どうやら一方通行が過去に打ち止めの言っていた『あの人』で、以前に話をした相手も一方通行ということはわかったのだが、

まさかそんな形で行動しているとは思ひもなかった。

「『その格好』?なんがおかしいかア?」

一方通行が疑問に頭をかしげる。

こいつ、前よりすつごく丸くなってるな、と上条は思う。

だが、ここで一方通行の機嫌を損ねると、ここら辺一体に第一級警報がなりかねない。

なので、

「い、いやー、今日も一方通行さんはカッコいいですねー」

「……なんで敬語？つてか、オマエはいつも意味がわからねえ」
本気で疑惑の目で見てくる一方通行。

やめてくれ！そんな哀れむような目で見ないでくれ！

しかもインデックスを交互に見ながら後ずさりしないで！

上条はそう思ったが、すぐにん？と思う。

インデックス？

ガツチンガツチンと、歯と歯があたる音が聞こえてくる。

もう恐ろしくて、後ろも振り向けないように、汗をだらだら流しながら、

「……インデックスサン、タノミマスカラヒトマエデハ——」

片言で訴えかけたが、彼が言い終わる前に、本日記念すべき第一回目
目の噛みつきを食らった。

「ンで、何でお前はこんなところに居るンだ？」

一方通行がファミレスの一角で、上条に言う。

前には後頭部を抑えている上条と、『スッキリしたー』と言いたげな
純白シスター。

左側には『何で噛み付かれたのー？つてミサカはミサカは聞いてみ
たり』

といって上条に疑問をぶつけている打ち止め。

いつからこんなに腑抜けになったんだ、と一方通行は思う。

自分は悪党だ。正義のヒーローになんかなれない。

その証拠に、自分はいま、最後の暗部『グループ』に所属している。

上条が、後頭部を抑えるのを止め、疑問に答える。

「こちらはどこかに食事だよ、一方通行は？」

「俺はこのガキに連れまわされてンだけだよ。まったく面倒くせエ」

その言葉に上条が本気で丸くなったな、と思う。

過去の彼なら、触れることすら許されないのに、それをとっぱらっ
ただけで

こんなに変わるとは。

実は、病室を出た後携帯で能力を失った理由などを聞いている上条なので、打ち止めや『ミサカネットワーク』がなければ喋ることもままならない、

ということとは良く知っている。

のだが、まさか打ち止めの我が俤に付き合っているとは信じがたかった。

「へ、へえ…あの一方レ——」

そこまで言ったところで、窓側に一人の人影が見えた。

肩まである茶色い髪に、上条よりも七センチは背が低い背丈の少女。ベージュ色のブレザーに紺系チェックのプリーツスカートを穿いている。

その少女には見覚えがあった。

それは、目の前の打ち止めのDNAマップ提供者。

「ン？……！！」

一方通行も上条と同じ方向を見ると、そこには学園都市に7人のみの、

超能力者（レベル5）の第3位、御坂美琴が居た。

ガバァ！と、一方通行は打ち止めを、上条はインデックスの手を掴むと、

その場を逃げ出そうとしたが、もう遅かった。

御坂が、ん？となんとなくに窓から店内を覗き込んだ。

その瞬間、上条と一方通行は、電撃の槍を喰らいかけた。

第5章 第2話『電撃の槍』（後書き）

一方通行も丸くなったね、うん。

20巻の後ろのほうでは再戦果たして

完全な悪から白を取り戻した感じかな？

たぶん20巻以降か20巻以前かわからないこのお話も、

おそらく第9章終了後、第10章は後日談になりそうです。

つまり・・・実質的には第9章で終わるかな？

いや、やはり10章まで長引かせよう。

その後は、また新しいの作ろう。

新しいとあるを作った場合は、活動報告で報告します

第5章 第3、4話合併話『一方通行と打ち止め』（前書き）

この二つは短いので一つに纏めました。

第5章 第3、4話合併話『一方通行と打ち止め』

3

「いくらなんでも、窓ガラスごと10億ボルトの雷の槍はねえだろ」
「そうそう！弁償代が高いですよ！」

先ほどからこの調子である。

それを打ち止めは哀れな瞳で見て、インデックスは『おながが空いたんだよ』

といって崩れ落ちている。

その先には、御坂美琴の姿があつた。

予想以上に息ぴったりな二人を前に、『なんでアンタがそいつといんのよ！』と聞くまでもなく、

同時に説教をされ、何も言い返すことが出来ず、はい、はい！と、返事を返してしまう。

やつのことで、二人の説教から介抱された御坂はそのまま当初の疑問をぶつける。

「なんで、アンタがそいつといろの？」

それが一番の疑問だった。

一方通行は過去に、10000人弱もの妹達シスターズを殺した張本人だ。

そして、上条はその一方通行を打ち破った張本人だ。

それが、何故、仲良くファミレス？

誰だっと思うだろう。あの殺人鬼のような一方通行が、敵と手を結ぶようなことが

ありえる筈が無い、と。

しかし、一方通行はもう既に過去とは違う。

妹達の上位固体を守り、町人を守り、数人の人間に救いを与えている。

それは、過去の清算にも見えた。

だが、一方通行は、何故か普通に「知り合いで、ある種の同類だからだ」

その言葉に、御坂は驚く。

あの、一方通行が、誰かとつながりを持っていることは本来ありえないことである。

しかし、実は上条はあの後数回知らないところで一方通行と共同戦線を張っていて、

以前御坂の知らないところで再戦まで果たしている。

さらに言っと、そのときの結果はお互い死に掛けた、と言うのは御坂も知らない

「……………」

御坂はかなり長い沈黙を漂わせる。

だが、それを打ち破ったのはピロリピロリ、という携帯の音だ。

「ハイハイもしもし誰ですかアー？」

だるそうに携帯を取って、一方通行が返事を返す。

だが、すぐにその表情が真面目な物となる。

「ああ、すぐ行く」

そう言っと、携帯の通話をきる。

「どうした？」

上条が聞くと、一方通行は「仕事が入った。今から行ってくる」
そう言って、どこからか来た車に乗り、彼は何処かへ行った。

残されたのは、打ち止めとインデックスと御坂美琴。
遠くから見ていた青髪ピアスは、裏切り者を見る目でじっと凝視していたという。

4

中学生一人、シスター一人、幼女一人を連れ歩きながら、上条は地下街を歩いていった。

女子に囲まれるのは、健全な男子の夢のような物なので、喜怒哀楽の喜が上条の中で輝いている。

だが、一番困るのはシスター、インデックスと、御坂美琴の二人がにらみ合いをしている。

「…ねえ、あの二人何してるんだ？」

「さあ？　つてミサカはミサカは疑問形で返してみたり。」

でも、私はそろそろ帰らなきゃ、つてミサカはミサカはしょんぼりしてみる」

打ち止めの言葉に、少し残念がる上条。

打ち止めは基本的に黄泉川先生の家泊まっているらしい。

現在舞月の残留思念体の出番は学校ではない。

ただ単に、消えるまで待っているだけである。

と、言うことは打ち止めも全然知らないということである。

舞月の残留思念体は黄泉川の手で専用部屋にでも隔離されているだろう。

「残念だな、黄泉川先生に連絡入れるか？」

上条が打ち止めに確認を入れると、首を横に振って

「いや、セキュリティキー位なら良く知ってるから大丈夫。」

お姉さまにインデックスさん、それにあなたも。今日はありがとう
ってミサカはミサカは笑みを浮かべて言ってみる！」

そう言っ、美琴たちと離れた打ち止め。

———このとき、もしも黄泉川に連絡を入れていたら、事件は発生
しなかったはずだろう

第5章 第3、4話合併話『一方通行と打ち止め』（後書き）

今回はかなり短いです。

日常物は何故か短くなってしまうな……

でも、次回から事件発生？

第5章 『舞月』（前書き）

今回は、舞月だけの行間風です

第5章 『舞月』

5

(うん、計画は上々か……)

舞月がどこか、それは世界の中なのか、それとも世界の外なのか、それすらも解らない空間に舞月は立っていた。

そして、舞月の周りにはモニタのような数個の画面が映し出されてあった。

まず、一つ目。そこには明らかに人間同士の戦いと思えない

『説明のできない状況』が出来ていた。

なにか青白いものを纏う削板が、拳を振るうだけで地盤に輝が入る。が、オッレルスは一(、)歩(、)も(、)動(、)い(、)て(、)い(、)な(、)い(、)。

それなのに、数メートルはなれたところでコンテナや割れた地盤の破片が削板に飛んでいく。

それが、何も無いところで粉碎されていく。

『説明のできない現象』というのは、まさにこの事を指すのだろう。だが、それを見ても、舞月は特に驚く様子はなく、

二つ目と、三つ目、四つ目を見ていた。

二つ目は、上条と、それを取り巻く二人の少女。

常盤台中学の制服の少女と、歩く教会を身に纏った少女。

歩く教会は壊れているものの、本人の魔力はそのままで。

そして、四つ目のモニタには、歪に捻じれ曲がった刀。

人々は、それを『カーテナ』と言う。

本人は、『カーテナ』としてではなく、魔術剣術兼用の武器としか見ていないが。

そして、その四つ目のモニタの周りには様々な数値や文字が出ている。

「Ve o e r a j i o g n a : 2 3 9 3 8 4 3 2 9 1 2 0」

「I e p r o q e k m v k j d s a : p i e q j i v s k j ¥ a w
- 3 q : d : a」

「P o e r a j f o r q e j m d n k j a l : 2 9 1 0 9 3 8 4 2
0 3 4 2」

などなど、全て暗号化されているので、自分達に意味は解らない。
が、舞月にはそれが普通に解っているようだった。

そして、赤い色の画面が移る。

そこには、三人の少女の顔が。

インデックス、打ち止め、滝壺理后

そして、打ち止めの画面の下に移された文字。

『確保済み』。他の二人は『未確保』。

それを見て、何か手を打とうと舞月が試行錯誤する。

インデックスは面識があるため、魔術ではなくクロロホルムでも使
えば良い。

しかし、問題は滝壺だ。彼女は浜面がほぼ四六時中一緒に居ると考
えても良い。

さらに、絹旗最愛の存在もある。

彼女の能力はかなり厄介な物だと、舞月は結論づけているため
能力を使用しようと考え――

それを邪魔するかのように新たなモニタが開かれる。

そこに移っているのは、神の右席『右方のフィアンマ』

「おい、『カオス』！今日こそ『神の如き者』の制御術式を――」

そのモニタに移った男の口がそこで塞がった。

起きた行動は何もない。舞月がモニタに手を翳しただけ。

その瞬間、フィアンマが崩れ落ちた。

「ほう、いくら神の右席でも、俺の力には敵わんか

…やはり、人間にも適用するようだな」

舞月の力。それは能力開発によってもたらされた物でもなんでもな
い。

ルシフェル、舞月の体の中に封印されている天使の一つ。

その力で『カーテナ・オリジナル』ではなく、

本当に天界から『神の如き者』ごと、カーテナを持って来た張本人。ルシフェルが神にチャンスを与えられた結果、魂の善と悪に分裂した同一人物、それがルシフェルとミカエル。

そして、いまでは、一つの人間の器に収まっている。

それは、『神の子』でも出来なかった事。

だが、それが正真正銘神によって作られた『ヒト』としての器だったとしたら？

『ヒト』は、何を望み、何を考えるか、それは、誰にも解らない。

第5章 『舞月』（後書き）

舞月の能力は意外と広範囲でした。

今日も昨日も一万アクセスきてビックリです！

これも宣伝のお陰でしょうか？

それと、何か他のことが…？

この前から焼魚刀さんとクロスオーバー小説始めました！

題名は「Magician・Scientist・Alchemist」

意味は魔術師・科学者・錬金術師だそうです。

二人で小説書くのって意外と難しいです。

良ければ見てください。現在序章の1です

第5章 6話『ミサカと舞月』（前書き）

今回はかなり短めですのでご注意を

第5章 6話『ミサカと舞月』

6

「ここは……どこ？ってミサカはミサカは首を傾げてみたり」
今、少女が居るのは高級ホテルの一室のようなところである。

彼女の記憶では、上条当麻たちと別れて、
なんとなく裏路地に入ったところ、目の前に変な捻じれた扉があ
って、

それを開いて中に入ったらここにでて、鍵が閉まっっていて出れない
ということである。

どうやら典型的な罠にかかったのはわかる。
が、少女はその理由がわかっていないようだ。

——ただの好奇心だとは、まったく気づかないところが純粋な証
拠なのだ

自分をミサカといった少女はキョロキョロと辺りを見回し、
大型テレビをつけると、そこには一人の少年の顔が映った。

「あなたは誰？ってミサカはミサカは典型的な疑問を口にしてみた
り」

「ああ…、起きたんだ一方通行のお姫様。

俺は、一方通行と同じ『翼を持つ者』だよ」

そういう少年は、整っている顔立ちだが、何故かジンジンと伝わ
てくる何かがあった。

それは、一方通行を上回る『黒さ』

ただでさえ黒いのに、黒い物を纏っていて、完全な『悪』ではなく
『闇』

真っ黒だ。おそらく普段の彼はそれを抑えているのだろう。

それを、完璧に解き放った状態。

それは、見る者には恐怖を与えさせるような瞳だった。

が、少女は怯えることなく言った。

「寂しいの？ってミサカはミサカは聞いてみる」

その一言に、画像に写る人間は目を丸くしたと思うと、馬鹿笑いし始めた。それも目に涙がたまる位。

「ちょ、笑わないで！ってミサカはミサカは言ってみる！」

「い、いやぁ悪い悪い！そんなことを知り合いにも言われたことがなかったからな」

そういいながらも笑う少年。

だが、その瞳は謝罪のものへと切り替わった。

「悪いな、これからお前を利用しなくちゃならない」

「？どうしたの？ってミサカはミサカは尋ねてみたり」

どうやら少女はまったく警戒もしていないようだ。

そのため、少年は少し笑みを浮かべる。

「いや、お前がいいなら『協力』してくれないか？」

そして、少女は首を縦に振った

第5章 6話『ミサカと舞月』（後書き）

打ち止めが計画に協力しましたー
W
W
W
W
W
W
W
W
W

第5章 第7話『事件の予感』（前書き）

今回は長めだと思います

第5章 第7話『事件の予感』

7

さきほどからガミガミ言い争っている二人の少女の片割れが白井黒子に連行されたため、

自分は今現在、インデックスと適当にぶらぶらしている。

本当はこんなことが出来る状況じゃないか、と舌打ちする上条。

この前、インデックスはただでさえ消耗している状況で自動書記を発動させた。

そのため、体に負荷がかかっているのは当たり前である。

しかし、この有様は何だ。

「一回家に帰った途端に冷蔵庫の中身を食い散らかしやがって……」

そう、ほとんど食われてしまったのだ。

なので、上条は現在、インデックスの食料＋自分の食料を確保できる場所を探している。

（一方通行、復活してよかったなあ……、しかも味方になってくれたし）

上条は心の中で安堵の息をつく。

何故なら、あの一方通行が味方についたのだ。あの舞月でも苦戦する相手が。

「ねえ、とうま」

「なんだ？」

聞いてくるインデックス、さり気にケチャップの匂いにする。

勿論家にあつた食料にかけて食べたのだ。

そのため調味料すらなくなっているのだ。
学園都市には月に一度奨学金が支給される。

その額は一ヶ月は一応生きていける値段だが、ほとんど入院費と食費に当てられている。

と、いうことなので現在の残金は、真面目にがんばらないとやばいレベルだ。

こんどアルバイトでもはじめようかな、と考える上条だと、インデックスのことなど完璧に忘れて考えているが、一向にインデックスが話しかけてこない。

「どうしたんだ？」と、上条が逆に声をかけると、
「魔術反応有り、属性は不明、色彩も…不明！？」
これはおそらく天使の術式——！」

そう言つて、インデックスはそこらへんの裏路地に入っていく。

「お、おい！」上条はそれを追いかけていく。

三つぐらい角を曲がったところで、謎の石像がインデックスの道をふさいでいた。

縦2メートル、横は路地の9割をふさいでいて、なんかアステカの石像みたいだ。

「…これは……？」

インデックスがそれを触ろうとしたところで、「触るな！！」と、声が響いた。

その先には土御門元春、最高位の陰陽博士がそこに居た。

「土御門、どうい——」

上条が口を開きかけたところで

「青ノ式、龍二ヨリ（龍の牙で）敵ヲ嚙ミ碎ケ（碎かれる！）！」

青い折り紙を石像に向かって投げると、インデックスがそれを見て上条に駆け寄る。

そして、インデックスが3メートルほど離れたところで、石像が爆発した。

「きゃ！？」インデックスが爆風で転ぶ。

そして破片は一直線に上条に向かってきた。

「なっ！？危ねえ！」

そう言つて、上条はそれを間一髪で回避するが、数本紙が切り落とされ、

頬が切れ、血が出る。

「土御門！大丈夫か！？」

一番に上条が心配したのは土御門だ。

彼は魔術を使えない体だ。なので、魔術を使うと血管などが破裂したりする。

だが、案の定身体的な心配は見られなかった。

「…？おかしい、リバウンドがこない……？」

どうやら土御門本人もそれが意外らしく、自分で出血箇所がないか確かめるぐらいだ。

「土御門さん！」

そういつて、後ろから飛び出してきたのは、優男。

アステカの魔術師だと自分で言い、トラウイスカルパンテクウトリの槍を使って、

物を全てのパーツに分解する魔術を使ったエツアリである。

「エツアリ！？何でここに」

上条が驚きを隠せずに言う。

彼は暗部のことを知らないのだ。

だが、エツアリ（以下海原）は「仕事です、土御門さんと同種の」上条はそれなら話がわかった。土御門が裏側だということは本人から聞いていたからだ。

「へえ…つていうか、なんで土御門は反動がないんだ？」

「そんなこと俺が一番知りたいくらいだ」

そう土御門が言った瞬間、声がした。「教えてやろうか？」

その声は前方向から響いてくる。

そこには、闇を司る者と言うイメージを一瞬で抱かせる、

「舞月…？」

舞月作玖が居た。

だが、彼は以前のような優しい顔ではなく、歪んでしまった一方通行よりも邪悪な顔をしていた。

唇の両端がつりあがっており、目も少し血走っている。

そして、彼の全身を、黒いものが包んでいた。

「舞月……、何を企んでいる」

土御門が言つと、舞月は言う。

「オマエが傷つかないのは俺の力で超自然マルフィウムとのリンクを断ったから。もうそろそろ元に戻るが、今のお前は能力を——、戻ったな、今」

そういった瞬間、土御門がスイッチが入ったような感覚をする。どうやら、本人は能力が戻った感覚と認識しているが、皆の意識は全て舞月に向けられている。

「俺の力は万物を操る力。無論、オマエの幻想殺しも無効化できる。

その言葉に、全員が息を呑んだ。

幻想殺しは異能だけを打ち消すのだ。

なので、本来万物なのかどうかも解らなかった幻想殺しは、いま万物と認定されたのだが——

「といっても、超自然マルフィウムのリンクを完全に断つことができず、最高で3時間だが」

だが、その言葉は上条にとって脅威となる言葉だった。

三時間も魔神から生きる術を能力者でもない上条が持っているはずがない。

だが、目の前の魔術師は続ける。

「つつことで……同じ魔術師から消すとするか」

そう言うと、手を海原に向ける。

だが、それだけで海原は危険を察知したように右に跳ぶ。

その後ろの壁がベコオ！とクレーターが出来たように陥没した。

「……、危ないことをしますね！」

金星の光を当てて、それを反射させるだけで、殺人兵器となる武器を舞月に向けた海原。

だが、それは一瞬で消えた舞月には対応できなかった。

「どこへ!？」

すこし屈み気味だった海原が立ち上がりながら辺りを見回そうとしたが、

「海原!そのまま左だ!」

そう土御門が言うと、今まさに拳を振り下ろそうとしている舞月の腹部目掛けて蹴りを放った。

海原が飛ぶ一瞬前に拳を振るっていたが、防御優先だとしたのか舞月は右側の攻撃を

自分の左手で防御する。

直撃とまでは行かなかったが、舞月の骨がミシミシと音を鳴らす。舞月の拳は拳圧だけで地面にまたクレーターを作る。

そして、土御門の手を跳ね除け、距離を取る。

だが、蚊帳の外の上条はそこで疑問を持った。

(…海原を狙うとしたら、俺は何故狙わない?それに土御門も……)

彼は、一番の脅威である上条を狙わなかった。

それは、彼の様子を見て解るとおり、何か計画の中で行われているとしたら

一番の障害である自分を狙う筈である。

彼はまた悟った。

また、上条を中心に、流れが生まれつつある。

それを知って、上条は齒軋りした。
自分の無力さに。

土御門は違うことを考えていた。

（何故防御した？）

彼の能力なら自分の足を消し去る効果があつたはずである。
適用できるなら、何故使わない？

おそらく、彼は人体は消せない。

神の作つた偶像だから。

それを知り、土御門はそのまま攻勢にでた。

第5章 第7話『事件の予感』（後書き）

今回は3対1の闘いです。

次回、決着が付きますが、

さて、なんか最近一更新で9000アクセス来るようになりました。
真面目うれしいです。

これからもよろしくです！

p.s.

感想皆気軽に書いてください

第5章 第8話 「舞月vs上条&海原&土御門」(前書き)

今回は前回の続きの戦闘パートです。

第5章 第8話 「舞月vs上条&海原&土御門」

8

少し離れたところで、舞月はその光景を見ていた。

（うん…まだそのときじゃないな。

インデックスを誘拐なんか、自分でも計画したくないねえ……）
彼は、そう心の中で吐き捨て、そのまま少しずつ近づいていった。

「おおあああああ！！！」

舞月に向かって上条は走り出していた。

舞月はそれを見て、拳を握りなおし、それを迎え撃とうとする。

だが、その瞬間トラウイスカルパンテクウトリの槍の光が舞月を襲う。

明らかに味方を巻き込んだ攻撃。

どうやら味方を殺してでも自分を倒したいらしい。

そう思った舞月はさらに笑みを広げる。

舞月はそれを前に飛び出し、地面に両手を付き、

ブレイクダンスの要領で蹴りを出す。

それが土御門の顎を捉えそうになるが、それを土御門は顔を右に振って回避する。

上条にもそれが飛び、上条の腹部を捉えたが、両手で防御されたため舞月の蹴りは直撃していない。

そして、また槍の光が襲うが、舞月はそれをまたバック転の要領で回避する。

だが、そこに土御門の拳が飛来する。

それが舞月の顔を捉え、左側に吹き飛ばす。

そして、そのまま舞月が立ち上がろうとしたところで――

「お前はもう、倒れとけよ!!」

上条の右拳が、舞月の腹部を捉えた。

だが、その瞬間

舞月の体が紅い粒子になった。

「……は？」

土御門が間抜けな声を出して舞月の残骸を見る。

だが、それを打ち破るようにトツ…という足音が響く。

上条達はその方向を見ると、そこにはインデックスを抱えた舞月がいた。

「よう、上条。やっと終わったみたいだな…

まあ、この俺もただの思念体だ。どうする？ 幻想殺しで触れてみるか？」

そう挑発するように言う舞月。インデックスは既に眠らされている。この舞月は幻想殺しで触れたら消える。

だが、それが本当に通るのか？

「黒ノ式！ 水ノ性質操り、（体内の水分によって、）奴ノ体ヲ爆破セヨ（吹き飛びやがれこの野郎！）！」

上条が反応する前に土御門が陰陽術を発動させる。

だが、舞月は微笑み、言う。

「闇ノ式！ 水ヲ操ル術式ヲ解除（術式を無効化させろ！）！」

同じように陰陽術の術式を発動させた舞月は、魔術を免れた。だが、舞月と土御門では決定的に違うところが一ヶ所あった。「ガハアツ!!」

土御門の全身から血が溢れ出し、土御門が前のめりに倒れた。「土御門!」

上条が土御門を見て、舞月を睨みつける。だが、舞月は笑うだけ。

エツアリは恐怖を一瞬覚えた。

人を瀕死に追い込んでおいて隙がないことに。

あの木原数多でさえ、一方通行を追い込んだときには隙が見えた。それも、一撃で殺せるような隙が。

なのに、舞月にはそれが無かった。

「まあ、魔術の多様の所為だな。二日は動けないだろうな？」

——もう一体はこのころもう一方通行と接触しているか? そういった、舞月の思念体から巨大な魔法陣が放たれる。

「太陽あるところ影があり、影があるところすなわち無限也。」
『影
転移』」

すると、舞月の影がブワツ!とインデックスごと舞月を包む。

「インデックス!」

上条が右手を突き出し、舞月に向かって走り出す。だが、

「いま俺とインデックスは影と同化している。

まあ一体化だな。この状況で分解したら…

インデックスもおじゃん♪」

楽しげに言う舞月だが、その表情は陰に隠れて見えない。

「またな、上条！」

そう悪役のように言い残し、舞月の思念体とインデックスは消えた。

「い、ん、でつくす…インデックス！」

くそおおおおおおおおおおお！！」

上条は地面を殴りつける。

残ったのは、土御門と海原と、守りきれなかった上条だけだった

第5章 第8話 「舞月vs上条&海原&土御門」 (後書き)

インデックスが攫われた！

舞月の真意とは何か！？

次回、それが一応説明されます

第5章 第9話 「舞月とインデックス」(前書き)

前回の予告通り三日ぶり投稿

第5章 第9話 「舞月とインデックス」

9

「ん……？」

打ち止めと同じような部屋でインデックスは目を覚ました。

「あ、やっと起きたね！ってミサカはミサカは言ってみたり」

というか、同室なのだが。

ところで、インデックスと打ち止めは知り合いである。

実を言うと、以前一度出会って、話までしている（主にお互いの相棒について）

そして、二人は晴れて「ともだち」になったのだ。

さらに、インデックスは計画を知ったが、とめることは無かった。

どうやらもう一人『たきつば』と言う人が来ているということは知っているが、

『たきつば』の場合は自分から来たとか言っていた。

彼女が別室なのは、衰弱状態が激しいため、舞月の治癒魔術を受けているからだ。

話が逸れたが…インデックスは何故計画を止めなかったか？

それは、彼らの会話の中にあつた。

（5分前）

「で、なんでさくは私をここに連れてきたの？」

インデックスはアジトらしき場所に着いて早々、それを舞月に聞い

ていた。

どうやらこの舞月も思念体らしいが、その思念体はすこし違っており、

舞月の魂を反映させた物らしい。

そして、そのモノは言う。

「計画のため、”俺”、我私’の魂と肉体をori4qmiに返すためだ」

舞月の一人称の俺が二つ、他に二つ重複し、肉体との後にノイズが走る。

「……どうやら現世ではこの程度も言語化できないらしい」

インデックスはそれに首を傾げたが、目の前の人間は、天使と墮天使の魂を計3つ封印している人間なのだ。何が起ころうと、まったくインデックスは動じない。

「まあいい。そして、『俺』『我』『私』の内、魂だけをoerai p342に返し、力だけを舞月の肉体に残す。無論、原罪も、無い」

彼は言った。世界に一人しか居ない魔神、と。

だが、その実態は、‘人間’を捨てた“人間”だったのだ。しかし、それは、神が創った器だったらそれはありえる。

インデックスの10万3000冊の魔道書の中にも載っていない、舞月だけが保有する知識と言うものが、彼にはあった。だが、

「原罪が無いといっても、それは不老だけ。

不死ではない。：まあ、軽く3000年は生きるが」

その言葉にインデックスはゾツとした、
3000年といえば、あのアダムでも生きれなかった年数だ。
明らかに『神の子』に限りなく近い存在となっている。

『聖母』の特性と『聖人』の特性を保有したアックアを軽く凌駕する。

『神の子』は神になり、端的に見ると不老不死になった人間という考えが一般だ。

実際には『神の子』は罪を負うために生まれた唯一のヒトだったのだが。

それを勝手に勘違いする人間が居るとするのは作者としては不愉快極まりない。

つと、話が逸れた。

「人間としても、これはかなりの数字だ。

だから、後に神になる可能性もあるが、今のままでは本当に不死だ」

舞月が言う。

その表情は不愉快。自分は人間なのに、ヒトの分類に入るといふことが。

人間ではない人間。それは何者でもないということを現している。
男にも女にもなれる存在。

天使。

天使は言う。

「俺は人間になりたい。だが、天使としての役割も必要だ。
そこで考え付いたのが、御使返しだ」

御使返し。

その名前ならインデックスも知っていた。

だが、それは地脈と竜脈からの生命力と、超自然からの生命力、さらに個人の生命力を同時に魔力に変換させなければできない、幻以前に成功例がゼロ、試した回数は解らない、あるのかどうかもわからない術式だ。

だが、この青年ならそれが成功するかもしれない、とインデックスは思った。

何故なら、この青年は、そのものが天使であり、

天使を宿す肉体であり、天使であるが故、超自然そのものだからだった。

なので、問題のうち、超自然のところはすでにクリアしている。

だが、問題なのは肉体のほうだった。

いくら成功する確率が高いといっても、人間の肉体は脆い。

刀で切れば、真つ二つになり、棍棒でたたけば、威力によって変わるが、骨に輝が入る程度のことはできる

そんな肉体が、膨大な生命力を溜め込んで本当に大丈夫なのか、という問題が出てくる。

そこまでインデックスは考えて、思考を止めた。

否、止められたのだった。

インデックスは真正面から舞月を見ていた。

だが、気づいたときにはもう既に真後ろにいた。

音すら出ない、静寂。

それは、無音脚と、ある世界では言われる。

魔術界でもそれは囁かれている。

この世界には、足音を出さずに、どんな距離でも移動できるヒトがいるらしい。

どうやらそれは正解だった。

舞月がその正体だったのだ。

「俺の肉体は、軽く常人を超えている。

『聖人』じゃないが、まあそれ以上だろうな」

その言葉は普通は受け入れがたいものだったが、インデックスは受け止めることができた。

それが、彼女が舞月に寄せる信頼。

初めて出会ったとき、出血していた上条を器用な手つきで治療し、お礼を言うのと逆に驚くようなその態度。

それは、『ともだち』にインデックスがした後、数十分の間だが、それが滲み出ていた。

舞月は『ともだち』だ。それがインデックスの意見だった。

「…それで、さくは何がしたいの？」

「…本当にすまない、インデックスには、上条を誘き出すための人質になってもらう」

それでも、インデックスは『ともだち』に協力する決意を揺るがせなかった。

第5章 第9話 「舞月とインデックス」(後書き)

今回はミサカに続き、インデックスの覚悟の回でした。
前回通り、三日に一回の投稿になると思います

第5章 第10話「二人の主人公」（前書き）

今回はあの白いのとチンピラ主人公の再開です。

第5章 第10話「二人の主人公」

10

一方通行は自分でも状況が理解できていなかった。

唐突に黄泉川から電話がかかってきたと思ったら、なぜか打ち止めが誘拐されている。

そして、搜索を始めようとした矢先にあの黒いのが現れ、誰かの電話番号を置いていき、

その男と行動しろ、と何故か言われて、言うだけ言われてから黒いのが消えた。

「…どうなってんだこりゃ」

『俺にもわからねえよ、一方通行』

電話の男はあの時、つい最近だが、滝壺という少女とともに行動していた無能力者だった。

更に、彼の話によると、滝壺という少女は攫われたらしい。

まったく意味がわからない。

なぜあの男の電話番号を黒いのが知っていた？

普通なら知らないはずである。知っていたとしても、ここまで関係性のある番号をなぜ教えた？

あの男は何を目的に動いている？

全てが解らないことばかりだ。だが、あの上条当麻という男はあの黒いのを知っていた。ということは何か知っているかもしれない。

「まアいい。オイ、オマエの名前はなんだ」

一方通行が電話の男に聞く。

『浜面。浜面仕上だ』

「よし、浜面、今から俺の場所のデータを転送する。5分で来い」

そういうと、一方通行は電話を切り、メールをものの二秒ほど送る。

すると、電話帳からある一人の男の電話番号を開く。

「まさか、アイツの手を借りるハメになるとはなあ……」

自分でも、驚きを隠せないような表情で一方通行はその男に電話をかけた。

上条の電話が鳴った。

上条はショックからいまだ立ち直れていないようで手が震えている。だが、それでも電話を取る気になったのか、携帯端末を開き、電話に出る。

それは、おそらく希望を差し伸べるものだとして上条は信じたかった。インデックスに持たせている0円ケータイからかかってきたものだと、開ける前は思っていたが、

そこには、数日前に電話帳登録した男の名前があった。

「もしもし？」

『俺だ、上条。…俺としてはかなりヤバイことになった。今から会えるか？』

上条は、一方通行の声が焦っていることに気づいた。

あの一方通行が焦るほどの事態になるとは、いったい何事だろうか

？と、上条は思うが、

こちらとしてもインデックスが目の前で攫われたばかりである。

「悪い、俺も俺でやばいことになったんだ……」

上条の声は震えていた。

だが、

『打ち止めが攫われた。もしかしたらオマエもあの白いのが攫われたのか？』

その言葉を聞いて、上条の瞳に光が戻った。

「ああ、そうだ。舞月……つっても解るか？お前と戦ったあの天使だよ俺はあいつにインデックスを攫われた」

「俺も同じようなもんだ。でも、アイツは手応えがなかった」

「ああ、あいつはなんかの粒子から人間の思念体を作り出せる。多分、あいつの思念体にしろくな」

上条と一方通行がどんどん意見交換していく。

その光景は、海原たちには信じられないものだった。

あの一方通行が宿敵と話をしている、協力していることが。

「……やれやれ、僕は彼のためにまた一働きしなければいけないようですね」

「海原、俺も同じことを考えていたぜ……」

土御門達が話をする中、一方通行がここに来るらしいことが解った。一方通行に見つかるわけにはいかない。

今の一方通行は休暇を貰っているはずだ。

『グループ』の仕事に間接的には関与していても、先ほど『グループ』の上層部から電話で一方通行を3日有給休暇ということにしている、という連絡が来たばかりだ。なので、今の彼らは一方通行に接触するわけにはいかなかった。上条が気付かないところで、二人は去った。

浜面は3分ほどで来た。

どうやら車で飛ばしてきたらしい。車の運転免許があるかどうかは知らなかったが、こちらとしてはちょうど良かった。

「オマエに会わせたい人物がいる。その車でこの地点まで行くぞ」

一方通行が携帯端末を開いて浜面に見せる。

「ああ！？いきなりなんだよ…まあいいか。じゃあ行くぞ」

浜面が手招きする方向には、最近のワンボックスカーがあった。

浜面は運転席を開けると、乗り込む。

一方通行は助手席に座ると、チャージャー型電極の残量を確認める。十分フル活用できるレベル。これなら、あの黒い翼ができれば大方戦えるだろう。

ワンボックスカーが発信する。

所々浜面に一方通行がナビ代わりで教える。

そして、ものの数分後、二人はあの少年のところへ辿り着いた。

第5章 第10話「二人の主人公」（後書き）

どうでしょうか？自分としては短めでしたが…

最近スランプ気味です。

もしかしたら予告していた日にちとずれるかもしれませんが、それでもどうか、この小説を応援よろしくお願いします。

第5章 最終話 「決戦の時」

11

ワンボックスカーから降りてきたのは、一方通行と、いつかのスキルアウトだった。

「お前！」

「おお？あの時の無能力者じゃねえか」

浜面に向かって上条がいうが、案外浜面は気にしていない。

「まあいい、俺の名前は浜面仕上。お前は？」

「…なんでそんな友好的か知らないけれど、まあいいや。」

俺の名前は上条当麻」

そう言つて、二人は握手をする。

どうやら二人ともそんなに気にしていないらしい。

「それで、だ。上条、お前あの舞月という奴について知ってるか？」

「ああ、浜面は知らなかったか？舞月は俺のクラスの副担任で――

――」

そうやって、上条は切り出し、そのまま天使の話もひっくりくるめて全て話した。

「オイオイ……マジかよ……」

浜面は信じられないような表情をしている。

だがしかし、それは事実なのだ。

なので、否定のできないことだ。

現に一方通行も上条も実際に会って戦闘までしているのだ。

否定ができない事実というのはこのことを言う。

「それで……、どこに行けばいいと思う？」

上条が一方通行に聞くが、一方通行は首を横に振り、

「それがわかってたら連絡してるだろオが」

と、呟く。

その言葉で二人は意気消沈するが、浜面は違った。

「実は、俺のところに誰か解らない人物から住所が届いているんだ」

その言葉に二人が反応する。

浜面の携帯の画面には、今では停止している、とある廃研究所の住所が書かれていた。

そこは、最近「グループ」に危険地区として、数名下働きが調査に行つて、

帰つてこないところであつた。

上条の知識だと、そこは不良でさえ寄り付かない、謎の施設ということだが。

「まア良い。ンじゃあいくぜ！」

「「おう！」」

一方通行、上条当麻、浜面仕上。

そして、イギリス清教や一人の傭兵崩れを巻き込んだ戦いが、今始まろうとしていた。

第5章 最終話 「決戦の時」(後書き)

今回は最後なので大分投げやりみたいな感じになっていますがすいません。

実を言うと…中学になってから宿題の量が増えたりして、かなり小説の時間がなくなってきてます。

確実に小説を書く時間がなくなっているため、更新が不定期になるかもしれません。

でも、どんなになっても二週間に一回更新が一番遅い状況です。なので、どうか期待して待ってください。

次回が行間で、一番最後の傭兵崩れとイギリス清教が巻き込まれる理由を書きたいと思います。

それでは、また

行間4（前書き）

こんかいはとある聖人の会話です

行間 4

あるところに、一人の傭兵がいた。

彼は『聖人』の特性を持ち、その圧倒的な実力で、イギリスの騎士になる予定だった。

だが、ある事件をきっかけに、彼はローマ正教『神の右席』の

『後方のアックア』と名前を変える。

しかし、学園都市で起こった事件をきっかけに、『神の右席』を抜け、

もう一人の仲間と連絡を取り合いながら、傭兵崩れとして生活していた。

そして、その為に彼が取った武器は『聖剣アスカロン』。

全長3・5メートル、重さ200キロオーバー！。

彼は『聖人』としての腕力以外にも、『神の右席』として、磨きかけた魔術を使う。

そして、現在彼は、聖母崇拜の術式を復活させ、過去の強さを取り戻していた。

そのアックア——もとい、ウィリアムⅡオルウェルは、学園都市へと向かっていた。

過去の仲間、『神の右席』のリーダーのフィアンマをも寄せ付けない強さをもった青年、

『中央のカオス』と名乗る青年の計画の実行の時が来たということ
を連絡で受けたからだ。

そして、彼はいま、イギリス清教の『聖人』、神裂火織と接触していた。

「…またお前と顔を合わせて話をする事になるとは思っていなかった」

「確かに、あの時以来ですね……」

……しかしながら、その宿敵にも近い相手を前にしても、

二人はなぜか紅茶を飲みながら会話している。

この状況は少しおかしい。

なぜなら、ウィリアムは聖剣アスカロンを地面に突き刺しているし、

神裂も七天七刀を銃のホルダーのようなものに入れたままである。

この状況、一触即発のようにもみえるが、先ほどから彼らは一人の青年について話している。

「それにしても……あ奴の状況が悪化しているとはな……」

「ええ、あそこまでやられると、流石にデリカシーが無いのでは、と考えてしまうほどです」

そう、舞月の女性問題についてだった。

計画だの何だのの前に、彼のそれをどうするかがいちばん最優先事項だった。

なぜなら、彼が何をしているかは彼らくらいしか知らない。

なので、彼の友人に感づかれてしまったらそれでお終いなのだ。

無闇に魔術に近付けてはいけない。

一人でも多く犠牲者を出してはいけない。

というような考えで、神裂は動いたのだが、その結果が

「まさか、世界規模でファンクラブがあるとは思いませんでした……」

どうやら発端はローラらしいが、その規模は軽く6桁行くほどだった。

これについては、本人に聞いても目を丸くするだけだろうが、

彼のファンクラブ、というのは舞月のルックスにも関係しているだろう。

人を惹きつけるような性格のみならず、

スタイルもルックスも良いという噂（見た目ではそうなのだが）が流れているため、

その噂が魔術の世界を通り越して、一般にも伝播していてもおかしくなかった。

それが、魔神の実力なのだろうか、それともルックスのいい人間のクセなのかは知らないが。

が、そんな感じでの日常会話をしていた二人を遮るようにアックアに連絡が入る。

『計画の第一段階が始まっただけ、アックア』

声の主は男の声だった。それは神裂にも聞き覚えがなかったため、おそらく傭兵時代の名残の

情報網だろう、と推測ができる。

「解った、今すぐそちらへ向かう」

アックアは端的に反し、すぐに電話を切り、神裂をみる。

「共に来るか？」

彼がそんな事を聞いたのは、彼の利益のためではなかった。

神裂火織はどうやら舞月を気に入っている。

ということは、自分の手で何かがしたいだろう。

なので、アックアはそれを察し誘った。

「もちろんです。彼を止めるには私がいないとだめですから」

…本当はそうでもないのだが、それが彼女の決意だった。

——そして、二人の『聖人』は学園都市へ向かう。

行間4（後書き）

二人の聖人が、舞月の計画を止めるために学園都市に行く…
というのが第6章の後半ぐらいです。

いつも読んでくださる皆様、本当にありがとうございます。

そして、感想をいつも下さるスケスケタロウさん、
いつもいつもありがとうございます。

個人的には、読んでいる皆様みんなから感想をもらいたいと言いた
いところなのですが、そこまで皆様のお手を煩わせることはしたく
ないです。

でも、感想をできたらください。

そうしたら、かなり喜んで狂喜乱舞しますのでww
そして、テンションあがって余計に小説を書けます。

ではみなさま、また次回

第6章 『御使返し』 第一話「本当の覚悟」

「…ここなのか？」

浜面が心配そうに一方通行を見る。

「ああ、ここだ」

その言葉に一方通行が答える。

が、正直上条も心配だった。

なぜなら、目の前に聳え立つ建物というのは、明らかにボロっちい研究所だった。

だが、彼が試しに右手で壁に触れてみる

硬いものが砕け散る音が響き渡った。

その瞬間周りの風景が一変した。

周りは、大量の魔方陣にあふれ、青白く発光している。

機械音と、何かが稼動しているような変な音が聞こえてくる。

その中で、呪文のような、不快感あふれる声が聞こえてくる。

上条でもわからないことはある。

魔術の専門なら、これは言霊だとわかっただろう。

古来より言霊は、呪文の代わりに使われている。

なので、それは簡単に済ますことのできる短縮用でもある。

だが、これはお経のように長々と続いて聞こえる。

すべて英語のようだが、たまにノイズのような変な声が混じっている。

「気味悪い……」

上条がボソリとつぶやくが、一方通行は歩を進めた。

「お、おい……、待てよ」

上条が一方通行の呼び止める。

一方通行が上条を見る。

「ここは、皆で行ったほうがいいんじゃないか？

一番安全だろ？それがさ」

上条の言葉に、大きな溜息をつくと、一方通行はまた歩き始め、

「オマエはそこでじっとしてればいいイだろ？」

「だけど――」

「俺たちより危険なのがアイツらじゃねエか!!」

上条はその言葉で思い出した。

舞月は、浜面の恋人(?)と、打ち止めと、インデックスを人質同然にしている。

と、いうことは、今インデックスが何をされているかわからないのだ。

連絡手段がない。ということはどんな危険が付きまっているかわからないのだ。

そんな者達を助けに来たのに、自分の身の事ばかり考えていてはまったく前に進まない。

「…そうだったな、行こう」

「待つてたぜ、当麻!」

そうして、三人は、混沌の渦の中心点へと歩みを進める。

第6章 『御使返し』 第一話「本当の覚悟」（後書き）

長らくお待ちさせてしまいました！

やっとこさ暇ができてやつとの更新です！

機能で第2話まで書き上げたので、今日中で第2話まで更新したいです。

そして、明日から学校で自然教室…

悲しいです。

しかし！帰ってきてからじゃんじゃん書いて、がんばって更新速度を上げたいと思います！

では、また後で

第6章 第二話 「削板vs舞月」(前書き)

今回は短いですがバトルパートです。
案外強くなった削板…

第6章 第二話 「削板vs舞月」

2

「…来たか」

ポツリ、と雨の雫が落ちるように呟いた。

その瞬間、轟音とともにその部屋の壁が吹き飛ばされ、真っ直ぐに舞月へと飛ぶ。

普通なら、当たったとしても骨が折れる程度だろう。

だが、ベクトル操作によって、秒速20メートル以上の速度で

5メートル先の舞月に直撃する。普通に、ただでは済まないだろう。

だが、舞月が右手をかざすと、その壁が舞月の手の中に吸い込まれた。

「やっぱ、この程度じゃ傷すらつかねエか」

舞月はその方向を見る。

そこには、白い、白い、白い、一方通行がそこにいた。

一方通行の顔は、余裕を持った表情。

だが、一方通行は完全に思考をフル活動していた。

（なんだ、この部屋……。やはり、胸の辺りに重圧をかけられているような感覚。

これが、魔術に近づくと出る症状だろう。だが、ありやなんだ？ 魔方阵って奴か？）

舞月は、とても巨大な魔法陣の中に描かれた、

半径10メートル程の円の中に立っていた。

そして、舞月の瞳の色が違った。

真剣な瞳や、悲しい瞳などの類ではない。本当に色が違った。

少し青のかかった黒色の瞳が、真っ黒で、どす黒いような色になっている。

「結局来たのか……。削板」

ハア？と一方通行がいうより早く、反対側の壁が、内側から爆発するように膨張し、

思いつきり砕け散った。

「やはりオマエの差し金か！」

そこからでてきたのは学園都市のレベル5のナンバーセブン、

削板軍覇、愛と人情のヲトコだ。

だが、その瞳には明確な敵意が宿されていた。

「おい、その二人！怪我したくないなら近寄るな！」

二人、というのはおそらく上条と浜面のことを言っているのだろう。

一方通行がなぜされていないかは、いわずもがな。

あの能力さえ発動すれば、血の一滴も流しはしない状況になる。

なので、信頼できるのだろう。

「削板軍覇、お前が来たという事は、父さんがやられたということか……」

残念そうな表情を浮かべていうが、すぐに考え直したように、手をポン、と打つ。

「成る程、あの男、手加減したな……？」

だが、そんなことに反応することもなく、削板が一気に距離をつめる。

しかし、それより前に舞月の手が動いた。

空を切って、何かが飛ぶ。

寸でのところで削板がそれを受け止める。

「刀……？」

その刀は、削板が持つと、何か青白いものに包まれる。

すると、柄の一番下から鋼糸のように細長い糸が数本伸びていて、

刀身は青白く、月光を放っているようにも見えた。

「俺の能力で調整したお前用の刀だ。

まあ、30分ぐらいしか持たないが……今のお前には十分だ」

その言葉とともに、何か赤い粒子が集まって、形作っていく。

それは、一本の刀となった。

鳳凰の羽のようなものが、柄の一番下から出ている細長い糸にくっ付いている。

刀身は、白銀の輝きを放っており、その柄は、異様に目を引くな紅色に輝いている。

「ほう…、似たような得物で、勝負か。いいだろう！」

そして、二人はゆっくりと近づく。

8メートル…7メートル…6メートル…5メートル――

瞬間

ガキン！…という鋼が弾かれ合う音が鳴り響く。

初めて手にしたのに、削板はそれを何年も前から振り回しているような感覚で振った。

その衝撃はすさまじく、ドン！と何か得体の知れない力が周囲に撒き散らされ、

地面が抉りとられる。

その衝撃はもちろん本人達にも生じた。

二人は、靴の踵で、吹き飛ぶ体を引きずる。

スザザアアア！と、普通ならありえない音が聞こえてくる。

そして、二人の体が止まった瞬間、二人が地を蹴り、

一気に距離を詰め、刀身をぶつけ合う。

そして、勢いそのまま連続で斬り合う。

ガガガガガガ！と、金属音ですらなくなった音が周囲になり響き、

その刀がぶつかる度に周囲が傷ついていく。

だが、その瞬間、一方通行は気づいた。

地面に書かれた魔法陣には、傷1つついていないことを。

確かに、線の間の地面は挟れたりしている。

だが、線自体には傷1つついていない。

「おい、上条」

「なんだよ、一方通行」

一方通行に声をかけられて、上条が一方通行を見る。

「おまえの右手は、超能力だけじゃなくて、魔術も消せるんだな？」

「一応、な……」

ここで上条が少し考える。

なぜなら、嫌な予感が少しずつ輪郭を持って、表面に具現化しようとしているような、

何か変な感覚があったからだった。

だが、一方通行はそれに気づいているのかいないのか、

「だったら、あの魔法陣に触れたら、魔術そのものを吹き飛ばすことができるんじゃないか？」

その言葉に、上条はハツとした。

舞月は今、削板との戦いに集中している。

ならば、いつでも陣を消せるんじゃないのか？

だが、上条の本能のどこかで、それをするなという声が上げられる。しかし、今ここで動かなければ、次の機会があるかどうかかわからない。

だから、上条は決心した。

「確かに、できる。

多分、お前はあれを破壊したいんだろ？なら、やってみるよ」

そう上条が言うと、一方通行はすまない、と一言言っ、前を向いた。

だが、その瞬間。

舞月の蹴りが削板の腹部に直撃し、弾丸のような速度で壁を突き破りながら飛んだ。

壁を一つ壊すと、やっと一回バウンドし、そのままゴロゴロと地面を転がる。

虫の息、というのはこの状況をさすのだろう。

「ヨオシ、じゃあ、おまえ達、ここまで来た覚悟ヲ見せてみる」

ところどころ、何かおかしい音が混じる。

そして、彼らの希望へと進むための戦いが始まった。

第6章 第二話 「削板vs舞月」（後書き）

如何だったでしょうか？

一応今日の更新はここまでです。

4日後…できるかなあ……

できたらします、できなかったらすいません、待っていてください。
今回力タカナ交じりの台詞を最後に舞月が言いましたが、一応これはノイズの前兆という感じです。

次回は、一方通行と浜面（チヨイ役）と上条の三人でのバトル？になりますね。

乞うご期待！

感想お願いします。

俺がいなくてもしてくれとうれしいな

第6章 第3話 「発動」(前書き)

今回はちよつくら長め。
出来上がったので投下

第6章 第3話 「発動」

3

一方通行は思う。

勝算は限りなくゼロに近い。

だが、だからこそ考えればその少しの勝算を最大限フル活用できる。

チョーカー型電極に手を掛け、能力使用モードにする。

瞬間、弾丸のような速度で一方通行が舞月に迫る。

「ベクトル操作、か…！」

刀を地面に突き刺し、構える。

まず、右足の蹴りを顔面掛けて出す。

ベクトル操作により、その速度は弾丸より速い。

それを、左腕で受け止める。

そのまま一方通行が銃を取り出し、

弾丸のベクトルを操作し、火薬によって打ち出された音速の弾丸を、

地球の自転を上乗せして更に高速で打ち出す。

だが、その弾丸を撃つたと同時に、浜面が舞月の右足目掛けて撃つ。すると、舞月は一方通行の放った弾丸を消し、

浜面の撃った弾丸を、避けた。

（…弾丸を消すための所要時間は約0・7924秒、そして、浜面の撃った弾丸が右足の

あった地点に届くまで消した後の約0・8752秒。ってエことはだ、奴の物を消す能力は、

一つの対象にしか使用できないということか・・・？）

一方通行の反射をすり抜ける事ができるということは、

一時的に体のどこかにそういう仕掛けをしておくことができるはずだ。

そのことは考えず、彼は1つのことに気をとられていた。

彼の知る由もないが、彼には万物を操る能力がある。

しかし、それは万能ではない。

彼の気づいたとおり、消すのに数秒かかるときもある。

そして一番の弱点は、持続性がある能力を使用した後、一つの対象にしか使用できないことであつた。

そして、一方通行は小声で何かをつぶやく。

「……？」

それに気をとられ、一瞬止まる舞月。

「もらったア！」

一方通行のベクトル操作能力で、待機の動きを上乗せした拳が、舞月の腹部に直撃した。

が、しかし、彼の体は円の一番端で止まった。

だが、よほど衝撃が強かったのか、少し咳き込む舞月。

「今だ、上条！」

一方通行の一言で、上条がその魔法陣に触れた。

だが、何も音はならない。

しかし、変化はあった。その魔法陣が青白い光や、暗紅の光を放ち始める。

「なんだ……？」

「よそ見し過ぎだ！」

その言葉で、一方通行が反応するより早く、舞月の拳が

一方通行の顔面に突き刺さる。

そのままノーバウンドで数メートル吹き飛ぶ。

そして、魔法陣の外に出たところで、舞月がまた口を開いた。

「全式神投入！陰の結界を構築し、敵の侵入を防ぎたまえ！」

その一言で、上条の立っていたところの目の前に、

何か硬い壁のようなものが現れた。

色は透明で、舞月が見える。

ただ違うのは、円の中にも何かの図形が描かれていき、

その中心点に舞月がいるということ。

「上条、オマエの右手は少し封じさせてもらったぜ……

ゴハッ！…チッ、始まったか」

舞月が途中で血を吐き出す。

「おい、舞月！」

「黙ってみていろ！俺がopea墮じio praeに戻るところを

――」

その瞬間、彼の体がブレた。

まるで分身仕掛けしている状態のように、薄い舞月が舞月本人から浮

かび上がる。

「i p r - 3 k o r e a / : e o r e a」e e , v 2 f 4 t」――
――！！」

何か言語のようなものを発し、そのもう一人の舞月が舞月本体と分離した。

「ああ！？分身した！？忍者かアイツ！」

この期に及んで魔術について完全に理解していない浜面が驚いて言う。

だが、それが分身の類でないことは一目でわかった。

土でできた巨大な翼を生やしていて、金色の髪の毛に薄黄色の瞳。

「ハア…ハア……神の火、ウリエルか……」

「j i r e a p 3 : s a o , t r a」

どうやら返事をしたのであろう、コクリと頷くウリエルと呼ばれた
”何か”。

「ウリエル……？神の火……」

その言葉で、一方通行は気づいた。

『俺はこの身に天使を宿している』

舞月のその言葉で思い出した。

天使

それがあの”何か”の正体だと思った。

そして、それと舞月が話している。

「i r p e a / r e r e a」 e k o a p r e a「a

「ああ、すぐに戻れるさ」

どうやら言葉が通じているらしい。

舞月がその天使に触れると、天使がだんだん小さな粒子になっていく。

「先に戻っていてくれ」

そして、それは何処かへ行った。

残るのは、神の如き者と、光を掲げる者。

そして、何か黒い物が舞月の体の回りから出てくる。

「グウッ……、やはり、奥深くまで侵食されてるか……」

舞月が頭を抱えて言う。

だが、

『当たり前だア…俺はオマエだからよオ』

何者かも解らない、何かの声が聞こえた。

「だからと言って、お前が俺と同化しているのを剥がす事もできる」

穏やかな口調で、舞月はそう言った。

だが、

上条が静かに歩み寄ろうとして、転んだ。

ただこれだけだが、全てが変わった。

右手が魔法陣に触れた瞬間、この世の物とは思えないような轟音が聞こえた。

「ガアアアアアアアアアアア！？」

舞月が突然頭を抱え、その場に膝を突く。

そして、背中から真っ黒な翼が飛び出す。

瞬間、また一方通行の中で何かが走った。

それは、存在しないはずの知識。

神の世界、箱庭、そして——天使の翼の構成物質。

（こりゃあいイ……）

一方通行はそう思った。

それさえ、A I M拡散力場に上書きしてしまえば、それもベクトル操作の対象になる。

と、いうことは、いつでもあの黒い翼を使えるということであった。だが、そんな一方通行の考えを知らず、浜面は何かをしていたのだった。

それは、罠の設置。

敵の動きを止めること、敵を攻撃すること、全ての種類の罠を設置していた。

あんな物にかなう筈が無い。

それが、”無”能力者である、浜面の心情だった。

このくらいしかできない自分が歯痒い。

しかし、これしかすることが無い。

（けどなあ……それでも俺に出来ることをしてやろうじゃないか！）

浜面はそう思いながら、罠の設置を終了した。

第6章 第3話 「発動」(後書き)

次回：光を掲げる者vs三大主人公(主に一通と上条)

終わるのはあと大体一生ぐらいかな？byヴェント

それはありうるなbyアックア

てか俺様より強いってチート過ぎる…byフィアンマ

それにしても…もー本当にそろそろ終わりそうですねーbyテッラ
だよなーbyカオス

一応神裂達もださなきゃいけないからなあ…by俺

アックアは確実だなwwあいつがないと全員死ぬぞwwwwby
もう一人の俺()()

確かになあ……俺様がモブなのが気に食わんbyフィアンマ
仕方ないby満場一致

もともにもどそーっと

はい、後一章ぐらい続きます。マジスマソ。

早く終われカスっていう人、サーセン

続けばいいのに…って思う人、これの次回作に近いものならあります。

簡単に言くと、原作介入です。

主人公は、舞月の本当の父、舞月外樹。

一応これはオリジナル小説の道並町魔術物語でもでてくる舞月の父で…

二人は同一人物ですww

詳しくは、設定があるから調べたら出ると思いますが…

で、その外樹の若い頃が、とあるの世界に介入します。

一応原作に沿って介入するから安心してくださいな。
無所属で、上条の高校の教師…って感じです。
見ていただけると幸いです。

第4話 『第二局、終了』（前書き）

今回で戦いの第一部は終了です

第4話 『第一局、終了』

4

舞月の叫び声が止まった。

辺りに一瞬の静寂が訪れる。

「み…づき……？」

上条が途切れ途切れの言葉を舞月に投げかける。

だが、

「悪いな、舞月はいったん俺が封じさせてもらったぜ？」

黒い翼を生やした、もともと中央を守護するための堕天使が、そこに君臨した。

光を掲げる者。
ルシフェル

一瞬で一方通行と上条は悟った。

だが、浜面はそんなことは知らない。

銃を向け、三発連続で打つ。

全て腹部狙い、ということは急所は狙っていない。

おそらく、学園都市外の捕縛術のうちの一つを真似たのだろう。

「その判断は有効だ。

……相手が（・）人間な（・）ら（・）な（・）」

銃弾は、舞月に到達することなく消え去っていた。

「いやあ……使用をor7ap空oekewにするのは初めてだが……

やはり分析結果は人体に影響なしか」

舞月は言う。

そのまま、左手を上条に向かってかざし、右手を浜面に向かってかざす。

「お前たちにはあんまり用事はないから」

瞬間、上条と浜面は一秒もかからず昏倒した。

「！？……ンだよ、今のは……」

一方通行が舞月を見て言う。

「何、少し人体に干渉しただけさ。

……まあ、お前のベクトル操作と似たようなものだ」

「……………そうかい」

その一言を発した瞬間、一方通行はチョーカー型電極に手をかけた。
その瞳は、紅。

全てを飲み込む紅と、全てを破壊する漆黒の戦いが始まった。

たった数分しかたっていない。

しかし、辺りは瓦礫の山と化していた。

そして、その中心には、少年と青年。

一方通行と、舞月。

一人は、翼が生えており、もう一人は、その翼の攻撃を受けながらも互角に戦っている。

一方通行の拳が舞月の翼を捕らえると、轟音とともに翼が吹き飛ばされ、

しかしその動きさえも利用し、重い、重い一撃を一方通行の腹部にぶつける。

だが、それさえも何の働きか拳が一方通行の体を避けるように通り過ぎていく。

その瞬間、一方通行の膝蹴りが舞月の腹部に直撃する。

それと同時に、舞月の左手が一方通行の顔面に直撃する。

お互いが数メートル吹き飛ぶ。

地面を挟りながら後方に飛ぶ二人。

靴にできるだけ負担をかけないようにしながら、舞月は止まる。

だが、一方通行は既に目の前にいた。

拳を振りかぶり、思いっきり顔面に杭のように打ちつける。

だが、それを右手で受け止める舞月。

しかし、舞月は空中に放り出された。

だが、翼をはためかせ、空中で静止する。

そんな中、一方通行は口を開いた。

「俺の能力を忘れたかア？」

俺の能力は『ベクトル“操作”』。

どうやら反射をデフォルトに設定していたり、一撃の強さを調整したり、

そんなことをしてたから何も知らねエ奴らは勝手に『ベクトル変換』だと思ってる奴もいるらしいがなア？

“操作”だったら話は違エ。後方に吹き飛ぶ‘ベクトル運動’を、前方に進む‘ベクトル運動’に操作、そして、風を操りさらに加速した。

さらにそのベクトルを拳に繋げ、真後ろに吹き飛ぶベクトルを、放物線を描くように吹き飛ばすように設定したってワケだ」

その一言に、青年は目を見開いて驚愕の表情をした。

先ほどの言葉を聞く限り、全て一方通行の能力だ。

だが、それは並大抵のことではない。

彼がいま言った言葉の内容は、たった5秒ほどの間に起きた出来事なのだ。

能力は、強ければ強いほど演算が難しくなる。

ましてや、『火を出せ』や、『水を動かせ』などという演算のほとんどいらない物とは

全てが違う。目視できないことも影響するが、彼の能力は演算のもので成り立つ代物だ。

1次元を利用した『空間移動』や、『座標移動』と同様、

基本的に思考を乱されると演算に綻びが出るタイプである。

それを、痛みに作用されずに使うことによって、やっと超能力者（レベル5）になれる。

だが、彼の精神と頭脳は常人とは違う。

学園都市最優秀の頭脳と、学園都市最強の能力。

この二つがあつてこそ、彼は最強の証を手に入れる。

だが

鈍器が骨に当たるような音と共に、一方通行は横に吹き飛ばされた。

「確かに、これだけのことをやり遂げるその強さは認める。

だけどよ、お前はそう簡単に俺には勝てねえよ」

それは、舞月の翼が一方通行の体を横薙ぎに吹き飛ばした音だった。

「カツ……は……」

一方通行の肺から一気に空気が押し出される。

維持されていた一方通行の意識が途切れそうになる。

だが、持ちこたえる。

脚力のベクトルを操作し、近くにある瓦礫の山を蹴り飛ばす。

それが、舞月に向かって弾丸のような速度で突き進む。

その一部を、舞月はおそらく力を使って消し、自分に向かって突き進むものは

ほとんど蹴りや拳で弾き飛ばす。

「悪あがきはよしなほう——！？」

「上だつてンだよォ！」

舞月が気付いた時には、舞月の後頭部に踵落としが炸裂していた。

さらに、脚力のベクトルを操作し、重力をも味方につけ、

軽いクレーターができるほどの一撃をぶつけていた。

だが、舞月はそれを自分の翼だけで受け止めた。

「一応俺には翼はあるが……お前も出したらどうだぁ！？」

翼で足を振り払い、振り向きざまに回し蹴りを一方通行に叩き込む。

横薙ぎに吹き飛び、一方通行が壁にぶつかり、そのまま地面に落ちる。

「クク…やはり、三人だけでは俺は倒せないか…」

その唇を嘲りの形に変え、舞月は言う。

「たった三人で俺に挑んだのが間違いだ！

どうせなら超能力者や聖人の一人や二人、持ってくるんだっとなあ！」

その返事は返るはずもない。

しかし、

「ならば、その聖人が二人、」

「相手してやろうではないか！！」

ある筈のない返事が返ってきた。

天井を突き破り、二つの刀が舞月を襲う。

一つは、見るからに大きな剣。

全長は3メートルほど、おそらく重さは200キロは優に超えるであろつ、

聖剣、アスカロン Ascalon。

ある筈のない伝説の剣。それは、悪竜を殺すために作られた剣。

そして、もう一つは全長2メートルほどで、見た目に反して

できるだけ軽めに作られた日本刀。

更に、柄尻の部分には巻きつけられた鋼糸。

七天七刀。

天草十字凄教の女教皇の愛用の刀。

「――！」

何かを唱え、一瞬で舞月は手中に刀を出す。

それは、七つの宝石が埋め込まれた刀。

更に、その真の力を解放した状態。

真・七星宝刀。

その一本の刀で、二つの剣を捌いたが、

捌ききれずにそのまま地面まで落とされるが、

途中で刀を弾き、着地する舞月。

そして、共に着地する二人の人影。

一人は、傭兵のような恰好をした男。

もう一人は、髪を後ろで束ねた女。

男の名前は、ウィリアム・オルウェル。

一時期、後方のアックアと名乗り、上条当麻の右腕を切り落としかけた男である。

女の名前は、神裂火織。

イギリス清教に所属し、天草十字凄教の元女教皇である。

二人は、世界に二十人といない聖人。

そして、それを相手するのは世界に一人しかいない魔神であり、

天使をその身に宿す男。

戦いの第二局が、始まろうとしていた。

第4話 『第一局、終了』（後書き）

番外編

【移動方法】

神裂「ところで、アックア？どうやって学園都市まで行くんですか？」

アックア「それなら心配いらない。私の力は既に戻っている。

だから、私の水を操る力で海を渡ればよいではないか」

神裂「いやいやいや、私が動けないでしょう」

ローラ「それなら心配いらないのこと！」

二人「！？」

ローラ「学園都市の超音速ジェットを二席予約したので、それで行くてくるとよいのでありける！」

という感じで、二人は恐ろしい速度の恐怖の乗り物に乗ることになりましたとさ。

そのことで、彼らはトラウマにもなったんだとよ。

フッフ、ゝのは裏設定の番外編です。

もう終わりがけになってきたこの小説。

しかし、もうね、お気に入り登録件数もPV数もユニーク数もかな

りの量になりました。

もう本当に皆様ありがとうございました。
今回から宣伝します。

お勧めの小説！

東方悪党美 作：スケスケタロウ

これは東方の世界に一方通行が幻想入りした小説です。
とても面白く、一方通行の性格を上手く捉えており、
さらには原作に支障をきたさないほど細かい設定がされている面白い小説です。

個人小説宣伝

道並町魔術物語です。

これは自分のオリジナル小説なので、宜しければ見てください。
自分のページから、道並町魔術物語に飛んでいただけると幸いです。

第7章 第一話『神の右席』（前書き）

今回は主にアックアとの戦いがメインです。

第7章 第一話『神の右席』

「それにしても……」

そう言って神裂が倒れている三人を見る。

ぐったりとし、動くような気配がない。

しかし、体が上下に動いているため、死んでいるワケでは無さそう
だ。

「以前の俺とは思えない、か？」

舞月が神裂を見て言う。

神裂はそれを見て少し心が痛んだ。

舞月の表情は以前は見せることもなかった、狂った笑み。

「今の俺は舞月じゃない。堕天使ルシフェル。
だから以前の奴とは微塵も関係ないさ」

そっという舞月——もとい、ルシフェル。

「それにしても、私は見損なったぞ」

「見損なった？」

ウィリアムの言葉に舞月が眉を顰める。

「てつきり貴様は魔術を有効活用するだけだと思っていた。
しかし、貴様はそれで人を傷つけ、愉悦に浸っている」

そこでウィリアムはいったん言葉を切る。

舞月の表情はすこし不快そうな顔だった。

「そんなことに力を使うものは、私から見ると下衆だ」

アックアの言葉に沈黙が流れる。

「…にが…解る」

「？」

舞月がとても小さな声で言葉を発したため、よく聞き取れなかったアックアと神裂。

「お前に、何が、解るといふんだああああ！！！！」

次の瞬間、舞月は刀を持ってアックアに斬りかかっていた。

一瞬の内に距離を詰め、アックアが気付いた時にはもうすでに刀を振りかぶっていた。

「ぬう！？」

ガァン！と凄まじい音が鳴るが、アスカロンでそれを受け止め、

すぐさま悪竜の神経を斬る威力のスパイクで舞月の右腕を攻撃する。

だが、その行動をとった瞬間、舞月はそこにはいなかった。

「後方のアックア、お前の弱点は見切っている」

風斬音の中、舞月の声が響く。

「聖人の防御力、さらにそれを聖母崇拜術式で強化した体の防御力を上回る

威力の攻撃をぶつければ良い！」

轟！と舞月が空中で静止した音だけで約風速10メートルの速さの風が吹き荒れる。

そして、舞月が右手に持って、今まさに振りおろそうとしているその刀は、

七色の光を発していた。

咄嗟にアスカロンで防御を図る。

だが、これは失敗だっただろう。

「無駄だ」

刀が振るい落とされると、大した速度も出ていないのに、

アスカロンそのものに刀の刃が食い込んだ。

それはミシミシとアスカロンを侵食していく。

「力を入れればポツキリ、力を入れなくてもズバツと。
お望みの方を選びなよ」

だが、舞月の言葉にアックアはふてぶてしく笑う。

む？と舞月が眉をしかめた瞬間、

「七閃」

瞬間、舞月の体を鋼糸ワイヤーが襲い、舞月の腕や足を縛りつけた。

すぐに舞月は力ずくで解こうとすると、ギリギリと鋼糸の音が鳴る。

それほど力を入れているのに、鋼糸は切れない。

だが、そんなことは神裂には関係なかった。

アスカロンが舞月の胴体を直撃した。

何故か、舞月の体は切れなかったが、叩く事ができた。

ただ単なる時間稼ぎ。

それが神裂の攻撃の役目だった。

もろに直撃を受けた舞月の体がそのままノーバウンドで吹き飛ぶ。

そのまま壁に突き当たり――

壁を蹴り、神裂へ向かって猛スピードで突き進んだ。

刀を逆手に持ち、明らかに空戦体勢と入っている。

そのまま神裂の右腕めがけて刀を振る。

神裂はそれを七天七刀で弾き飛ばす。

だが、そのまま反対側の壁から上の壁へと飛び、

ウィリアムに向かって刀を振る。

狙いは頸動脈。

だが、ウィリアムはアスカロンを振り、それを弾く。

――それが、堂々巡りのように繰り返されていて、

――いつの間にか翼は小さく折りたたまれていて、

――攻撃の主導権は明らかに舞月に渡った。

（くっ…このままじゃジリ貧じゃないか！

私が唯閃を打ち込むという手段があるが、それには動作が必要…

…）

神裂が思考を巡らせ始める。

（なにか、すぐに実行できて、舞月の動きを止めることができる行動――）

だが、ただでさえ高速移動をしながら斬りかかってくる、

舞月の刀を捌き、そして何回も攻撃に移ろうとしているがそれは叶わない。

それほどまでに舞月は早かった。

ウィリアムも、いつしか刀を真っ直ぐに構え、

刀を捌くしか手がなくなっていた。

（…極東の武術には、『縮地』というものがあるらしいのであるが、それ以上に速い。反応する暇が無い…！

どうすれば、カオスに有効打を与えることができるのであるか…！）

ウィリアムは内心齒噛みする。

これは、いままで絶対に立ったことの無かった劣勢だった。

イギリスで起こったクーデターの際にも、アスカロンと自分の力量で、

完全に切り抜ける余裕があった。

学園都市にいる上条当麻を襲撃したときには、絶対に勝てる優位に

立っていた。

だが、今の自分の力は全盛期以上だと自負している。

水の魔術を使わなくても、十分すぎるほど強い肉体、

そして魔力に、術式。

しかし、そのすべてを使って、身体速度を可能な限り早くしても、

相手は絶対にそれより速く動く、という確証のない気持ちがあった。

そうやって考えている間にも、舞月はどんどん速度を増していく。

一歩踏み込むと、それだけで数センチだがクレーターがあちこちにでき、

壁を蹴ると一気にそこが陥没し、もう一度踏むと罅が壁全体に入りそうな感じがする。

そして、舞月の刀がアスカロンにぶつかると、

前のように奥まで突き刺さり、折れそうになるまでにはいかないが、刀の刃が少しずつ欠け、七天七刀に当たると轟音を鳴らし、弾かれる。

本当に圧倒的だった。

だが、それを長続きさせるほど舞月は甘くない。

もとい、舞月。

一人は、茶色の髪に、茶色の瞳をした、後方のアックア、
もとい、ウィリアムⅡオルウェル。

そしてもう一人は、白髪に紅の瞳の、その全身から何かの微粒子を
噴出させており、

刀と刀の間に空間の歪みを生みだしている

学園都市第一位、もとい、一方通行の三人だった。

だが、すぐに一方通行はふらり、と倒れる。

かなり消耗していたであろうため、倒れただけだった。

だが、ウィリアムには傷はなく、舞月の頬が、浅く切られていた。

（今は…、覚醒しつつあるな…）

舞月が一瞬思考を挟み、ウィリアムと向き合う。

「…邪魔が入ったが、どうやら決着はつくようだな、アックア」

「そうだな、カオスよ」

二人はそう言って、薄く笑みを浮かべる。

だが、第三者が乱入した。

「残念だけど、君の計画を邪魔させてもらうよ?」

若い男の声、そちらの方向を振り向くと、紅の炎が男の右手に燃え盛っている。

赤髪で、頬にバーコードの刺青が入った、14、5程度の、身長2メートルの男。

必要悪の教会最年少の神父。

ステイル「マグヌスがそこに立っていた。

「神裂が無断で出て行った時には驚いたが…アレイスターに聞いたら納得がいく」

ステイルは、右手を頭上に抱える。

「灰は灰に、塵は塵に。

——今回はいつもとは違うよ。悪魔殺しの、紅十字」

左手には、青色の炎が轟々と燃え盛る。

そして、それが十字にクロスし、舞月に向かって飛んで行った。

第7章 第一話『神の右席』（後書き）

だんだん一方通行が未知の力を顕現させつつありますが…

これは、原作介入にはならない程度なので安心です。

一方通行「思いつきりアウトだろオ…」

安心安心…って、え？

何故一方通行がいた……

気のせいかな、うん。

今回はできるだけ早めに更新したつもりです。

このまえからスランプに突入し、

あまり書けなくなってしまったので、一話書き終えたら更新、という形をとっています。

いつの間にか400ポイントを超してしまっているこの小説。これも皆様のおかげです。どうもありがとうございます。

これを読んでいる皆様、お願いだから評価をお願いします…

第2話 「黒天邪刀」(前書き)

今回は少しオリジナル要素が入ります。

第2話 「黒天邪刀」

「ステイル！何故ここに來たのですか！！」

神裂がステイルに向かって言う。

だが、ステイルは神裂を一瞥すると、煙草の煙を吹く。

そして、澄ました顔で言う。

「インデックスの身に何かあったら、僕は神でさえ敵に回すよ？
それと同じ理由だ」

そう言つて、ステイルは目の前の敵に向き直る。

そこには、悪魔殺しの紅十字を、新しく取り出した刀で一閃した舞月がいた。

その背中の翼は、2メートル位に小さくなっている。

ただ、その翼が発する黒さは、更に増していた。

だが、彼の持っている刀は先ほどまでであった七星宝刀ではなく、

刃が漆黒の、刃渡り1メートル50センチはある長太刀だった。

鞘は朱の漆に彩られ、そこには日本刀とは思えない装飾。

翼の生えた人間と、銃と何かの紋章が付いていた。

「…悪魔殺しのルーンに、龍殺しのルーン、それに4次元元素を表すルーン…」

と、解釈していいんだろうね？

それにしても始めて見るよ、僕とは違った形のオリジナルのルーンは」

ステイルがため息交じりに言う。

本当に勝ち目がないような戦い、それがこれであった。

だが、勝機が少し見えていた。

なぜなら、いままで舞月は攻撃しても血は流れず、

赤い粒子だけが流れた。

だが今回は血が流れ、明らかに傷が付いている。

強さは今まで通りだが、やはり弱体化しているのは目に見えていた。

そして、ステイルの攻撃を回避せず、防御したことが一番解りやすかった。

回避しなかったのではなく、回避できなかった。

高速移動の中の、一瞬の隙。

そこが舞月の弱点だと、ステイルは理解した。

イノケンティウス
「魔女狩りの王！」

予め用意していた魔女狩りの王の炎の塊の状態を右手に浮かばせる。

それを、おもむろに舞月に投げつける。

舞月はそれを真っ直ぐ見据えると、刀を鞘に直し、居合の構えをする。

そして、その炎の塊が50センチほど近くまで来た瞬間、

ルーンのカードを斬り裂いた。

魔女狩りの王はルーンを大量に消費し、それによって作られた魔術だ。

ゴーレムよりも簡単で、それは炎のルーンだけで作れると思う人も多いが、

それだけではただの炎の塊だ。

その核に、人型を形成する為のルーンを入れておかなければ成功しない。

舞月はそれを一刀両断した。

だが、その瞬間、すでにステイルは先ほどの悪魔殺しの紅十字を炎剣を

両手に持ち、レイピアを扱う要領で舞月に突きを放っていた。

それを、舞月は抜いたままの死に体の状態から軸足をひねって体を回し、

それと同時に刀で炎剣を受け止める。

その刀は、おそらく摂氏3000度ほどの炎を受けても溶けることはなく、

受け止める、という動作を行うことができていた。

だが、今回になって、舞月が防御を行った。

いけるか？とスタイルが思った矢先、

舞月の蹴りが腹部に突き刺さった。

「カッ…は…」

スタイルの肺から強制的に酸素が吐き出される。

そしてそのまま2、3メートルほど吹き飛ばす。

「スタイル、お前の弱点はその身体能力の低さ。
さっさとそれを改善すればいいものを…」

舞月が呆れたように言葉を吐く。

そう、いつもいつも彼の最大の弱点はその身体能力の低さに出てい

た。

その身長を生かして、大ぶりで攻撃力を稼げることはよいが、基本的に彼は遠距離型である。なので、神裂のような近接型と組まなければ危ない。

その技量は確かに高いが、それでも神の右席のように、オールマイティでもなく、

かといって土御門のように一点を極めつくしたわけでもない。

ただ、そのルーン魔術と、炎系魔術が達人並なだけ、である。

基本的にはこれは問題ないが、これは舞月や、神の右席などの身体能力の高い人間、

そのほかにも、学園都市第七位の削板軍覇のような近接型になると、相手にしにくくなる。

そこさえ改善できれば、聖人より劣るが、普通の魔術師だと、

おそらくアニーゼ以上ローラ以下位の強さになるだろう。

「ぐッ……だからといって……」

スタイルがゆつくりと起き上がる。

「ここで倒れるわけにはいかないんだよ……！」

ステイルが立ち上がり、指をパチンと鳴らした。

瞬間、舞月の立っていた箇所から火柱が上がった。

轟！と音を立て、それは約10メートル程の高さまで昇る。

だが、キン！という風斬り音と共に、

火柱が真つ二つにされ、その中から舞月が現れた。

その右手には、先ほどの黒い刃の刀が収まっている。

「俺のこの刀の本質を見切れ。

それか、神裂だかアックアだかと交代しておけ。

——死ぬぞ」

声色に感情を一切混ぜずに、舞月がステイルに言い放った。

だが、

「嫌だね」

ステイルは真正面から拒否した。

「何故だ？」

舞月が不思議そうに聞く。

「ここでお前が出張ったとしても、何の得にもならない。

お前が一番嫌いな、あの上条当麻の役に立つだけだぞ？」

舞月が言う。

だが、その通りだった。

ここでステイルが何をしても、それは上条当麻の日常にしか役に立たない。

しかし、ステイルはそれを呆れたような顔で言う。

「その日常に、インデックスが入っているからここまで頑張っているんだよ」

その言葉に、舞月は目を見開いた。

確かに、ステイルはインデックスのためなんでも喜んでする男だと舞月は思っていた。

だが、それが上条当麻が絡むと、その気力が少しは減ると、自分では思っていた。

しかし、それが自分の相手に対する過小評価だと、舞月は気づいた。

「くくっ…解った。

ならば、この刀の真の本質を発生させようじゃないか」

そう言って、舞月は嬉しそうに手の中で刀を右回りに回転させる。

「黒の色は世界の原色」

ヒュン、と刀を振る。

瞬間、空間が一瞬斬り裂かれ、漆黒の空間が姿を見せる。

「紅は万物を表す色」

そしてそのまま刀を地面に突き刺す。

「色は属性を表し、強さに反映させる」

そのまま刀を回転させると、地面が抉り取られる。

「龍をも斬り裂き、魔を払う、邪神の刀」

そして、それを思いっきり空中に投げた。

それを、そのまま右手でパシッ、と受け止める。

「――黒天邪刀」

それが、その刀の名前だった。

第2話 「黒天邪刀」(後書き)

今回に出てきた技の紹介

・悪魔殺しの紅十字

説明

吸血殺しの紅十字の強化版。

吸血殺しの紅十字とは違い、最大出力で魔女狩りの王の炎の十字並の大きさになり、

炎剣としても扱える。

横薙ぎに振るつたら、炎が伸び、敵に必ず届く長さに自動調節される。

だが、現在はまだ試運転段階のため、自動ではなく手動で調節したりしなければいけない。

今回はいかがでしたか？

最近だんだんと感想が減ってきて少し悲しいです。

でも、毎回毎回PVなどが異常なまでに上がるので、それはそれで嬉しいですが。

今回は舞月vsスタイルが主体です。

舞月のスタイルに対するイメージなどが、描かれている回です。

本当に気軽に感想をください。

ちょっとした質問でも、キャラに対する疑問でも何でもよいので…どうかお願いします。

そういえば、以前、

『一方通行は拳銃の弾丸のベクトルは操作できない』という指摘を受けましたが、

これは返信にも書いたとおり、

”弾丸の周囲の気圧のベクトルを加速の二乗以上にさせ、音速を
気に超した、というわけです。

というより、今考えると銃の弾丸って普通に音速行っていましたねww
でも、いいんです。

小説補正とはこのことだ。

では、今回はこのあたりで…

また次回、会いましょう。

第3話 「魔術師対魔神」（前書き）

長らく更新遅れてすいません。

やはりスランプに突入してしまい、思うように書けない状況になり、気持ちだけが早く急ぎ（焦り）、勝手に新規小説を投稿するまでに至りました。

今度からは、小説を書く時間を1時間だとしたら30分ずつ最低でも取るようにします。

なので、これからも楽しんでいただけると本望です。

では、本編どうぞ。

第3話 「魔術師対魔神」

「唯閃！」

舞月が黒天邪刀をもった瞬間、神裂が舞月に唯閃を放つ。

それは、黒天邪刀の鞘で防がれる。

瞬間、アスカロンの背側にある鋸状の刃で舞月の右肩付近を斬りつけるが、

それは黒天邪刀の鞘でまた防御され、

黒天邪刀を持った拳で、思いつきり腹部に打撃を受ける。

アックアは、その巨体に見合うように防御力もある。

そのため、宙に放り投げられ、4メートル程飛んだ所で受け身を取って体勢を立て直す。

その際、アックアが踏み込んだところが少し陥没した。

（む？何か地下に貯め込まれているのか——？

おそらく、地下に貯めやすいもので、ここに必要なものとする

——！）

しかし、アックアの思考を遮るように、その余波のカマイタチ状の

真空の刃が襲いかかる。

それは、ステイルがルーンで結界を張って防ぐ。

しかし、三人とも薄々気付いていた。

——三人がかりでやったとしても、たった一人に有効打を与えられない。

本当に敵に回したくない敵とは、この男のような存在を言うのだろうか。

だが、敵に回った以上はどうやって倒すかを考える他ない。

（彼を倒すには——）

（カオスの弱点——）

（身体的弱体化を徹底して狙うしかない！！）

そして、一瞬、三人の視線が交わる。

それが合図となったように、三人が思い思いの行動を取り始めた。

まず、神裂が七閃を繰り出す。

「——？ヤケになったか！」

そう言って、舞月はまた、七閃を掴もうと手を伸ばし――

すぐに手を引つ込めた。

その代わり、他の鋼系を取る。

だが、それは七閃のワイヤーではなかった。

その瞬間、地雷が爆発したように火柱が上がる。

その炎がステイルの手の中に集まっていく。

どうやらその炎は予想外のものだったようで、ステイルは驚いた顔をしている。

「――だが、どこかの誰かさん！ありがとう！」

そう言い放つと、ステイルがルーンを数十枚取り出す。

「土御門の陰陽の初歩を教えてもらったが…ここで役立つとはね！」

そして、足で何かの紋章を描きだす。

「赤ノ式、炎ヲ増幅させ、五行ノカヲ引き出せ（赤の式、炎を増やし、力を絞り出せ！）――！」

そう唱えると、ステイルの手の上の炎が一気に燃え盛り、周りの鉄

が少し風化していく。

そのまま、その火の粉が飛び散り、ルーンに触れた瞬間、大量の炎が舞月に向かって突き進む。

それを、全て黒天邪刀で斬り捨てる。

が、その炎は一瞬で人の形を作った。

その瞬間、舞月の体が強張る。

一瞬、魔女狩りの王かと思ったのだ。

いくらなんでもあの炎には、舞月の今の体では耐えきれない。

なので、黒天邪刀で斬り裂こうと、右手を動かした。

だが、その前にその炎が動いた。

それが一瞬で猫を形作る。

とても精巧で、その掌ほどある瞳や、長いひげなどは漫画に出てきそうだった。

そのため、魔女狩りの王と思って動いた舞月は面喰って動きを止め

た。

（——！やばい！）

このままだとぶつかると思い、身を屈めようとして、

その猫が口をカパッと開いた。

「バカハミルニャー」

.....

.....

.....

.....

.....

は？

そう思った途端、その猫の向こうからステイルが突撃してきた。

その猫が一瞬で風化し、炎の一欠けらも残らずに消える。

だが、ステイルが止まるわけではない。

「ッ——！？」

そのまま、その右手にある炎を舞月の左肩目がけて投げる。

二人の距離は、たった2メートル。

そして、その炎の塊は縦2メートル、横3メートル。

直撃コースだった。

だが、舞月は身を屈めた体勢から居合のように刀を振る。

すると、その炎の塊が三つに切り分けられ、炎を斬り裂いた刃がステイルを斬り裂いた。

が、

その体はするりとすり抜ける。

そこで、舞月は思い出した。

彼の専門分野は炎。

そして、蜃気楼を発生させるのも炎。

過去に数回彼は炎で蜃気楼を生みだしている。

三沢塾の件しかり、オリアナ・トムソンの戦いしかり、

それは、人間に使われてきた。

それに完全に気付いた瞬間、神裂の唯閃が舞月の右足目掛けて放た

れた。

舞月が咄嗟に反射で右に飛ぶ。

が、そのまま左足の膝近くを掠めた。

瞬間、そこから大量に血が吹き出る。

ただそれだけで、小さな血の池ができそうだった。

そこに、アックアの追撃が入る。

彼は水のルーンを使い、地下に貯蔵されていたらしい水を一気に呼び出す。

「——断罪の主（the sir of judge）！！」

そう唱えると、その水がどこぞの天使の翼を形作り始める。

一瞬でアックアの背中から噴出したように水の翼ができると、

それが全て凍りつく。

「神の力——それは偶像の理論でも一部天使の力を拝借できるの
である」
ガブリエル テレスマ

アックアの背中には、巨大な氷の翼が現れていた。

それはちょうど——比喩表現ではなく——アックアの背中から生えていて、

御使落しの際に出てきた神の力が、アックアに憑いたような形となった。

それは、神々しくもあり、それでいてどこかで触れたことのあるような

“謎”を感じさせていた。

「——！どうやってそれを成功させた……」

舞月は驚いたように言う。

確かに、通常だと実現不可能であった。

生身の体に大量の天使の力を封じ込めると、一定量を超え、体が壊れてしまう。

そのため、『全英大陸』などの際でも、最大限天使の力を供給しているだけであり、

体の限界地を超えることはしていない。

そう考えると、『騎士派』の長をしている騎士団長ナイトリーダーは、その体に

大量の天使の力を封じ込めることができる人間ということになる。

その点では、サーシャ・クロイツェフはとても大きな“器”ということになる。

しかし、舞月の見解ではアックアはそこまで強い“器”というわけではなかった。

そのアックアが、口を開く。

「方法は簡単。ただ単に器に収まりきれない天使の力を詰め込み、

それを固体化させることで、処理できる分を増やしただけのことである」

ようは、パソコンでファイルなどを圧縮して、要領を軽くすることと同じ原理だ。

天使の力を“翼”という形で圧縮し、身体という名の“ハードウェア”に輸入しただけなのだ。

だが、それを実行するには恐ろしいほどの労力がある。

「まさか——！」

「そう、もとよりこれは何年も前からの研究の成果である！
その結晶がこの力だ！」

そう言い放つと、今までとは比べ物にならない速度で舞月にアックアが突進する。

その速度は、先ほどまでの舞月とほとんど同じであった。

そして、アスカロンを一気に舞月に叩きつける。

舞月はそれを黒天邪刀で受け止める。

ガァァン！という轟音が鳴り響いた。

お互いが鍔迫り合いになるほど、両者の力は拮抗していた。

そして、刀をお互い弾く。

そのままの勢いで、刀をぶつけあう。

その度に、その衝撃波が周りに飛ぶ。

それほどまでにその威力は高かった。

「やれやれ、まったく付いていけないね？」

ステイルが呆れたように神裂に言う。

「しかし、足止めが我らの役割だったのですから……」

と、神裂が言う。

まあ、そうなんだけどね。とステイルが言った。

瞬間、ステイルの横を何か黒い物が掠めた。

それは、羽。

見ると、舞月が空中に舞い上がり、黒い羽を連続で射出していた。

それを、アックアの翼が全て防御する。

そのまま、アックアがアスカロンの刀身を射出する。

弾きだされた刀身を舞月が黒天邪刀で弾く。

だが、舞月が気付いた時には目の前に水の塊が迫っていた。

その水の塊を、舞月が蹴り飛ばす。

水の塊が近くの壁に直撃し、その部分を抉り取る。

その瞬間、射出した刀身が急激に引き戻され、それが舞月の後頭部を直撃した。

「おうっ!?!」

幸い、刃の部分ではなかったものの今日出しているため頭がくらくらしている舞月。

そのままヨロヨロと地面に降り立つ。

「…案外効いたのである」

「当たり前じゃ!」

吐き捨てるように舞月が言う。

その瞳は涙目で、後頭部を先ほどから左手でさすっている。

そのまま、舞月が追撃を受けそうになり、それを黒天邪刀で弾くと、数メートルの距離を取り、

「この一撃で倒す」

舞月はそう断言した。

舞月は黒天邪刀を逆手に構え、パツ、と唐突に手を離れた。

当然、刀は自然落下し、地面に突き刺さる――

ことはなかった。

スツ、と自然に地面に吸い込まれる。

「何が……？」

神裂が不思議そうにその光景を見る。

ボゴツ、と音を立て、その地面が漆黒に染まる。

それは部屋中に広がり、ついには壁や天井まで侵食し始めた。

そして、部屋中が漆黒に染め上げられる。

「くっ……炎が無いと前が見えないだなんてね……」

ステイルの左手には青白い炎が灯っている。

全体が漆黒に染まったため、人口の光も、太陽の光も遮られている。そのため、新たな人口の光を作り出すのが早かったのだ。

舞月を見ると、地面に右手を置いている。

そして、ゆっくりと口を開いた。

「邪の力と魔の力。両者を我は所有する——」

舞月がそう唱えた瞬間、部屋中を覆い尽くしていた漆黒が舞月の右腕に集中する。

見る見るうちにその白かった右腕は漆黒に染め上げられ、

左手には何かの紋章が浮かび上がる。

「右は魔、左は邪。二人の王は我に宿らん——」

舞月が踏み出した。

地を蹴り、一方通行ではないが、一瞬の内にアックアの眼前まで迫る。

そして、その右拳でアックアにアッパーをかます。

どうやらアックアの重量では吹き飛ぶまではいかなかったが、少し空中に浮く。

そして、その胴体が舞月の眼前に來ると、思いつきり回し蹴りをアツクアの胴体の

肋の方に入れた。

すると、人形を蹴り飛ばしたかのように一気に壁にアツクアの体が突き刺さる。

ドオン！と轟音が鳴り響く。

壁が瓦礫へと成り果て、ガラガラと音を立てながら地面に落ちる。

「今の俺はお前とは比べ物にならんほど天使の力を貯め込んでいる。身体能力が違いすぎる、というのが事実だな。

一方通行でもいればまだしも——」

そこまで舞月が言ったところで、人影が二つ立ち上がった。

一つはアツクアの影だろう。

彼はまがいなりにも神の右席の？2の実力を持っていた男だ。

ちよつとやそつとで倒れるような男ではないということは、舞月は良く知っていた。

そのため、一つはしっかりと敵として認識することができた。

だが、二つ目の影は何だ？

大きさは160数センチ、体格もそれほど良くはない。

どちらかといえば病弱そうなイメージがある体格。

しかし、それとは裏腹に叩きつけられる殺気。

それは、並大抵の人間だったら倒れる、という確信を舞月は持てた。

二つ目の影がゆっくりと近づいてくる。

ざっ、ざっ、ざっ、ざっ、と、ゆっくり音を鳴らしつつ迫ってくる影。

そして、そこに立っていたのは――

「一方通行……？」

その影が、紅の瞳をこちらに向ける。

「…舞月イ……」

一方通行が薄い笑みを浮かべる。

「舞月イイいいい！！！」

その咆哮と共に、一方通行の翼から漆黒の翼が噴出した。

もともと数か所抉り取られていた壁が一瞬で抉り取られ、

一気に二階の屋根が見える所まで削られる。

その方向が止む。

瞬間、原子爆弾が爆発した後の余波のように暴風が吹き荒れた。

おそらく秒速50メートルの風。

これを受けても上条たちが生きていられるのは、おそらくアックアのお陰だろう。

だが、

——あの一瞬でそこまでの意思疎通をしたか？

おそらく答えはNOだろう。

今の一方通行はまともに話せる状況ではない。

だが、アックアは人の感情に機敏な人間だ。

どこぞのツンツン頭のように、恋愛感情などにも敏感である。

そのためだろう。言わずとも一方通行の言いたいことがわかったのだろう。

「だが、これは厄介だな……！」

舞月が本心から楽しんでいる笑みを浮かべる。

4対1、そのうち2人は天使クラスの強さ。

そして、そのうち一人は殺す気で来ている。

——やはり、最後にこういう奴らと戦えて嬉しい。

それが、舞月の感情だった。

「良いぜ…やろうじゃないか！超能力者！！」

「舞月イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイ！！」

ここに、天使と超能力者の決闘が始まる。

第3話 「魔術師対魔神」（後書き）

久々にまともな内容の前書きを書いたような気がします、舞月です。

今回はいつもよりボリュームが大きく、個人としてはスランプ中だったのでかなり苦勞しました。

前書きでも書きましたように…

本当に長らくお待たせしましてすいませんでした（土下座）

これを書き終えてからアクセス数など更新します。

予想ではかなりの量になっていると思います…

でも、一応いいんです。読んでくれる人がいますから。

でもなあ…感想ないとやはりやる気がそこまで大きく出ねーや（汗）

最近人気が落ちたのかどうかは知りませんが感想がとてもなく…

個人的にはもっとほしいし、評価が無くても感想がほしいです。

ちょっとしたことでもいいから、感想お願いできますでしょうか？

どうかお願いします。

現在、学校が体育会シーズンに入り、家に帰りつくのが少し遅くなってきました。

そのせいでピアノや習字の両立もきつくなり、更には小説も時間が…

こういうのをダメ人間というのでしょうか？

まあ、今回は愚痴はこのくらいにさせていただきます。

皆さんに質問ですが、皆さんはどうやって小説を書いていますか？

俺はwordで書いています。バージョンは2007。

まあ、知り合いの作者様、——名前は高島雄様なのですが——
もワードで書いているらしく…

あれ？違う？違ったっけ？よく覚えてないから間違えていたらすいません。

個人的には、ワードは間違った表現はラインが引かれるのでそれで

活用しています。

答えてくださるとうれしいです。

では、また次回。

たぶん次回の更新は5月中にできる…かな？

第4話 「狂ったのは黒か白か」(前書き)

今回はかなり短めの有る意味行間みたいな回です。

第4話 「狂ったのは黒か白か」

4

一方通行が右手を舞月にかざすと、近くにあった瓦礫が宙に一瞬で浮き、

どっぴうベクトルを操作しているのかは知らないが、

自動で瓦礫が舞月に突っ込んでいった。
オート

それを、舞月が跳躍し、回避する。

が、それでも一方通行は何の動きもしていないのに、

勝手に追尾し、その瓦礫が近くの瓦礫に掠めると、その瓦礫までが飛んでくる。

このままずっと逃げ続けたらジリ貧になってしまうことは火を見るよりも明らかだった。

「チィッ！」

舞月は踵を返すと、自分を追尾してきた瓦礫を一つ蹴り飛ばす。

それが弾丸のような速度で一方通行に突き進む。

一方通行は飛んできた瓦礫を左手で受け止めた瞬間、その瓦礫が碎け散る。

舞月はそれを見てもどんどん飛んできた瓦礫を蹴り飛ばしてくる。

そのため、一方通行は何を思ったか、今まで受け止めていた左手を戻し、

その翼で一気に破壊した。

音もなく碎け散った瓦礫は、小さな部品パーツになって、新たな瓦礫の山を形成する。

一方通行はそれを一瞥すると、右手を瓦礫の山にかざすと、

その瓦礫の一つ一つが宙に浮かび、一瞬で先端が刃のように研ぎ澄

まされた。

それをそのまま連続で射出する。

それを舞月は先ほどやったように、羽弾を連続で打ち出す。

羽弾と瓦礫がお互いを削りあい、二つとも塵と化す。

そして、次の瞬間には一方通行と舞月は同時に拳をぶつけ、

クロスカウンターように顔面に拳が直撃する。

お互いの体が少し仰け反る。

そして、そのまま格闘を始める。

ハイキック、フック、ニーキック、ローキック、アッパー

全てがぶつかりあい、全てが相殺される。

そして、そのままお互い拳を握り、ストレートを同時に繰り出す。

一方通行の拳を舞月が回避し、同じように一方通行も舞月の拳を回避する。

だが、その一瞬の隙を舞月は見逃さなかった。

回転した遠心力そのままに裏拳を一方通行の顔面めがけて打ち込む。

それが、一方通行の顔面を捕らえそうになり――

横から舞月の胴体が棍棒メイヌで横殴りにされた。

そのまま横っ飛びに吹き飛び、ちょうど神裂が受け止める。

反射的に掴んだため、我に帰った時には神裂は自分が何をしたか気付いていたが、

舞月の体に触れて、神裂は初めて分かったことがあった。

――とても儚げで、いつ消えるか解らない、というような心配を

抱かせるほど軽かった。

今まで一度も舞月を受け止めたことが無い。

それは、舞月が万全の状態であってこそ、だ。

しかし、先ほど御使落し並の魔術を使用し、そのまま高威力の攻撃や魔術を多用している。

だが、この軽さは異常だった。

——いつ死んでもおかしくない状況、だった。

「舞月…もうやめてください……！」

神裂が舞月にいう。

が、舞月は一言ありがとう、というと、神裂の手から離れる。

「今更やめる訳にはいかない。そのための協力…彼女たちの協力が無駄になる……！」

その一言と共に、舞月の背中の翼が一瞬で2、30メートル程の大きさになった。

そして、その羽を連続で射出する。

羽は一直線に一方通行に飛んで行く。

それを一方通行は正体不明のベクトルを操ったのか、

右手を、羽虫を薙ぎ払うように動かしただけで羽が全て四方八方に飛んで行く。

だが、その瞬間、舞月が一方通行の眼前に迫っていた。

「一発で目え覚ませよ！」

という台詞と共に、渾身のストレートを打ち込んだ。

すると、一方通行は錐もみしながら飛んで行く。

そして、ドサツ、と地に落ちた。

息を切らせながら、舞月が一方通行を見る。

その一方通行は、死んだように動かない。

「――死んだ？」

馬鹿な。

そう舞月が思った途端、一方通行の右手に白い粒子が集中し始めた。

それが、だんだんと何かの形を形作っていく。

そして、出来上がったのはいつも一方通行が使っている白色の拳銃だった。

上半身を起こし、銃を構え、撃つ。

一方通行がこの動作をするのにそう時間はかからなかった。

乾いた発砲音と共に、肉に金属がめり込む音が鳴った。

体内から肉が抉り取られ、骨まで到達するのではないかという感触がする。

そのまま発砲音は二、三回続く。

今度は、舞月の右腕と左足に弾丸が突き刺さった。

「――！！！」

声にならない悲鳴を上げる。人間の体では、これほどの痛みが走るのか、と舞月は思った。

「…ア？もう終わりですってかア？いくら何でも速すぎンじゃねエのか？

もっと俺を楽しませろよオ！お前だろオ？俺にこの力をくれたのはよオ！」

一方通行は、楽しむように、哀れむように、喜ぶように、怒るように言う。

「AIM拡散力場のベクトルを粒子状に変換し、演算に演算を重ねることで俺が記憶した
全ての物質を再現することができる、能力を解放してくれたのはな
ア！！」

これが、一方通行の本当の能力だった。

アレイスターの計画に必要不可欠で、そして、幾重にも張り巡らされた条件を

全て満たした（クリアした）上で、初めて使用可能となる能力。

『世界の理をも捻じ曲げる能力』

黒翼を出し、さらにミサカネットワークの代理演算＋一方通行の演算があり、

更に、大規模な魔術が発動されて、初めて使用できる能力である。

だが、その代償は大きく、使用中の記憶が曖昧になるという欠点がある。

「か…かか…、」

舞月が渴いた笑い声を上げる。

「くくく、かか、かかかかかかかかかかあああああああ
！」

狂ったように笑い、いつもの紅の粒子ではなく、黒色の粒子が舞月の右手に集中する。

そして、形作ったのは一方通行と対になるような、真っ黒な拳銃だった。

おそらく、弾丸は殺傷力満点の特性弾。

そして、弾数は舞月の魔力が尽きるまで永遠に有る。

「俺の本当の武器で相手をしてやるよ！一方通行、アックアアアアアアアアアアアア！」

舞月の台詞と共に、三人の男が同時に動いた。

第4話 「狂ったのは黒か白か」(後書き)

二日ぶりですね、皆さん。

即席で作ったのでとても中身が薄いです。

このことに關しては、本当に申し訳ありません(土下座)

最近、他の作者様の小説を読んで、「何でこんなに上手いんだろう？」と思うことが多くなりました。

おそらく、自分の人生経験のなさなのでしょうが、上手い言葉が見つかりません。

最近、読書量も減ってきたので…

このことはどうにかしたいと日々思っています。

さて、今回になるともう29万PVに入っており、

毎回毎回普通に3000人の皆様はアクセスしてくださいます。

ここまで飽きもせず読んでくださる皆様はとてもありがたい。

そして、これからも読んでやるよ、という皆様、本当に感謝しきれません。

これからもよろしく願います。 m (_ _) m

では、また次回。

第5話「戦いの渦中」(前書き)

今回は前回の予告通りにいかずにすいません…
一方通行vs舞月といいながらも、
それにアックアまで加わっています…

第5話「戦いの渦中」

アックアはその氷の翼を地面に突き刺し、棒高跳びのように体を前に押し出す。

——その際、メイスをアスカロンの刃で真つ二つに切り裂き——
そのまま両手に構えたアスカロンを舞月に振り下ろす。
アスカロンが放っていた光の色は紫——悪竜の骨格を切断する為にある

背側に取り付けられた巨大な鋸。

それが舞月の左肩を切断しようと上から下に振り下ろされる。

だが、肩が斬り裂かれることはなく、舞月が作り出した、
上から下まで黒色の細長い刀に防がれていた。

ギシギシ、と音が鳴る。

——と、同時に発砲音が連続する。

舞月はアックアのアスカロンを弾き飛ばすと、すぐさまその場を離れる。

次の瞬間、舞月のいた場所を銃弾が十発通り抜けた。

「チー！武器変更……！」

その言葉と共に、拳銃が粒子に代わると次の瞬間には地对空ミサイルランチャーに変貌し、一方通行の右手が引き金にかけられる。

ミサイルが瞬時に数発同時に打ち込まれる。

それを舞月は拳銃の弾丸で迎撃する。

拳銃から放たれた弾丸はミサイルの爆薬に直撃し、お互いが破壊される。

だが、それは囧でしかなかった。

一方通行の手に握られているのは、パンツァーファウスト。それが、舞月に照準をかけられていた。

一方通行の右手が引き金を引く。

爆発音とともに、粉塵が舞いあがる。

——やったか？

一方通行がそう思った瞬間、粉塵を翼で羽ばたき、周囲の視界が一気に開ける。

一秒もたたずに少々煤が服についた舞月が銃を乱射した。

それが一方通行とアックアに向かって突き進む。

アックアは聖人の身体能力の故か、条件反射で翼を動かしそれを防御する。

一方通行は、それを背中の中の翼を一振りすると、銃弾を消し去り、そのまま舞月の体を横薙ぎに振り払う。

舞月はそれを急降下することで避けるが、その隙にアックアが舞月に接近する。

アックアが近づくと同時に一方通行は持っている武器を銃剣にし、逆手に握るとそのまま舞月に接近する。

それを見て、舞月は黒い銃を黒い銃剣に入れ替え、

二人を同時に相手するように逆手に構える。

一方通行は慣れない手つきで銃剣を肩口を狙って斬りつける。

それを黒い銃剣が阻み、舞月の蹴りが一方通行の腹部に叩き込まれる。

だが、その時にはアックアはがら空きになった右側に拳を叩きこむ。舞月の体が左側に少し傾いた。

だが、そのままの体勢で回転し、その右足をアックアの顔面めがけ

て打ち込む。

それをアックアは顔を咄嗟に下げることにより紙一重で回避する。

そして、アックアはアスカロンを持っていない方の手で

拳を作り、舞月に向かって拳を叩きこむ。

思いのほか拳が舞月の腹部にクリーンヒットした。

口の中に溜まった赤黒い液体を吐きだし、舞月は後ろに数メートル飛ばされる。

そして、その銃剣を一回宙に放り投げるとそれが銃剣付きの銃に早変わりする。

それをアックアめがけて突くが、刀で弾かれる。

一方通行はそれと同時に、銃剣をガトリングに変え、舞月に打ち込む。

それを舞月は黒い刀で弾く。

超人的なことをしているが、これをしなければ蜂の巣になっていた。

舞月は最良の選択をして、それを実行している。

そして、それに対抗する策を二人は考え、

シンクロしているかのような息ぴったりのタイミングで実行している。

そして、空中だというのに、それを地上のように戦うこの男たちは、やはり普通の人間ではないということがひしひしとステイル達には伝わってくる。

だが、見方を変えればち（・）よ（・）っ（・）と（・）普通の（・）人間よ（・）り（・）優れ（・）て（・）い（・）る（・）だ（・）け（・）だということでもある。

だが、——かなり厚さが違うが——数枚舞月たちが上手なだけであった。

そして、弱点もしっかり存在する。

たとえば一方通行。

彼は今では脳に負傷を負い、^{シスターズ}妹達の代理演算が無ければ能力が使用できない状況にある。

更に、その代理演算もチョーカー型電極のバッテリーが切れたら使用不可能になる。

そして、『グループ』に入ってから『グループ』の技術部がバッテリーに改造を施し、

使用時間が一五分から三〇分に増えたこともあるが、駒場利徳の『^{チャフシード}攪乱の羽』のように、

電波障害を引き起こされたり、地下のようなミサカネットワークの電波が届かない場所だと代理演算が使用できない。

唯一それを無視しているのが、今のような噴出する黒い翼を使用している状態である。

現在は代理演算の大本のチョーカー型電極がどういうわけか一時停止しているため、

まともな言語を一時話せなかったりもしたがそれが治って、普通に喋ることができるようになっている。

が、それが無ければまともな言語は話せない状況になる。圧倒的な力の代償は、かなり大きい物なのだ。

それに対しアックアは現在はアスカロンを使い、神の右席時代まどとはいかないが、かなりの実力を有している。

しかしながら、攻撃用途の大半がアスカロンに偏ってしまっているため、

今回のような『断罪の王 (the sir of Judge)』を使用する戦い方はそうそうできなくなる。

それに、おそらくこれは一度使用すると長時間魔力を補充しなければ使えなくなる、

簡易霊装の様なものでもあるため、基本的にはアスカロン重視の戦い方になる。

そして、舞月。

彼まで弱点を持ち合わせている。

彼は現在、三体ではなく、神の如き者と光を掲げる者の二体ミカエル
ルシフェルを宿しており、

さらに魔力消費の激しい『御使返し（エンゼルバック）』を使用し、神話級のオリジナルの術式を多用している。

ケルト神話系ならまだしも、中国神話や、日本神話なども再現しているため、

あり得る筈の無い世界を作り出すという、荒業を使用している。

そのため、魔力の消費が著しく、並の魔術師ならとくに

魔力消費量のコストオーバーで倒れているだろう。

それでも倒れないのは、魔神という特性故か、それとも生まれながらにして宿っている

紅の翼のおかげだろうか。

あの翼は天使の力を超自然から引き出し、自動で翼の形に圧縮すること、

今の漆黒の翼のように扱えるのである。

なので、用途はほとんど同じということになる。

だが、唯一違うのは発動方法。

紅の翼は威力は劣るが、詠唱や演算無しで発動することができる。

しかし、漆黒の翼は魔力を注ぎ込み、その際、ルシフェルとミカエルの魔力を混合し、

更に超自然の魔力を混合させることで発動可能となる。

通常なら、アックアのように、『最低十年その言葉に魔力を練り込んでおく——』

などのスイッチ式にしなければいけない程の準備が必要なので、確かに規格外の魔神、ということが舞月の強みでもある。

舞月は、やろうと思えば聖^{セント}ジョージの聖域や、グレゴリオの聖歌隊などの

大掛かりな魔術を一人でこなす人間だ（人間に当てはめていいのかわからないが）。

やはり、この三人を例に挙げてても、どんな人間でも弱点は存在している。

なので、やはりその弱点を突けば威力は倍増する――

「ハッ！」

舞月が刀に魔力を込め、アックアに振り下ろす。

対してアックアは、それを紙一重で回避した。

それだけで舞月の体が前方向に重心が動いてしまう。

そのため体勢を崩し、完全な隙が生まれてしまう。

瞬間、アックアは舞月のがら空きの背中にアスカロンの柄を叩き込んだ。

言うまでもなく、アスカロンの柄には刃が付いている。

それが舞月の背中に食い込み、背骨に突き当たる。

ゴリッ、という音が周囲にも響いた。

「ガッ、ああああアアア！」

痛みに耐えきれなかったのか舞月が声を上げる。

だが、その瞬間舞月の背中からもう一對の翼が噴出した。

紅の翼が一気に飛び出し、それがアックアの体を薙ぎ払う。

その翼は蛇のようにうねり、アックアの背中の肉を削（、）っ（、）た（、）。

削られた部分からは、白い骨やその部分から血を噴き出している血

管が見える。

アックアは声もあげずにそのまま地面に落ちる。

そして、それを見て、舞月は笑っていた。

邪悪で、冷酷で、残酷で、嘲るような笑いを浮かべていた。

あの、一方通行でさえも戦慄が走った。

背中から黒と紅の二対の翼を出し、一つは穏やかに、一つは暴れまわっていて、

そして、その真っ黒な無機質な瞳——いや、相手をどういたぶるかを考えているだけの瞳を見て、一方通行は不覚にも木原数多を思い出した。

——降りしきる雨の中、絶対に避けきれない暴力を振るった最もイヤなクズ野郎。

その所為で、一人の少女の未来が奪われかけた。

その所為で、一人の少年が闇にまた堕ちた。

その木原数多が、目の前にいるような感覚。

妹達の次に敵に回したくない相手。

しかも、今の自分なら殺すことも躊躇わないだろう。

だが、目の前の男はもっと染まっていた。

真っ黒に。

絶対に抜け出せない真っ黒に。

「……どうやってミンチにされてーか三分で答えなア！」

今なら魔女狩りの拷問をセットで味わってみる特典付きだぜ一方通行ア！」

一方通行はそれを見て、心のどこかで安堵した。

——ああ、これなら殺せる。

躊躇うことなく殺し、打ち止めを助けるために動ける。

そして、彼は返答する。

「ソレはコッチのセリフだぜエ？ 今ならスクラップにして、更にサービスで地中深くまで埋めてやるよオ！ 舞月イ？」

そうして、黒と白の狂気の交わりが始まる。

第5話「戦いの渦中」（後書き）

—— 本当にすいませんでしたッ！（土下座
すいません、本当に…

今回は予告通りにはいかずに…

ですが、一応これからも続くのでよろしくです。

なんと、なんと今回！総合ポイントが500になりました！
皆様のおかげです。これからもよろしくお願いします！

そして…そして次回こそ一方通行vs舞月を！

第6話「黒と白の戦い」決着編(?) (前書き)

今回で、舞月無双は終了です。

みづきん、お疲れ様！

という感じの人は、まだ続きますよw

第6話「黒と白の戦い」決着編(?)」

6

二人は一步も動いていない。

しかし、周りの環境は変わっていた。

一方通行の黒い噴出する翼が紅い噴出する翼とぶつかりあい、舞月の有機物のような黒い翼から羽弾が撃たれると、一方通行は何かを薙ぎ払うように

手を右から左へ振りまわす。

すると正体不明の何かが羽弾を撃ち落としていく。

ガガガガガ！と翼同士がぶつかりあう。

それだけで強力な衝撃波が周囲に飛び散る。

だが、二人は気にも留めない。

高速移動の合図のように、二人が足に力をためる。

ガッ！という音と共に二人の間が一瞬にして詰められた。

二人は拳を握り、一発お互い殴りあう。

舞月は腹部を、一方通行は舞月の顔面を。

その瞬間、一方通行はそのまま舞月の耳へと手を伸ばす。

何のために、ということを生舞月は知覚することなく――

ブチリ、と一方通行に耳を引きちぎられた。

「ゲお、アアアアア！？」

もともと耳があった場所からは、血飛沫が飛び散る。

一方通行はその耳をてきとうに投げ捨てると、そのまま舞月の即答

部へと手を伸ばす。

そのまま、木原数多にやったように、髪を引き千切るつもりだ。

一方通行の意図を察した舞月は、それを顔を横に振ることで回避し、

もう一つの手で一方通行の顔面を殴って距離を取る。

そして、一方通行は手に武器を取った。

ショットガンだった。

あの木原数多との戦いにも使用したあのショットガンだ。

照準を舞月に合わせ、一方通行は銃口を引いた。

実は、ショットガンというものは至近距離より遠距離の方が殺傷力が高い。

ショットガンというのは、一発で一気に数発威力の高い弾丸を撃ち込む。

しかし、ショットガンと分類されるものは主に二つある。

一度に数十発撃つものと、一度に二発の威力の高い弾丸を撃ち込むものだ。

いま、一方通行が持っているのは外観は木原数多との戦闘にも使ったショットガンだが、

中身は一度に数十発つタイプのショットガンだ。

ということは、至近距離で打つと、一点に集中しすぎて威力が減る。しかし、遠距離から打つと密度の高い簡易性の弾幕を作り出すようなものである。

一方通行の狙いはそこだった。

舞月はそんなことも知らずに、二つの弾丸を避けるように動こうとした。

だが、その瞬間密度の高い弾丸が舞月に向かって飛んだ。

「何イツ!？」

その瞬間、舞月は翼をはためかせ、一方通行の上空へ飛んだ。そして、そのまま舞月は一方通行に向かって紅の翼を横薙ぎに振るう。

一方通行はそれを同じく黒い翼で受け止める。それ続けていくうちに、舞月の黒い翼が薄く透明になっていた。

「ン……? 時間切れかア…… まあ、翼に最大出力出セルからいいんだが……」

そう言いながら、どうやら意図的に翼を消す舞月。

その瞬間、噴射する紅の翼が一気に増大した。

大体3、4メートルだったのが軽く10メートルを超す大きさになる。

そして、二人がそのまま向き直る。

舞月は翼の推進力を使って、一方通行は脚力のベクトルを操って、お互いゼロ距離まで近づいた。

瞬間、爆発が起きた。

轟!と暴風が吹き荒れる。

二人が地面に降り立つと、それだけで小規模のクレーターができた。それほど強大な質量が掛かっているのだろう。

そのまま二人は拳を握る。

一方通行は、その筋肉が余りついていない腕を舞月に向けて構え、シャドーボクシングのように拳を打ち出した。

「ッ!」

舞月が顔の前に腕をクロスさせ防御の体勢に入る。

そこにドゴツ！と見えない何かがぶつかり、その衝撃で舞月が５メートル程後方に押される。

「…今の八削板のあの技か……？」

そう。彼が自分で「すごいパンチ」と名付けていた念動砲弾（仮）である。

専門家によると、不安定な念動力で作り出した力場に殴る程度の衝撃を与えるだけで、

「すごいパンチ」のような攻撃は使うことはできないという。だからこそ、彼は謎が多い。

踏み込み、相手を掴み、叩きつけるという作業を音速の三倍でやってのけ、

更にはアイスピックや銃弾を心臓に受けても「痛い」程度で済むその防御力。

世界最高峰の原石とはよく言ったものである。

だが、一方通行は舞月の予想とは違うことを答える。

いや、答えたというべきだろうか。

一言、短く、何かを呟いた。

「？」

舞月はそれを聞き取ることができなかった。

だが、次の瞬間、暴風が吹き荒れた。

竜巻が一瞬で生成され、舞月に進む。

それを舞月が避けることなく翼で破壊した――

途端に、竜巻のあった場所から無数の氷の刃が舞月に向かって銃弾

並みの速度で飛んだ。

反応する間もなく、舞月の体が串刺しになる。

「まア、答えるよりも喰らえ、つてかア？」

顔や心臓は外してあるが、両手両足、更には胴体の肺にも突き刺さっているだろう。

血の一滴も流すことなく、舞月は後ろに倒れる。

それを見て一方通行は安心したように座り込んだ。

その隣には、上（、（条（、（当（、（麻（、（が（、（寝（、（て（、（い（、（る（、（は（、（ず（、（の（、（場（、（所（、（）。

「行つて来い、上条」

その一言で、一方通行の後ろから、上条当麻が舞月に向かって走り出した。

「うおおおおおおおおおおおお！」

「…上条当麻……！」

向かってくる敵（上条当麻）を見て、舞月が体をゆっくりと起き上がる。

そして、立ち上がった。

紅の翼で飛ばたくと風が吹き、舞月の体に刺さっていた氷の刃が全て吹き飛んだ。

そして、格闘の構えを取る。

二人の距離はもう一〇メートルもなかった。

そんな中、舞月が走りだす。

その速度は以上で、一瞬で間を二、三メートルまで縮める。

二人が力を溜め、渾身の力で拳を突き出す。

上条当麻の右手と、舞月の右手が交差する。

人が人を殴る音と、何かが砕け散る音が同時に鳴る。

舞月はそのまま後ろにバウンドしながら二、三メートル飛ばされた。

第6話「黒と白の戦い」決着編(?) (後書き)

上条床から湧いて出た W
W
W
W
W
W
W
W
W
W
W

この件に関しては、次回書きます。

現在、お気に入り登録件数が194人…これからも増えるといいな
あ（評価も）

ここで暴露しますが、この小説の一話一話は大体2000文字です。一回、パソの前に座るとそれくらいは一度に書くことが多いので、そんな感じになっています。

それだから内容が薄いと言われるのでしょうかね（笑）

個人的にも前からこれは薄いと思っています。

それでも、できるだけ早くこれは終わらせておく予定だったので、もうそろそろ終わる、って感じです。

これが完結後、一応次回作URLを載せることにしますので…。

では、次回を期待していただくと嬉しく思います。

それではまた。

一人の男と、一人の少年の決着は、本当についたのか――

最終話「戦いの終わり」(前書き)

次回で完結…かな？

最終話「戦いの終わり」

7

「はあ…はあ…やつ…た…？」

上条が舞月を心配そうな目で見る。

だが、そんな舞月が、動いた。

先ほどまで、舞月は死人のようにピクリとも動かなかった。

だが、今は、手について起き上がろうとしている。

「くっ……！」

ゴボツ、という音と同時に、舞月の口から大量の赤黒い液体が零れる。

かなり無理をしているのだろう。

先ほどまで周囲を荒らしていたあの紅の翼までが舞月の背中から消えていた。

だが、脅威であることには変わりはない。

彼は以前、素手で土御門を倒している。

それほどまでに、彼の拳は鍛え上げられていた。

だが。

だが、上条当麻は何かなるのではないかと思っていた。

彼の体は、致命傷まで受けて、いつ倒れるか解らないほどの存在だ。こう言っただけだが、上条当麻はひょっとしたら、良い線行くのではないか、と思っていた。

「いつ…起きた……？」

舞月がその体を起こし、そしてこの状態になっても恐怖を感じさせるほどの瞳で、上条を見る。

上条はその瞳は真っ直ぐ見て、一瞬恐怖を感じた。

だが、ここで恐怖を感じてはいつまでたっても負けてしまう、
と思い上条は口を開く。

「…大体、あんな大きな音で戦闘起こしておいて、起きないバカはいねえよ」

上条の一言に続き、

「そうだな、俺でも普通に起きるレベルだぜ？」

「！……浜面、仕上……」

浜面が舞月の後ろから、あの超能力者を倒したレディースの拳銃を右手に握っていた。

三対一。

絶体絶命の状況だな、と舞月は思う。

それでも、彼は動く。

一歩踏み出すと、体と同化していた邪刀が右腕を突き破り、飛び出す。

これで、右腕は使い物にならなくなった。

だが、心配はなかった。

必ず治せる、というどこか、確証の無い安堵感があつたからだ。

「上条当麻…ここで俺は止まるわけにはいかない…！」

舞月が上条を見て、言う。

上条は解っていた。

生まれながらにして、化け物のような力を手に入れた舞月が、普通の人間に戻りたがる気持ち。

だが、

「やだね」

ここまでやられておいて、拳一撃で止まるわけにはいかなかった。インデックスを攫われ、打ち止めも攫われ、浜面の彼女（？）も攫われている。

少なくとも、もう一撃入れないと気が済まない。

先ほどの一撃で、もう既に彼の体は立ち上がることもできないような状況になっている。

それでも、上条は容赦する気はさらさら無かった。

「とうま！もうやめて！」

突如、そんな声が上条の耳に聞こえてきた。

その音源は奥の扉。

そこから現れたのは無傷のインデックスだった。

彼女はそのまま舞月の前に立ち、彼を庇うように上条に立ちふさがる。

「禁書目録…！何故出てきた！」

舞月がインデックスに向かって焦りと苛立ちを交えた表情で言う。

「そりゃあ、アナタがそんなにボロボロなら私たちは出てくるよ！」

インデックスの一言で、舞月が奥の扉を見る。

そこには、やはり無傷の打ち止めと滝壺がいた。

「滝壺!？」

「打ち止め？」

不思議そうな眼で二人は自分の守るべき人を見る。

「私たちだつて一応人間なんだから……ってミサカはミサカは舞月の頭の悪さに絶句してみたり」

「同感する。あなたは人を頼るべき」

二人が舞月にそう言う。

更に、第三者であつた筈の神裂までが、

「そうですよ！あなたはもう少し人を頼るということを知りなさい
！」

とまで言い、舞月は呆けた顔になる。

ステイルはそれを呆れた目で見て、煙草を取り出し吸い始める。

もう終わりだということを悟っているようだった。

だが、舞月はまだ終わったようには思っていなかった。

「せめて、決着だけはつけさせろ」

そう言つて、舞月はインデックスの前に出た。

「駄目です！あなたの体は——」

と、神裂が止めようとするが、

「オイ、女ア…邪魔したら殺すぞ」

一方通行が悪魔のような声で神裂に言う。

神裂は先ほどの戦いをすべて見ている。

なので、ある種の恐怖にもなっている一方通行の言葉に、引き下が
るしかなかった。

舞月はその光景を見て、少し笑った。

「正真正銘、最後の一撃だ」

「おっ」

そう言つて、二人は拳を構える。

舞月は左、上条は右。

「おおおおおおおおおおおっ！！」

二人の拳が交差する。

そして、思いつきり人を殴り飛ばす音が鳴る。

「…負けだよ、上条当麻」

そう言って、舞月は地に伏した。

最終話「戦いの終わり」（後書き）

後半部分がg d g d無きがするのは俺だけではないはず。

では、今回は次回にあとがきを大量に残しておくために、宣伝コーナーへと移行させてもらいます。

俺のオリジナル小説

「道並町魔術物語」

現在も進行している、俺のオリジナル小説です。

現在第3話まで更新しています

URL: <http://ncode.syosetu.com/n7016k/>

ちなみにネタ帳(?)はこっち

URL: <http://ncode.syosetu.com/n1600l/>

次の話に次回作URLを掲載させていただきます。

終章「新たな日常」そして過去に遡る」

「知らない天井だ」

とある病院の個室の、ベッドの上に寝ていた舞月はそう呟いた。

あれからどれほど経ったのだろう。

一時間？一日？一週間？謎だ。

そして、ここがどこかも解らない。

おそらく、自分は冥土返しにいる病院へ搬送されているのだろう。
そして、おそらく学校にいていた残留思念体は3日程前に消えているだろう。

丁度、インデックスに協力してもらったあたりか。

「そうだ…計画…」

思い出したように、舞月は試しに自分の魔力を探る。
やはり、成功ではなかった。

光を掲げる者と神の如き者が残っている。

かろうじて、神の火は事なきを得たが、やはり後半のあの三人の妨害が手痛かった。

おそらく、また以前のように戻るには1カ月以上かかるだろう。

それ位、魔力を消費し、さらに重傷まで負ったのだ。

ふと、扉があく音がした。

「…俺もあなたの患者になってしまいましたね」

舞月がもうやってしまったと言わんばかりの顔で言う。

「ふむ、確かに君は僕の患者だ。おそらくアレイスターと並ぶほどの重要人物の、ね」

通路から現れたのは、白衣をはおった、一見貫録も全くないカエル顔の医者だった。

しかし、その正体は学園都市の闇と光を作り上げた張本人とも言えなくもない。

表向きは死人でない限り一〇〇%の確率で患者を助ける最高の医者“冥土返し”。

しかし、その裏側は裏社会に生きる人間や、超重要人物の恩人でもある。

そして、お互いとても、とても深い闇を知る者同士、以前から少し気が合っていて、話までしていた。

「俺は、どうなるんですか」

患者の言葉だった。

患者が医者に、どうなるかを聞く、不安を取り除こうとする言葉だった。

「大丈夫、体のケアから君の体調回復、そして精神的な状態の完全回復まで全部僕が面倒を見よう」

カエル顔の医者はそういった。

その言葉に、舞月は頬を緩める。

「ありがとうございます」

「へえ？君もそういう言葉は言えるじゃないか」

カエル顔の医者はその言うと、踵を返す。

「君に面談だよ。…例の三人とちよつと、かな？多分、順々に来るだろう」

そう言つて、カエル顔の医者は外に出た。

——また、忙しくなりそうだ。

舞月はそう思つた。

廊下からは騒がしい音が聞こえてくる。

どうやら、三人全員鉢合わせしてしまつたようだ。

それで恥ずかしいのか、どういう順番で行くのか決めている。

…お？最初があの一方向通行か。

楽しみだなあ…

舞月はそう思いながら、時間の流れに身を任せる。

とおくから、それを見る影があつた。

形からして男と見えるが、その体は女のようなやつた。

銀色の長髪に、黒色の瞳。

そして、上から下までつながつたワンピースのような服をきた男。

もう一人の舞月。

その舞月は電話を取り出すとシャープを押した。

数回、一定のテンポを保ちながら押していく。

そして、そのあと、特殊な番号を押していく。

『舞月の調子はどうだ？』

とてもクリアな音声だった。同じ回線を使っているというより、特別回線を使っているとは思えない音声だった。

その音声に対しても、その舞月は軽い調子で言つた。

「うん？ああ、彼はこれから一か月ほど動けないよ」
『それは残念。彼にはお礼がしたかったというのに』
「お前がそれを言っていると嘘臭いぞ、アレイスター」
その舞月はそう言った。

『——ククク、そう言うな。』

学園都市暗部の『ジョーカー』——舞月、外樹」

——そして、物語は一年前にもどる。
異世界からとある魔術師が来た年でもあり、
舞月が本格的に動き始めた時。

時間を遡り、存在した世界の軸とはブレた世界が描かれる。
二人の“舞月”の物語。

終章「新たな日常」そして過去に遡る」(後書き)

今回でこの物語はおしまいです。

ありがとうございました！

最後の方、実は次回作への予告です。

次回作はこれの更新とほぼ同時に作りますので…

URLをここに書きます。

あと、あらすじのところにもURLを書きますので。

題名「二人の魔術師の住む世界」

URL: <http://ncode.syosetu.com/n67331/>

宣伝

オリジナル小説

「道並町魔術物語」

URL: <http://ncode.syosetu.com/n2541m/>

みなさま、これから私舞月をどうかよろしくお願いします。

この物語は最終的には31万PV、3万ユニーク、

総合ポイント500ポイント超えをしました。

とてもありがとうございます。

次回作も、これを読んでくださった皆様が読んでくださるようには、
では、また。

お知らせ

今度から、息抜き程度に短編とか投稿することにしました。

いきなりなんだ、と聞かれましたら、やはり外樹ばかりでは飽きるのです――；

たまには、舞月×神裂とか舞月vsアツクアとか舞月vsを書きたいのですよ！ この気持、解ってくれる人はいないのかああああああああああああああああああああ！

失礼しました。

取り敢えず現在執筆停止中なのはギアスと道並なのですが、ギアスは放置、道並は非公開にしようかと思ってます。

……ええ、分かってますよ。これを読んでくれている人が上に挙げ
たどちらも読んでいないことを。

話を戻しましょう。

オリジナルということ、道並がグッダ過ぎたので、いまは新しく一作書いてます。空想科学祭やってないのにオマエ何やってるんだ、と言われそうですが、いいのです。コレが俺のマイペースなのです。ネタとしては、昨日の夜三秒で描いた『ある人間の人生』の主人公を主人公にした小説、みたいな感じですよ。一度死んでからなんか復活して新たな世界で冒険、みたいな感じでやろうと思ってます。

えと、番外編の話でしたっけ？

で、先述したように、カプでもいいしバトでもokです。リクエス
トあったら感想をお願いします。

今度書こうと思っているのが、舞月VS騎士団長orウィリアム、
って感じです。

乞^うづご期待

お知らせ（後書き）

後日談1 〈One girl and a boy〉

舞月作玖は未だにカエル顔の医者の病院に厄介になっていた。

どのような事情があるのかはよく知らないが、魔術的なことにも詳しいらしいカエル顔は、精神面はとにかく肉体面でのリハビリを進めていた。あの戦闘でのダメージが酷かったのか、舞月の身体はほとんど動かなくなっていた。全身の骨にヒビが入り、拳脳に直接殴られたような跡まであるのだ。その状況から持ち直す舞月と、持ち直させたカエル顔は奇跡に踏み入った人間とも言えるだろう。

もつとも、一人は人間でもないが。

そんなリハビリ生活をおくっていた舞月だが、やはり飽きるのだ。いつもいつも男の顔ばかり見ていても、肉体・精神共に高校二年生の彼にとつてはとても疲れるのだ。たまに見舞いに来るのも建宮や初老の諫早、他に香焼に牛深と天草式の男性陣ばかりだ。たまに対馬が来てくれるのが、彼にとつては救いになっているようだ。

実は、イギリスではアニーゼと神裂とローラがかなりの接戦を繰り広げているため、彼とかなり繋がりがある女性は来ることができないだけなのだが。

と、そんな彼の病室が開かれて。リハビリは終わり、今日はあと一人で過ごすばかりという時に来るとは、建宮あたりかな？　と思いきちらに目を向け、

そこには、臍のあたりでシャツの端を結び、左側が太腿の部分でバツサリ切られた左右非対称なエロさを醸しだす今年で十八歳のウエスタンサムライガール、神裂火織がいた。

「お、久しぶりだな神裂」

神裂が来たことは想定外だったが、舞月としては来てくれたのが

神裂で嬉しかった。柔和な笑みを浮かべて彼は神裂を手招きするが、彼女はこちらには来ない。舞月はそんな神裂に疑問を覚え、はて自分は何かしたのだろうか、と思い首を傾げる。

神裂は舞月から目を逸らすと、申し訳なさそうに言う。

「……すいません」

「へ？」

唐突に謝られたことで、舞月は素っ頓狂な声を上げてしまった。以前の自分ならそんなことはなかったのに、と思いつつ、神裂の瞳をしつかりと見て、それに続く言葉を聞く。

「——私は、あなたのことなんて何も解ってはいなかった。その苦しみも、痛みも——！ 私は、あなたに合わせる顔がないんですよ」悲痛な叫びとも取れるその言葉を、一語一句しつかりと聞く。

「だから、これは最後のお別れです。——さようなら」

そう言つて、神裂は頭を下げるべくるとくるりと背中を向け、部屋を出た。残ったのは、ベッドの上の舞月だけだ。

——もう、何も帰つてこない。取り返しの付かないことになるぞ。いつだったか、同じ『舞月』とロシアの雪原で闘ったときに、その『舞月』に言われた言葉だ。その計画を実行したら取り返しの付かないことになるぞ。もう後戻りはできないぞ、と。

「——代償、か」

ハハッ、と彼は自嘲気味に笑う。そして、仰向けにベッドに倒れると、手の甲でその両の瞳を抑える。

人間として、彼は久しぶりに涙を流していた。

あれから数週間がたった。舞月の退院日には仕事がつつかりと入っていて、皮肉にも、その共同戦線を張る相手は——

「——お久しぶり、ですね。舞月さん」

「あ、ああ。久しぶりだな、神裂」

イギリス清教の聖人、神裂火織だった。神裂の言葉に若干の違和感を感じる舞月だが、もう帰っては来ない日常だったのだというこ

とを再確認すると、舞月は腰に下げた黒天邪刀を見る。対になるように、神裂の腰には七天七刀が刺さっている。

いま、彼らがいるのはロンドンの郊外だ。魔術都市ロンドンの近くでは、自然と魔術結社やその予備軍が集まるようで、彼らが殲滅任務を受けているのは、イギリス清教・学園都市共に害を与えるかもしれないという魔術結社だ。

聖人クラスの人物なら二人で十二分だ、と上は判断したようで、皮肉にもこの二人は巡りあわせてしまった。以前ならば、逆にこれが必然となるのだが、今回はただの『偶然』である。

取り敢えず二人は目的地に向かって歩き始める。ここから二、三キロ行けばその目的地にたどり着くハズだ、と舞月は思いつつ、辺りへの警戒を緩めずに歩いていた。――昔は、会話があったなあ、と舞月が思った時だった。

茂みから、矢が飛び出した。それも一本だけではなく、何十本、何百本と銀色の弾幕が張られていた。一瞬、『紅』の粒子を使うのかとも思ったが、舞月はそんなことはせずに黒天邪刀を抜く。それと同時に神裂も鯉口を切り、抜刀術の構えをとった。

「――唯閃」

「一閃――」

似たような単語を二人は放ち、神裂は一撃必殺の唯閃を繰り出し、舞月は空を縦一文字に斬る。瞬間、舞月の剣閃の延長線上にあった数百本の矢が塵と化し、舞月の周囲の部分だけ、弾幕がごっそりと剥ぎ落とされる。一方の神裂は、唯閃の風圧だけでその矢を吹き飛ばしたようで、神裂には傷一つついていなかった。

七天七刀を正眼に構えたまま、神裂は周囲を見渡す。神裂の背後に立つと、舞月も同じように辺りを見回した。

第二波が来ないことを確認すると、神裂と舞月は刀を収める。だが、その瞬間だった。

ドドドドッ！ と黒色の津波が彼らを襲った。

「な――んだと!？」

その光景に、彼は覚えがあつた。立ち会つたのはただ一度。あの雪原でもう一人の舞月が見せた、対軍魔術。一度の攻撃で千の兵士を殺すことができるその波を受け止める術は、全盛期の自分でも手こずるほどだ。――だが、決して受けとめきれないわけではない。

隣には、対神魔術を使える聖人がいる――！

「神裂、アレに向かつて唯閃を！」

「――はい、解りました」

ゆっくりとした様子で、彼女はその津波に向かつて体を向けて七天七刀を構える。――轟！ と襲ってくるそれに対して、音速を超えた一撃が両断した。一瞬、津波の一部分が吹き飛ばされ、青空が見える。だが、その物量もあつてか、それを覆い隠すようにまた黒い波が覆う。

刹那、きらりと何かが瞬いた。その刹那、空を裂くような紅い何かがそれを吹き飛ばす。神裂の唯閃の比ではなく、その津波は一瞬にして消え去った。

「相も変わらず、神の如き者の力は絶対的ですね」

「いいや。俺の体に宿ってるのはもうその『力』だけだ。後方の青色といい勝負だぜ」

神裂は後方に立つ舞月に言う。その背中から翼を噴出している舞月は、飄々と答えた。彼は今までこの翼を出すのに苦労すらしなかった。だが、今ではそれを出すことすら苦労する。体に貯蔵できる一天使の力>>テレズマ<<の量が限られている状態に陥ると、天使一体を体に納めるほどの力を要するのだ。

その点で考えると、サーシャ・クロイツェフは異例だということだが、舞月はよく解った。

今ままでは魔神の力を普通に使っていたが、それすらままならない。

（――オッレルスになんて言われることだか。まあ、アイツと並んでいるからまだいいんだけどな）

そう思うと、少しは気が楽になる。そう思いつつ彼は神裂を見る

と、齒軋りして拳を強く握っていた。

「——まただ」

「……神裂？」

「また、私はあなたに助けられる——！ 何故ですか、舞月。そこまで私を信用できませんか？」

顔を怒りに歪めて神裂は舞月を見る。だが、舞月はそんなことはないと言った振りで、

「一番手っ取り早い方法がこれだと、俺は思ってた行動し——」

「違うな。彼女が気にしているのはそのことではない」

唐突に、舞月の目の前には白い仮面をつけた男が立っていた。全身を黒いコートですっぽりと覆い、その両手は袖で隠れている。だが、仮面をつけた顔から伸びる銀髪は、見るものを感動させるようなものがあつた。真っ白な仮面のせいで、その男の表情は見抜くことはできない。口も隠れているのに、クリアな音声は舞月に疑問を抱かせた。

「つまり、だ。いまの一撃——唯閃だけで君たちは助かることが出来た。しかし、君は力に任せてアレを消し飛ばした。——つまり、無駄な行動なのだよ」

「な——そんな馬鹿な！ そうでもしなければ辺りに被害が——！」
男の言葉に舞月は激昂して反論する。だが、仮面の男はその言葉を鼻で笑つと、その袖から一本のナイフを取り出した。

「——辺りを見る。ここは——私>>オレ<<の世界。私たち以外に生物は存在せず、被害なんて及ばない」

その言葉で、ようやく舞月はあたりの様子を理解した。彼らが見たのは森の中だったはずだ。しかし、辺りは一面の荒野と化していた。一伽藍堂>>ガランドウ<<の世界。空には煌々と光を放つ月が浮かんでおり、果てのない地上で、彼らは立っていた。

神裂は、先程見た青空とは違う空に驚いており、舞月でさえ呆然

と立ち尽くしていた。その世界そのものに圧倒されている。そのことは、彼らが一番理解していた。そんな彼らを見て、仮面の男は笑みを浮かべたような気がした。

男は豹が疾走する直前のように低く身を屈めると、轟！ と舞月たちめがけて突き進む。その姿はさながら魔風のように、一瞬で舞月の目の前にたどり着いていた。

「ッ！」

目の前に迫った凶刃を、彼は首を振って回避する。後ろにいた神裂は舞月の横に回りこむと、居合い抜きで男の胴を割る。だが、男は舞月の肩を持って舞月の後方に飛ぶ。舞月は神裂の一閃を受けないうちに左に飛ぶ。三人の視線が一瞬交差して、舞月は抜刀した。

仮面の男は踵で地面を抉りながら急停止すると、一瞬で姿を消した。その瞬間には神裂の目の前に迫っており、神裂でさえその姿を捉えるのがやっとだった。横薙ぎにされたナイフを七天七刀で弾くと、男は残像すら残さず舞月に迫る。

舞月はそれを察知していたようで、男の腹部めがけて膝を突き刺した。――手応えがない！？

違和感に気づいた直後、彼は本能的に顔を下げていた。はらり、と彼の前髪が数本持つて行かれる。ナイフの動きすら見えなかったという事実、彼は驚きを隠すことはできなかった。

「――神裂！」

「七閃」

舞月の叫びに応じるように、動いたあとで若干硬直した男めがけて七本の刃が襲った。だが、その体が膨れ上がると同時に、彼の目の前からその姿は消える。そして、先程同様ナイフを握っていない左手を地面につけながら、踵でブレーキをかける男の板場所は、舞月の目の前から十メートルほど離れていた。

七閃をくぐり抜けながら、黒天邪刀を腰に構えて舞月は男の袈裟に斬りかかる。だが、それは彼のナイフだけで止められた。鋼と鋼がぶつかり合う音が数度響き、彼らは距離を取る。

——翼を使うか。

舞月はそう決心すると、神前に向かって声をかけようと首を曲げる。時間稼ぎのために、神裂に活躍してもらおうと思って彼はそうしようとして、止まった。本当に声をかけていいのか？ 声をかけるにしても、おかしいのではないか？

その疑問が、決定的な隙を生んだ。

「作玖、危ない！」

神裂の声が聞こえて、舞月は我に返った。だが、その時はすでに遅く、彼の目前にはナイフを構えた男の姿があった。その男は、最後に残念そうな表情を作ったような気がした。

「——失望したよ、舞月」

そう言って、男は舞月の左胸めがけてナイフを突き立てた。

——ああ、死ぬのか？

舞月はそう思って、そのナイフをしつかりと見ていた。死ぬ直前だからだろうか、時間がとても遅く感じる。その刃は虫が這っているように遅かったが、同時に、彼の動きもとても遅かった。死が近づいているせいだろう、と彼は思う。

神裂に、一言いっておきたかったな、と舞月は思った。

だが、彼の視界の端に淡い白色の肌とともに綺麗な黒髪が見えた。それが何かを理解する前に、舞月の体は突き飛ばされる。

そして彼が見たのは、自分が最も愛した女性が凶刃に貫かれる姿だった。

「か——神裂？」

直後、神裂の体は墮ちた。右胸に致命傷と思える傷を負って、鮮血を吹き出していた。その血は自分ではなく、ナイフを持った男に振りかかる。白色の仮面は赤染めにされ、ぼとり、ぼとりと血を地面に落としている。

仮面の男は舌打ちをすると、神裂の体を蹴り飛ばす。ごろごろと彼女の体は地面に倒れている舞月の目前に来る。生気を失った瞳を

持っていながらも、その黒髪は光を失つてはいなかった。だが、その光景は彼には信じられないものだった。

自然と涙が溢れ、彼の頬を伝って地面に落ちる。だが、失ったものは手に戻らない。

[illegible]

ほとんど力の入らない体は、結局神裂のところまで吹き飛ばされた。

「今、君にはするべきことがあるだろう」

その敵から放たれた言葉が、舞月には理解できなかった。男は指先で神裂を指すと、顔を舞月に向けた。

その言葉を信用するわけにはいかない。だが、そうでもしなければ本当に神裂は死んでしまうということを舞月は理解していた。だから、彼は神裂に向き直ると、黒天邪刀を地面に突き刺して両手を傷口に添える。

傷口に指を突っ込む。痛みで神裂が若干身じろぎするが、それ以外の反応を示さない。まるで死んでしまったかのように、だ。しかし、舞月はその体にまだ温もりが残っていること確かめると、神裂の体の内側に『紅』の粒子を展開させた。

—間に合うか？

いうのはいささか不可解だ。今の覚めた頭の自分ならよく理解できるが、先程の自分なら殺されているだろう。

神裂だけ活かしたいというのなら、自分を殺してからで良いというのに———と思い、彼は傷口に入れていた指の周りのほとんどが治っていることに気づき、ゆっくりと指を抜いていく。そして、傷口が完全にふさがると同時に、彼の指は傷口から抜かれた。

だが、一度止まりかけた心臓を持ち直すには、心臓マッサージが人口呼吸だろう。だが、その弾力のある胸部に触れるのは、舞月にはいささか躊躇われた。だから、それも躊躇われるが、彼は人口呼吸をするために神裂にくちづけした。

柔らかい感触。だが、それを感じるより先に舞月は息を吹き込む。神裂が一瞬、苦しそうに呻いた。

——助かる！

そう思い、彼は息を吹きこんでいく。体が密着していて、心臓の鼓動が舞月に伝わる。ゆっくりと、彼女の心臓が動き出すということとを理解して、彼は安堵した。唇を離す。舞月は神裂の体を数回揺らす。

「ん……え、み……づき？」

「か、神裂！ 良かった……助かった！」

上半身を起こして自分を見る神裂を、舞月は抱きしめた。神裂が驚いた様子で舞月を見下ろす。だが、彼女は自身の唇に残る湿り気を確認すると、とたんに顔を真赤にした。

「舞月、あなたはもしかして——」

「え？ ああ、仕方ないから人口呼吸を——」

瞬間、彼の頬に聖人の拳がめり込んだ。錐揉みしながら舞月は吹き飛ばされ、ゴロゴロと地面を転がる。すぐに起き上がると、舞月は驚いた様子で神裂を見る。

「いきなり何をするんだよ、火織！？」

「いきなり何も、他にも出来ることはあるでしょう！ 大体、なんで私を助けたんですか！？」

神裂はそう言つて舞月を睨む。だが、舞月はその問いに首を傾げると、すぐに答えた。――以前は言うことが当然だったが、今と過去では意味が全て違つてくる。過去はからかうため。今は――始まりのため。

「火織。俺はな、お前が好きなんだよ」

「それでもっ……！ 私はあなたの足手まといになるから――」

神裂に向かつて、舞月は叫んだ。ビクリ、と神裂の体が震える。今まで自分が伝えることができなかった思いを、彼は叫ぶ。

「俺は、一人の男としてお前を愛しているんだ！」

神裂は、そんな舞月の言葉が自分を突き刺す刃のように思えた。いくら彼が愛していても、いくら自分が愛していても、彼の足手まといになるのなら、彼を理解することができないのなら、意味が無い。だが、舞月は神裂に近づくと、抱擁した。

「頼む、俺に愛させてくれ。そして――愛してくれ」

舞月は、神裂の耳元でそれを言った。彼女の心が雪解け、本当にこれで良いのかと考えてしまう。

――でも、行けるところまで行つてみましょう。

「――愛しています、作玖」

そう言つて、神裂は舞月を抱きしめ返した。

「……あの、もう七分間たったのだが……」

血が全て拭き取られて白色に戻った仮面をつけた男が彼らに声をかけて、ようやく彼らは離れた。人に見られていたという事実で、彼等は周知に頬を染めて目を逸らす。男は空気を入れ替えるために咳払いをすると、ナイフを構えた。

先ほどとは違い、全身からは総毛立つ殺気が放たれている。ナイフは逆手に構えられ、仮面をつけた顔だけが彼らを見ており、その姿見は低く屈められている。今にも動き出しそうだが、それは微動

だにせず殺気を放ち続けている。

神裂は立ち上がると七天七刀を正眼に構え、舞月は腰のところに黒天邪刀を構える。ビリビリと張り詰めた空気がガランドウだった世界を満たしていき――弾けた。

轟！ と音を立てて男が舞月たちに進軍する。いつの間にかその左手には日本刀が握られていた。そして、その右手のナイフは音も立てずに光を放つと、その装飾だけは残し、黒色の刃を持つ日本刀へと姿を替えた。刀身が真白に塗られた刀と、真黒に塗られた刀を男は構え、まずは白の刀を一閃する。舞月がそれを受け止め、別の方向から神裂の七天七刀が襲う。それを黒の刀で弾いた瞬間、息もつかぬ速さで舞月は男に向かって斬りかかる。男は回転して下からそれを迎撃する。鋼が弾かれる音が響き、舞月の体が若干下がる。

男は遠心力を加えた一撃を、神裂の胴に叩き込む。横薙ぎに振られたそれを神裂は受け止めるが、そのままの格好で二メートルほど地を抉る。男は地面に刀を突き刺すと、それを軸にして回転して舞月の前に出る。そしてそのまま刀を抜いて、遠心力そのままに舞月に切り込んだ。舞月はそれを上に弾いてから空きの体を縦に一閃する。だが、男はそれをもう片方の刀で受け止めると、後ろに回り込んでいた神裂に向かって刀の柄を突き出した。

「ぐっ……」

腹部に直撃し、鈍い痛みを歯を食いしばって耐えると、神裂は男の頭部めがけて突きを放つ。かつて新選組が使ったとされる『平突き』というのは、刃を横にした突きである。それ以外は何ら変わらないが、回避されたとしてもその方向にむけて横薙ぎに出来るのだ。つまり、変形型の突き。

それを理解しているのか、男は刀を地面に突き刺し、それを支えにして上半身を反らす。男の仮面に刀が食い込み、顔の下半分を覆っていた仮面が真っ二つにされた。その頬にはシワ一つなく、これほどの実力を持っていながら、この男がとても若いということが解

った。

男は自身の刀の峰を蹴り飛ばして舞月の刃を弾くと、刀から手を離し、新体操のように蹴り飛ばした足を地面に付かせて体を起こす。そして、すぐに刀を地面から抜くと、そのまま男は姿を消す。それが先程までは行っていなかった残像すら起こさない高速移動だということを理解した舞月は、神裂がそう遠くない距離にいることを確認して、辺りを警戒する。

——右か？

だが、右からは気配は現れず、左からも現れない。この戦闘で下ということはありえない。となると――

「上か！」

「――！」

舞月が刀を構えて男を迎撃する。上空で受身は取れない。そして、振りかぶっている二つの刀――！

彼はそれを刀を横にして受け止める。ジリジリと火花が散り、両者の間で火花が散る。男の唇の端は嬉々と歪められ、戦闘に対する執着心を見せていた。

だが、決着はつく。

「――唯閃」

短く告げた言葉と共に、男の体が一閃された。神裂は峰を使っていたのだろっ、男の体は大きく吹き飛ばされ、二十メートルほど飛んでいった。それと同時に世界が元に戻り、男の体が樹に当たって止まる。

「終わった、か……。おいアンタ、一体何者だ」

刀を納めてから、舞月は仮面の男を見る。と、その仮面が音を立ててひび割れた。そしてそのまま亀裂は伸びて、ついに仮面を切り裂いた。そして、その下にある顔は、舞月も神裂もよく知る人物の顔だった。ただ、その黒色の瞳は猫のように細められ、本来黒目があった場所は全て赤く染まっている。その長い銀髪を掻きながら、その男は言った。

「……契約終了、か。久しぶりだ、舞月、神裂」

先ほどとは違う笑みを浮かべて、男——舞月外樹は二人に言った。

「外樹!？」

「外樹さん!？」

一度は立ち会ったこともあり、自身に右席として生きる道と、イギリス清教と生きるという二つの道を同時に行うことが出来る『穴』を教えてくれた人物。なんども稽古をつけてもらい、ローマ正教などの情報を横流ししてくれた人物。二人で別々の思うところがあるが、どちらにとっても恩人である。

しかし、その人物が自分たちの命を狙ってきたということが、彼らには信じられなかった。だが、そんな二人をよそに、外樹は首をコキコキと鳴らすと、ナイフを袖の中に収めた。

「まあ、この黒幕は天草式十字凄教とでも言っておこうか。確か、君たちの仲を取り持つ計画だったはずだぞ」

「え? ——火織、お前まさか?」

このことを話していたのか、と舞月が神裂を見ている。だが、神裂は無言で首を振って否定する。では、なんでそのようなことになったのか? と舞月は考えるが、

「——あの間の彼女の動きを見ているものがいれば誰だって解るだろうな。ただごとではなかったぞ」

にやついた笑みを浮かべて外樹が言う。遠まわしに二人を祝福しているようにも見えた。

「剣閃は狂っていて、頻繁に考え事をしていて、夜中に一人で考え込んでいて、たまには——」

「わーわーわーわー! ななっ、なんで知ってるんですか!」

顔を真赤にして神裂が手を振る。それを見て余計に外樹は笑みを深くすると、踵を返した。

「さて、私は戻る。——末長くな、お二人さん」

手を振りながら、外樹は彼らが向かおうとしていた方向に歩くと、すぐに身を屈めて、一瞬で姿を消した。圧倒的速度を改めて目の当

たりにして、舞月はもう一人の『舞月』の実力が、過去も現在も自身を圧倒していることを理解しなめす。

だが、先程の言葉が自分たちを祝福しているということを理解すると、若干の羞恥と多くの喜びで彼は笑みを浮かべる。

「火織——んじゃ、制裁にでも行くか？」

「ええ、そうですね。特に建宮は、以前のようなことをしでかす前に、ですね」

神裂も同様に笑みを浮かべると、二人は手を繋いでその森を後にする。後方では、青く彩られた空に黄金の花火が上がっていた。

後日談1 〈One girl and a boy〉（後書き）

取り敢えず締めが駄目だったなあ、と反省。

リクエスト募集中です。

P・S・ 次回はこの後日談の後日談を書きますので、リクエストを受けてもちと時間がかかるかもしれません。

宣伝

死んだ人間の二度目の人生
ジャンル：ファンタジー

URL：<http://ncode.syosetu.com/n7542n/>

宣伝2

二人の舞月の物語
ジャンル：SF？

URL：<http://ncode.syosetu.com/n67331/>

後日談1 〈Overwhelming power〉

二人が森から去ったということを確認し、外樹は神裂たちが潰すはずだった魔術結社の場所へ向かっていた。確かに、外樹が彼らを襲撃するのは天草式の計画だ。その中で起こることすらも綿密に計画した天草式の教皇代理、建宮斎字の能力には外樹は驚かされたが、その集中力が公務に向けば余程良いだろう、と外樹は思う。

だが、その後は彼の独断だ。というよりも、彼らがもう任務のことは忘れていると事前に思っていたので、後任としての役割を通信術式でローラに伝えておく

『ローラ、聞こえているか』

脳内で声を響かせる。既に回線はローラに繋いであるから、返事はすぐに帰ってきた。

『言いたいことはわかってるのよ。後任としての手続きは済ませておいたから、速くその大阿呆共を蹴散らしてきいしょんせ?』

『……了解した』

またおかしな日本語になっているな、と外樹は思いつつ回線を切る。そして、先程直したナイフをもう一度構えるとそれを変貌させた。この武器はただのナイフであるが、外樹の『絶対』の粒子を伝えやすく加工してある。そのため、外樹の世界を間髪入れずに上書きできるのだ。

今回彼が想像したのは、”一振りで敵を吹き飛ばす、神の使う剣”だ。自ずとそれはオリエント神話の中に出る剣になる。彼の脳裏には原点にして頂点とされる最上の剣『エア』が思い浮かべられた。それが形となって固定すると、ナイフの光が収まっていき、彼の手には、神々しい、白銀の光を放つ剣が握られていた。二メートルを超える刃渡りと、五十センチ程度の柄。大剣という分類に入るその剣の刀身はとても細く、ロングソードを彷彿とさせる。

だが、その圧倒的威圧感は消すことはできない。外樹の銀色の髪がその光りを反射し、森の中であるというのに、あたりは銀色の光を持っていた。

「——隠れてないで出て来い、貴様ら」

短く外樹が告げる。すると、木陰から一人、二人、と次々と人影が現れ、外樹の眼前に見える魔術結社のアジトと思える建物から、外樹を囲んでいた敵の倍近くの敵が表れ、彼らは腰に指していた剣や、持っていた槍を構える。一つ一つが魔術的な加工を施されており、一つは雷を纏っており、一つは炎を纏っている。

それ以外にも、眼に見えない加工を施されているであろう剣が、外樹に向けられていた。その群体の中から一人の男が歩み寄る。二メートルほどある身長と、がっちりとした体系。その肩にはバスタードソードが担がれていた。イギリス人とは違う顔の作りは、数々の国を渡ってきた外樹からしたら、スペイン系の顔立ちをしていると思わせた。

「貴様——その剣は、残っている伝承も数少ない剣だ。それを何故貴様が持っている」

流暢なスペイン語を使うその男は、バスタードソードを地面に突き刺すと、外樹の持っていた剣——エアを指差す。外樹はその問いに対して、そのまま質問で返した。

「これが私のものだからだ。——ところで、君たちはイギリスの間ではないな」

外樹がスペイン語で返答すると、その男——その周囲にいた男たちも、驚きを隠さずに表情に出す。どうやら、自身が外国から来たという事実を見透かされているということに驚いていたようだ。そんな男たちを樹にせず、外樹は続けていく。

「使っている魔術の術式もスペイン星教式。おそらく、貴様らは異端扱いされてこの国に来たのだろう？」

侮蔑の笑みなどは浮かべず、外樹は視線だけを動かし、男たちを

見回していく。全員が怒りで拳を握っていた。これだけの数が異端扱いされること自体が不可解だ。いったい何をしたのかと外樹が訊こうとしたところで、男たちを代表するように、先程のリーダー格が口を開いた。

「我々は——あの国を思つて切磋琢磨し続け、研究の集大成として一つの魔術を創り出した」

男はそう言うと、懷から数枚のカードを取り出した。カードと言つてもその一枚一枚がA4用紙ほどの大きさがあり、それにはびつしりと楔形文字が書かれていた。それを見ただけで、外樹はそれが『禁呪』に近いものだとして理解した。

「スペイン星教とそれに近いイスラム教、ゾロアスターとローマ正教の術式を混合し、それを一枚の紙に収めた。『絶対領域』と、我々は名付けたのだ」

男はその紙の一枚を掲げ、短く、何かを唱えた。それだけで甚大な魔力の奔流が発生し、男を中心に暴風が吹き荒れた。——否、男を中心にではなく、彼らが外樹を囲んでいた円に沿つて、円柱のように竜巻が出来ているのだ。超振動が起きているのか、キイイン……、と音が響いている。

「絶対領域の一つ、『刃』だ。これを吹き飛ばす道理などは存在しない。——恨みはないが、死んでくれ」

男は外樹に会釈すると、踵を返した。——仲間に来たかもしれない。惜しいことをした。

そう思い、彼は歩を進めようとした時だった。彼の仲間は、一步もその場を動かず、あの男に向けて視線を注いでいるということに死を確定した人物など見る気にもならず、今まではすぐにもどつていた仲間たちがそのような行動を取り、彼は疑問を覚え、振り向いた。

その途端、男の背中から八つの翼が飛び出した。それは一瞬にして竜巻を消し飛ばすと、地面を挟り、木を切り倒していく。それに当たるまいと翼の先にいた彼の仲間はそれを回避する。その光景を

見て彼は驚きを隠せない。自分たちの努力の集大成の一つが、一瞬で消し飛ばされたのだ。

相殺されたわけではなく、消し飛ばされたということはそれを圧倒的に上回る力を持っているということだ。それを理解した途端、男の背中に悪寒が走る。バスタードソードを抜くと、その切っ先を男に向けた。男の瞳は漆黒だったが、その白目には白銀の線が張り巡らされていた。

神の如き姿見。それはまさに、彼らの信じていた神のようでもあった。すでに戦意を喪失し、がっくりと膝についてガタガタと震えて祈っている者もいた。――神は、味方しているときは絶対的な力を奮ってくれる。だが、敵に回ったときは、一切の容赦なく敵を叩き潰す。

それをしつかりと理解しているから、男は二枚目、三枚目と二つの絶対領域を発動する。天壤の劫火――すべての生物・無生物含め、世界を焼き尽くす炎と破壊の雷が男に向けて放たれる。それは形を持ち、二つの竜となると、男に向かって突き進む。その先にいる仲間たちはそれを既に察知しており、それを避けて男にダイレクトに当たるように、障害物を即席の術式で吹き飛ばす。あたりが開け、炎竜が木々に触れると、一瞬であたりが炎に包まれる。

だが、男はそちらに手を向けると、それだけで二つの竜が消え去った。高速でその八つの翼が竜を喰らい尽くしたという事実を物語るように、龍の頭部があった空間の地面が八つの何かに挟り取られており、辺りを包んでいた炎は樹木ごと消し飛ばされていた。

ここにいる全員が創り上げた最高傑作が、一瞬で消し飛ばされた。それが、男たちには驚きにもなり、恐怖にもなった。

外樹は翼を消すと、自身の翼が白銀を放っていたことに対して仮説を立てる。自分が握っている剣は、天地開闢を起こすほどの力を持つものである。ならば、その力の純度の強さに自分の『起源』そ

のものが影響され、黄金が白銀になったのではないか、と彼は思う。それならば、この剣は圧倒的な力を持つことになる。それをこの者達に振るっていいのか、一瞬彼は躊躇った。おそらく彼らの瞳には、自身の姿が神のように映っていたりするかもしれないということを考えた外樹は、警告程度に済ませようと思い――咆哮して自身に斬りかかってきた男を容赦なく切り裂いた。

鮮血が飛び散り、彼の銀髪や剣が血を吸って赤に染まる。だが、外樹はそれで決断した。

その決断より速く、あのリーダー格がバスタードソードを天に掲げ、叫んだ。

「彼の者は我が神の敵だとみなす！ 総員、敵を容赦なく殺戮せよオオオおおおおおおおおお！」

その声と同時に、男たちが同時に声を上げて外樹に進軍する。それをみて、外樹は怒りに顔を染めた。

「――勝てないと解っていないながら、挑んでくるな！」
一閃。

それだけで、彼に刀を振りかぶっていた者たちは全員吹き飛ばされた。宙を舞っている中で、その体が光の粒となる。次に斬りかかってきた者を迎撃していく。一種の芸術とかしたステップを踏みながら、彼は降りかかってくる血を気にもせず、敵を殺していく。最高クラスの体術と、世界最高の剣は歯車が噛み合ったように綺麗な弧を描いていき、敵を切り刻んでいく。

上から飛んできた刀を弾き、蹴り飛ばすと刀を構えていた敵の仲間の槍に貫かれる男を、後ろに立つ敵ごと一閃し、体を二等分させる。そこを狙って襲ってきた雷を纏う剣は、その腹を手で止めて、エアの柄で敵の顔面を殴る。顔面が歪み、よろけたところを斬る。回転してその遠心力を乗せた剣閃が男たちを斬り、そのうちの一人はその後ろに立つ男の突き出した槍で止めを刺される。そこまでして飛んできた槍を外樹は軽く避けると、それを後方に立っていた敵

に当て、それが死亡したことを確認するとエアを前に突き出して、脚力そのままに前進する。

ドドドドツ！ と彼の体が突き進み、その先にいた敵が空中高く放り上げられる。外樹は踵でブレーキをかけ、剣を肩に担ぐと、地を蹴って一瞬で空中の男たちの前に出ると、”空中でジグザグに方向転換して”敵を切り殺す。地面に降り立つと同時に、外樹は目の前に迫った敵の槍を弾くと、エアの柄の先端——尖っている箇所 で心の臓を貫く。

その体を密集地に投げ込むと、将棋倒しのように敵が倒れる。一番下にいた者は助かっているが、その上にいる者は全員武器で貫かれている。

外樹はそんな者たちには目もくれず、三桁あった大群を見渡す。既に三十程度に減ったその群を見て、外樹は刀を正眼に構えた。今まで見たことのない構えに、男たちは一瞬ひるんで、後ずさる。それが敗因となったのだろう。否、それでも、彼らの敗北は決まっていたのだろうか。

「天地開闢の力——貴様らの手向けの花だ！」

そう言って、外樹はエアを地面に突き刺した。

そして、空には花火が上がったように白い円筒状の何かが上がっていった。一瞬で消滅させられた男たちの死体などは、確認するまでもなく、例外なく消えていた。

後日談1 〈Overwhelming power〉（後書き）

取り敢えず、自分が即効で書き上げたものに乗せました。

これで前回予告していたアレは更新完了。ということで、リクエスト募集中です。

ジャンル・CPは問いませんが、舞月作玖、もしくは外樹の方が主役となるようなリクエストをお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2229k/>

とある魔術師と能力者達

2011年2月15日01時25分発行